

TOKAI UNIVERSITY ARCHITECTURE YEARBOOK 2022

東海大建築ブック

建築都市学部 建築学科 作品集 vol.42

contents

004 学科紹介
About the Department

006 建築都市学部について：岩崎克也（建築都市学部長）
007 建築学科について：渡部 憲（建築学科長）
008 学びの分野、学びのスケジュール
010 Topics

7・8 semester

012 卒業設計
Graduation Design

038 インタビュー：松本乙希（2022年度 TD賞・KD優秀賞受賞）
039 インタビュー：太田 匠（2022年度優秀学士設計賞・KD奨励賞受賞）

040 研究室紹介 01：岩崎克也（学部長・教授／計画系）
041 02：河内一泰（特任准教授／計画系）
042 03：野口直人（助教／計画系）
043 04：山﨑俊裕（教授／計画系）
044 05：後藤 純（特任准教授／計画系）
045 06：十亀昭人（准教授／計画系）
046 07：小沢朝江（教授／計画系）
047 08：渡邉研司（教授／計画系）
048 09：稲益祐太（特任准教授／計画系）

1・2 semester

050 建築デザイン演習1-2
Architectural Design 1–2

052 建築デザイン演習1-2「建築デザイン1-2で学ぶこと」
054 建築デザイン演習1 第2課題「小空間の設計」
057 建築デザイン演習2 第1課題「光の空間」
062 建築デザイン演習2 第2課題「コドモノイス」
067 建築デザイン演習2 第3課題「空間の分節とかたち」
073 建築デザイン演習2 第4課題「価値の転換」

3・4 semester

076 建築デザイン演習2-3
Architectural Design 2–3

078 建築デザイン演習2秋 第1課題「光の空間」
083 建築デザイン演習2秋 第2課題「コドモノイス」
087 建築デザイン演習2秋 第3課題「空間の分節とかたち」
091 建築デザイン演習2秋 第4課題「価値の転換」
096 建築デザイン演習3 第1課題「非日常としてのTea House」
100 建築デザイン演習3 第2課題「変わりゆく生活と境界をデザインする」
104 建築デザイン演習3 第3課題「広く立体的であること」

5・6 semester

110 建築デザイン演習4-5
Architectural Design 4–5

112 建築デザイン演習4 第1課題「シモキタ・スモールリノベーション」
117 建築デザイン演習4 第2課題「シモキタ・サテライトキャンパス」
122 建築デザイン演習4 第3課題「自然と建築」
127 建築デザイン演習5 第1課題「湘南メディアライブラリー」
133 建築デザイン演習5 第2課題「青山・コマーシャルコンプレックス」

138 研究室紹介 10：諸岡繁洋（教授／構造系）
139 11：山本憲司（教授／構造系）
140 12：野村圭介（講師／構造系）
141 13：渡部 憲（学科長・教授／材料施工系）
142 14：横井 健（准教授／材料施工系）
143 15：高橋 達（教授／環境設備系）
144 16：山川 智（特任教授／環境設備系）
145 17：篠原奈緒子（特任准教授／環境設備系）
146 18：竹下 秀（准教授／環境設備系）
147 19：中野淳太（准教授／環境設備系）

148 近年の卒業設計・卒業論文・修士論文の学外受賞者
150 建築学科教員・非常勤講師一覧（2021~2022年度）
151 卒業後の進路



About the Department

東海大学建築都市学部建築学科

Department of Architecture, Tokai University

本学科は最前線で活躍する建築家を招いた少人数設計教育が特色です。優秀作品を集めた総合講評会を年2回開催し、海外建築研修旅行など国際性を得る機会もあり、多くの作品が国内外で賞を受賞しています。『東海大建築ブック』は、設計課題の優秀作品の紹介の他、学科トピックス・インタビュー・研究室紹介に加えて卒業後の進路も掲載しており、学科・進路案内としても活用ください。

The quality of our architectural design education is achieved by small-group classes with cutting-edge architects, as well as the biannual “Super Jury Program” and overseas study tours. In addition to the selected students’ works from the previous year, this book contains introductions to our department and laboratories, interviews, and career plans.

建築都市学部について

「Needs」と「Seeds」／未来に向けたデザインは「Seeds」を必要としている！



岩崎克也
IWASAKI Katsuya
［学部長・教授］

社会や人が認識している顕在的な要求を「ニーズ」といい、認識していない潜在的な要求を「シーズ」といいます。ここでいうシーズは「種」のことです。

種だけ見ても、この種がどのような実を結ぶのか、その魅力や可能性を想像することは難しいことです。だから、種から果実を育て社会に示し、その価値を問うのです。振り向きもされない果実もあるかもしれませんが、多くの人が欲しがるような夢や感動を与え、ライフスタイルを変えるような特別な果実もあります。

シーズから生まれた私たちの身近な例としてはアップルのiPhoneなどがあげられます。

これらの言葉は、本来マーケティングの用語ですが、2つの違いは視点の主体が「受け手側」か「創り手側」かです。どの業界でもクライアントなど受け手のニーズに応えているだけではイノベーションは生まれません。私たちはクライアントファーストだけに頼ることなく、創り手がシーズを積極的に見出し、形あるものに実を結ぶことで未来をデザインすることができると考えます。

「ニーズ」と「シーズ」どちらの思考も大切です。新設の建築都市学部で、蒔かれる多くの「種」たちは、将来、一体どのような果実となって社会に対してその価値を問うのでしょうか？ これは、私の楽しみのひとつです。

建築学科について

2022年度から新たなスタートを切った建築都市学部建築学科



渡部 憲
WATANABE Ken
［学科長・教授］

入試と育成する人材

まずお伝えしたいのは、入試において文系科目での受験も可能となったことです。新しい建築学科では、『3つの専門力「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」を、カリキュラムの柱（コース）とし、文系・理系の枠にとらわれず、社会・生活の「変化を捉える力」を備え、新しい視点をもって地域と社会の発展に継続的に寄与できる人材の養成』を目指していますので、文系の皆さん、理系の皆さんともにウエルカムです。

学びのポイント

1、2年次はコース分けを行わず、3つの専門力（基礎）を学ぶための科目を開講し、2年次終了までに修得してもらいます。適切な単位取得により、二級建築士受験資格を取得単位の部分で満たすことができます。

3年次以降、個々の学生は自身の基軸を3コースのいずれかに定めますが、一級建築士受験資格を満たすために基軸コース以外の科目も履修可能です。これにより、基軸1コースの専門力（発展）をより高めつつ、他2つの専門力（発展）も修得できます。

学生の皆さんへ

大学ではさまざまなことにチャレンジしてください。「できないと思うから、やらない。」「やったことがないから、やらない。」「面倒だから、やらない。」ではなく、「まず、やってみよう。」の気持ちが大切です。皆さん1人ひとりが、大いなる可能性を秘めています。「学生（OB・OGも含めて）・教職員、総活躍学科」を目指し、皆さん、大いに大学生活を楽しんでください。

学びの分野 Field of Architecture

建築学科で学べること

建築学は、設計、計画、歴史、構造、施工、材料、設備、環境などの分野から成り立っています。4年間を通じて、まずはさまざまな分野をまんべんなく学び、高学年へ進むにつれ自分の適性に応じた分野をより深く学んでゆきます。技術の進歩、環境の変化、社会の変化を捉える幅広い視野と、建築学の幅の広い専門性を兼ね備えた柔軟性に富んだ人材を育成します。

建築学の専門知識・技術に加え、総合大学のメリットを活かした他学部の科目履修により、社会学・経済学・歴史学・環境科学などの幅広い視野を獲得できます。

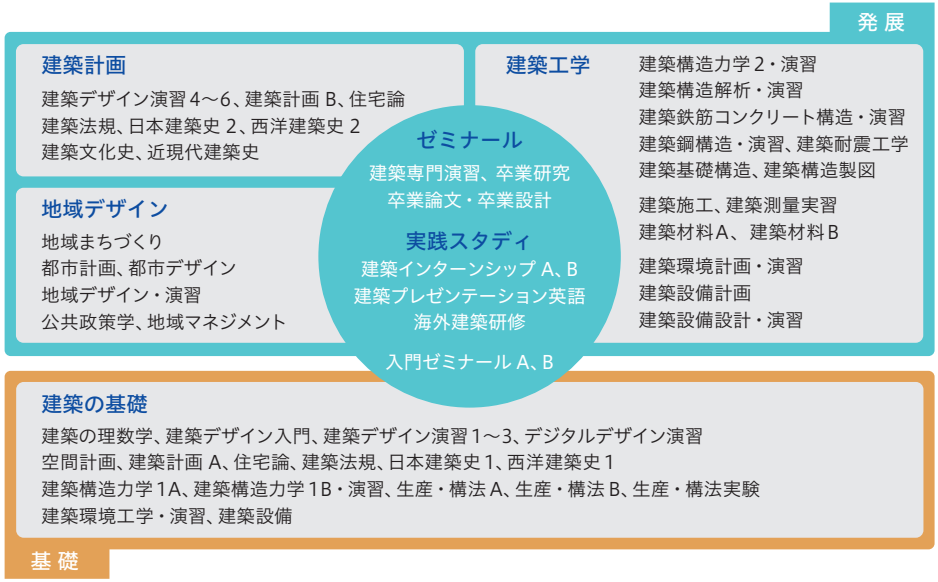
また、2022年度カリキュラム生より、「工学部 建築学科」から「建築都市学部 建築学科」へと変わります。学べる内容が大きく変わるわけではありませんが、「建築工学」「建築計画」「地域デザイン」をカリキュラムの柱とし、文理融合の視点に基づく専門性を身に付けたい学生を、高校までの文系・理系を問わずに募集します。

現役の建築家や専門家による実践的な講義

講義や演習を充実させるために、実学としての教育を行っています。専任の教員は、豊富な研究・教育経験をもっていますし、今も建築家としての仕事をしている者や、教員になる前に企業で実務経験を重ねてきた者も多数います。さらに、実際に各分野の第一線で活躍されている建築家や専門家の方々を非常勤講師として多数迎えています。

豊かな感性をもった人材を育成

1. 都市・建築を創るための幅広い専門知識と職業倫理を取得する
2. 空間創造のための3次元思考力と、CADやハンドワークによる表現力を身に付ける
3. 文系・理系・芸術系の垣根を越えて多様な分野を学ぶ
4. 多彩な演習科目を通じて、問題意識をもって学問に取り組む



学びのスケジュール Curriculum and Career

4年間で獲得できる力

1. 建物のかたちや構造・環境などの仕組みを理解する力
2. これからの住まいのあり方について考える力
3. 自分の考えを適切な言葉と視覚的表現で人に伝える力

●1年次 1〜2セメスター 入門的科目

語学や現代教養科目を修得するとともに、「建築デザイン入門」などで建築の入門的な知識を学びます。また、製図・造形などの設計演習、空間計画の初歩座学、建築構造の力学演習、建築材料や構法に関わる初歩座学など、専門分野の導入科目を幅広く体験します。

●2年次 3〜4セメスター 基礎的科目

建築の基礎を幅広く学び終え、その後、自分の指向する分野を選択し発展的に学び始める過渡期となる学年です。設計演習では、自主設計が活発に始まりますし、「生産・構法実験」などの実験科目もあります。また、建築計画、建築史、建築法規などの初歩座学、構造力学の応用演習が始まります。夏休みまたは冬休みを利用して、「海外建築研修」も開催されます。2年次までの科目をまんべんなく修得すれば、「二級建築士」の受験資格を得ることが可能な時間割モデルを組んでいます。

●3年次 5〜6セメスター 専門的科目

4年次の卒業論文や卒業設計の指向する分野をふまえながら、より専門的に発展した科目を学びます。夏休みや冬休みのインターンシップ体験を単位として認定する「建築研修」も開講されます。

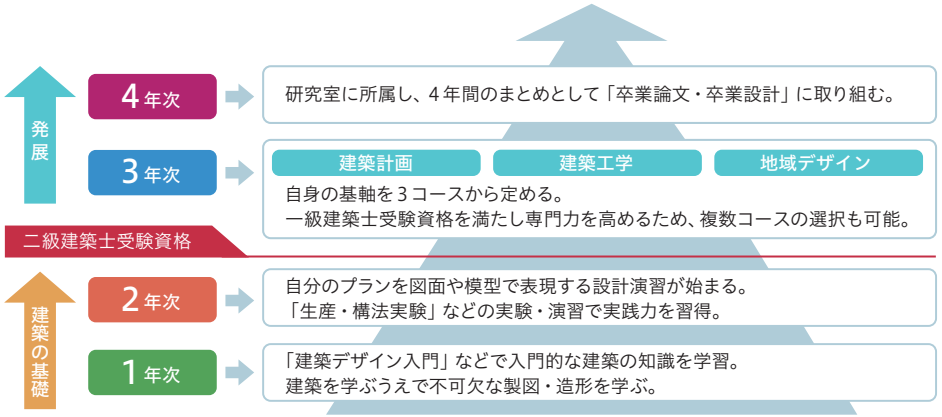
●4年次 7〜8セメスター 研究・制作

建築学を学んだ集大成として、研究室に所属して卒業研究に取り組み、「卒業論文・卒業設計」として成果をまとめて提出します。

就職・資格など

主な就職先は、ゼネコン、サブコン、住宅メーカーなどの建設業界です。製造業、不動産業や、各自治体役所などの公務員も人気です（卒業生の主な就職先はp.151を参照）。

指定科目を受講することで「二級建築士」や「木造建築士」の受験資格を取得でき、さらに「一級建築士」受験資格を得ることも可能です。また、学芸員課程を設け、資格を取得できる環境も整えています。



Topic

建築都市学部オープニングセミナー

世界TOPランナーによる連続セミナー

本セミナーは建築のデザインだけでなく、2022年度開設の建築都市学部の理念や教育・研究活動を周知するとともに、建築にまつわる企業や行政、大学などの研究機関の識者らとそのあり方を考える機会とすることを目的としたものです。「Linkage 人・建築・都市を○○でつなぐ」を共通テーマとして今年度から23年度まで合計9回の講演を企画しており、建築、構造や設備、まちづくり、照明、ランドスケープなど、建築や都市の世界で活躍する9名のトップランナーをお招きしてこれらの世界の広がりと面白さを伝えていきたいと考えています。

これまでの、講演テーマは以下の通りです。

第1回

「建築と都市を切る／つなぐ」

講師：山梨知彦氏

株式会社日建設計
CDO常務執行役員・チーフデザインオフィサー

第2回

「『こもれび』の透過性を生み出す幾何学と力学」

講師：佐藤 淳氏

佐藤淳構造設計事務所、東京大学准教授、
スタンフォード大学客員教授

第3回

「光を操り、風を促す環境デザイン・エンジニアリング」

講師：荻原廣高氏

環境デザインエンジニア・アラップ・アソシエイト、
神戸芸術工科大学准教授、東京藝術大学非常勤講師、
芝浦工業大学非常勤講師







Topic

東海大学地域連携プロジェクト

神奈川県住宅供給公社伊勢原団地リノベーション「東海大学シェアドレジデンス」

東海大学と神奈川県住宅供給公社は、2020年度から建築学科学生・教員有志により、伊勢原団地12号棟を本学学生向けにリノベーションする地域連携プロジェクト（東海大学シェアドレジデンス）を進めてきました。学生3チームが取り組んだ各提案をベースに、納谷建築設計事務所（本学科非常勤講師）が実施設計を担いながら設計会議に学生も参画し、実施設計後、施工現場見学（2021年11月）等を経て、2022年3月に完成、4月から学生入居が始まりました。

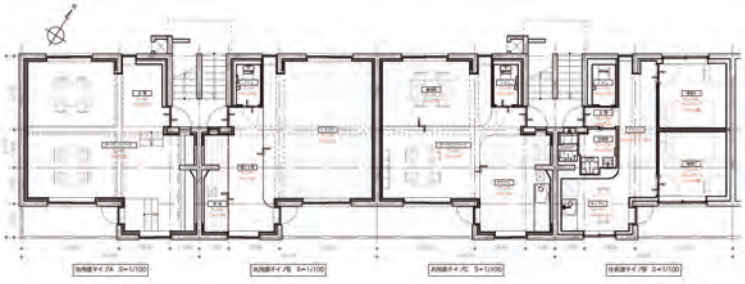
レジデンスは2人1部屋の専用住戸ユニット29戸（住戸仕様：個室2、ユニットシャワー、洗面台・トイレ、専用キッチン等を完備）で、1階共用空間には土間づくりキッチン・多目的スペース、管理スペース、フローリング仕様スタジオ等が整備され、入居学生のコミュニケーションの場の他、団地・地域住民との交流の場としても利用が想定されています。共用空間や庭の使い方は、今後、入居学生のDIYによる家具・テラス製作等で、豊かな生活景が形成されることも期待されています。


シェアドレジデンス外観（写真：神奈川住宅供給公社）


共用部フロアリング仕様管理室（写真：神奈川住宅供給公社）


共用部の土間床（写真：神奈川住宅供給公社）


住居部（写真：神奈川住宅供給公社）


共用部・住戸部平面図（提供：納谷建築設計事務所）



7・8 semester

卒業設計

Graduation Design

4年生になると半年間卒業研究を行い、残り半年で卒業論文または卒業設計として提出します。卒業設計を選択する学生は、自らテーマを決定し、敷地やプログラムのサーベイ（調査）を行って、卒業設計作品を提出します。ゲスト審査員を迎えて行われる卒業設計発表会は、建築学科最大のイベントのひとつです。

Graduation Design, a whole academic year dedicated to architectural research and design, culminates with the final presentation in front of the jury.



真鶴を継ぐ

修繕によって蘇る採石場の新たな風景

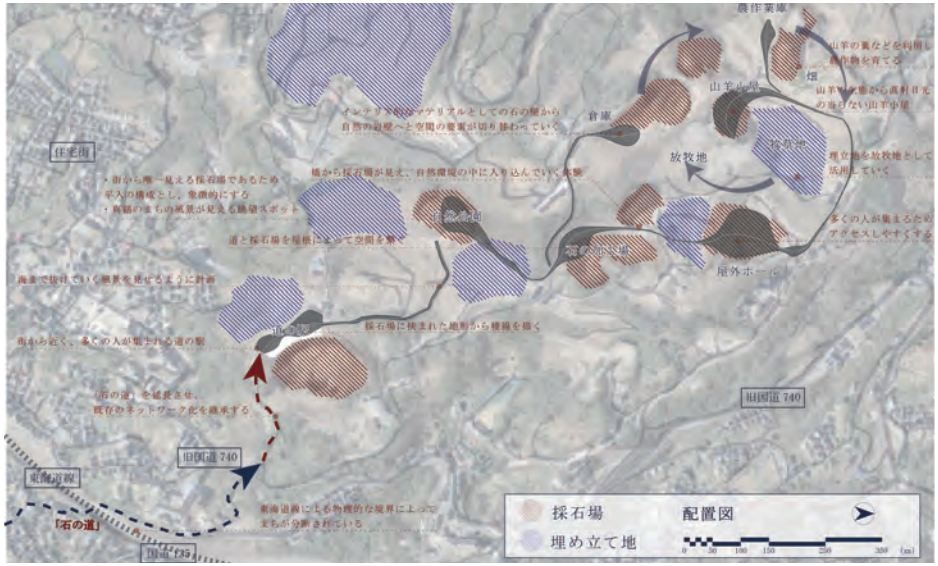
松本乙希

MATSUMOTO Itsuki

［野口直人研究室］

陶器の修繕方法である金継ぎの特性を用いて、傷となった採石場を継いでいくことで真鶴に新たな風景をつくっていくことを提案する。採石場同士をネットワーク化していき真鶴の山に壮大なランドスケープを構築していく。それにより空間の修繕だけでなく歴史や環境文化なども継承され、新たな風景が描かれる。

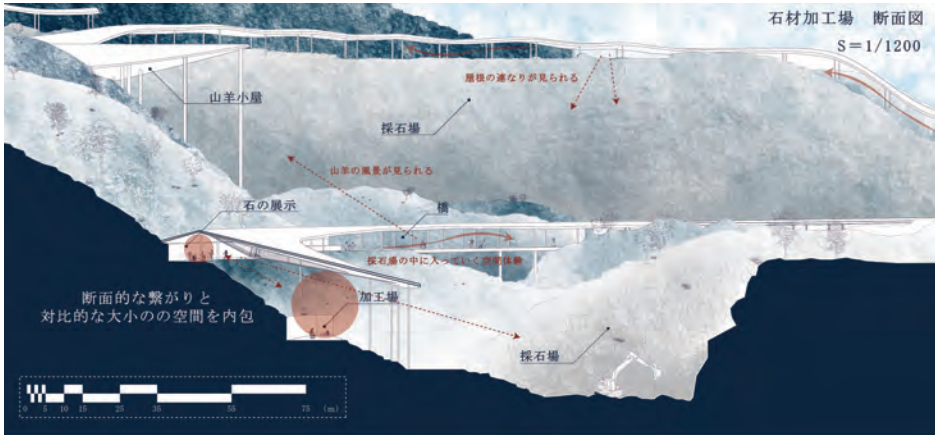
TD賞（最優秀学士設計賞）、KD優秀賞、JIA神奈川・卒業設計コンクール出展、近代建築掲載



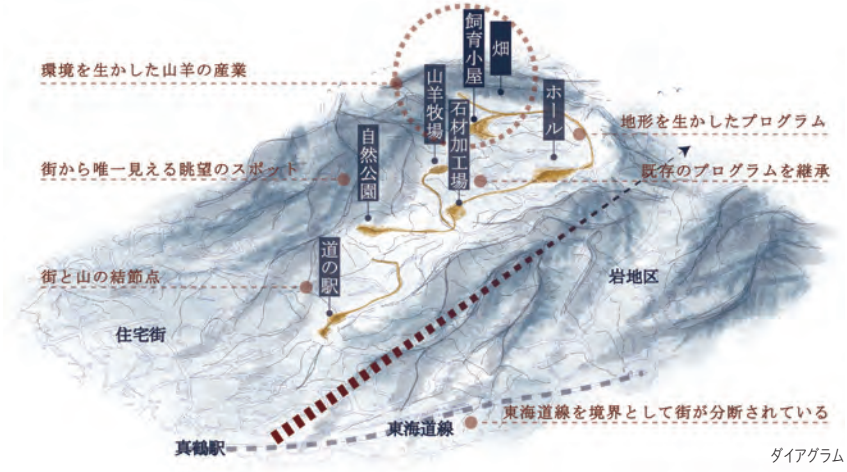
図面



道の駅の内観



断面図



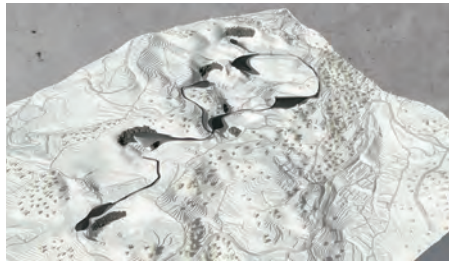
ダイアグラム



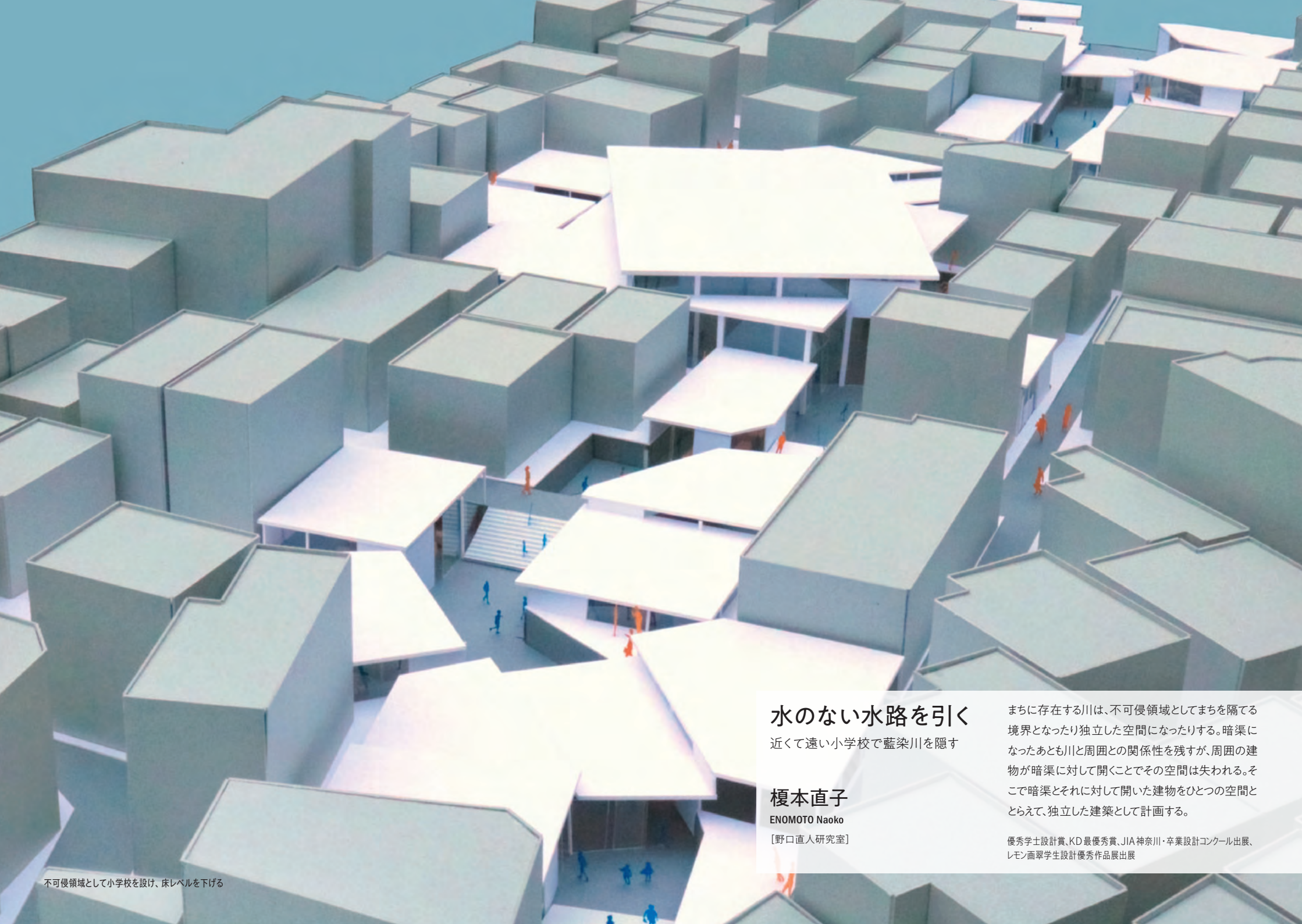
橋模型写真



ホール内観



全体模型写真



不可侵領域として小学校を設け、床レベルを下げる

水のない水路を引く

近くて遠い小学校で藍染川を隠す

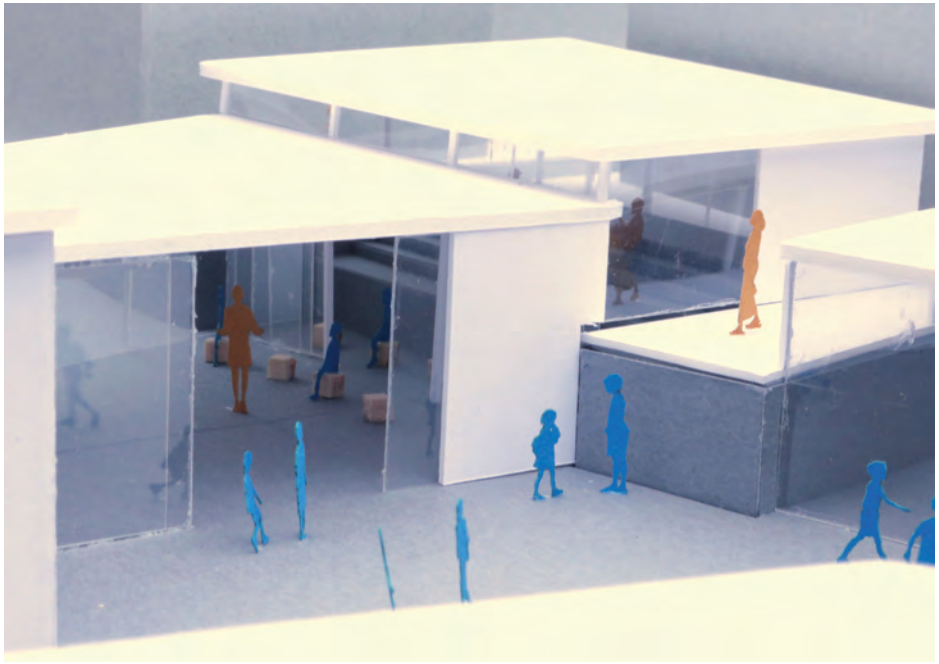
榎本直子

ENOMOTO Naoko

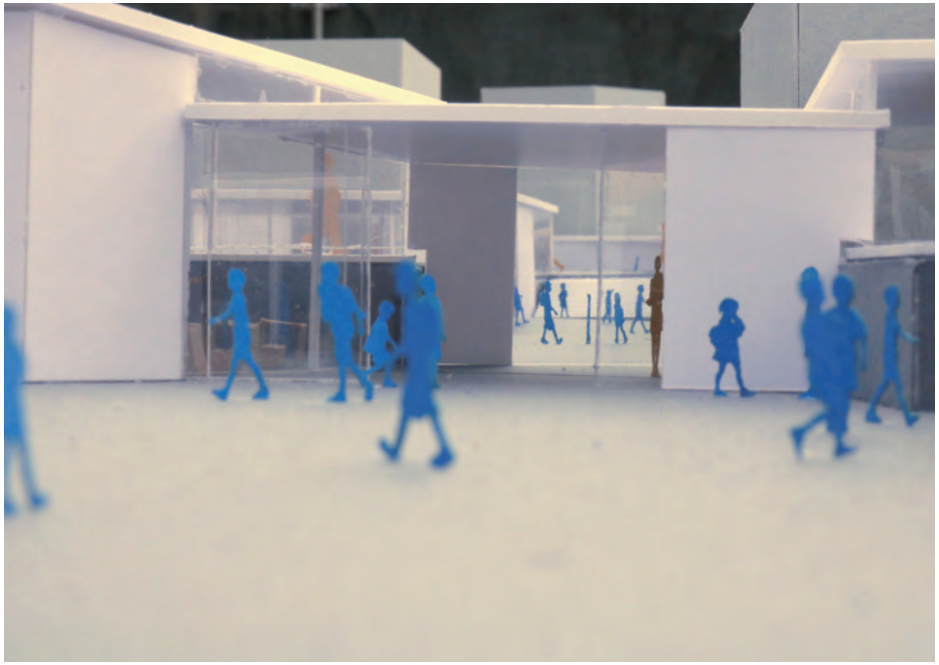
［野口直人研究室］

まちに存在する川は、不可侵領域としてまちを隔てる境界となったり独立した空間になったりする。暗渠になったあとも川と周囲との関係性を残すが、周囲の建物が暗渠に対して開くことでその空間は失われる。そこで暗渠とそれに対して開いた建物をひとつの空間ととらえて、独立した建築として計画する。

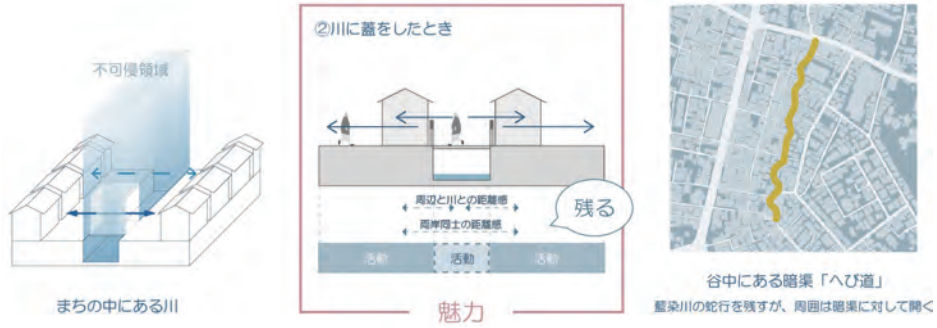
優秀学士設計賞、KD最優秀賞、JIA神奈川・卒業設計コンクール出展、レモン画翠学生設計優秀作品展出展



暗渠と教室がつながる



川がもつ線状の空間が残る





周辺と小学校の間の余白は地域の場所



階段状空間で地域が小学校に近づく



小学校と地域の余白



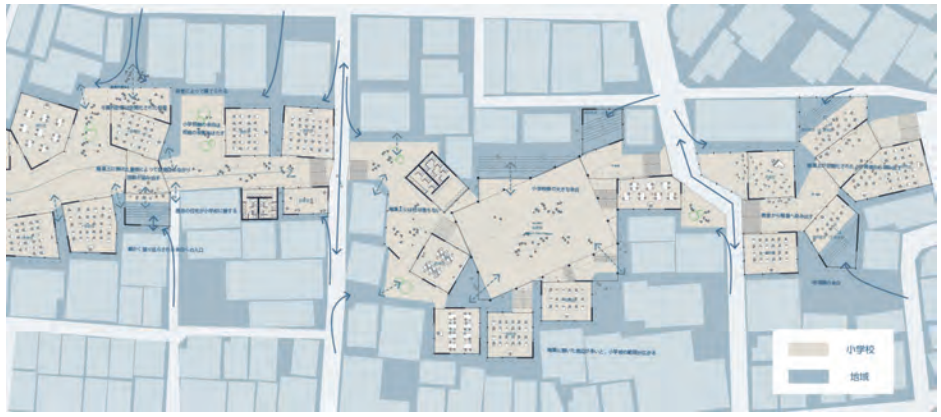
小学校側の余白は校庭の役割



大きな半屋外空間で小学校が地域に近づく



対岸同士の距離



配置図兼部分平面図

弔いの聚落

空間化された墓の群で成す、新たな都市のランドスケープ



弔いの聚落

空間化された墓の群れで成す、
新たな都市のランドスケープ

太田 匠

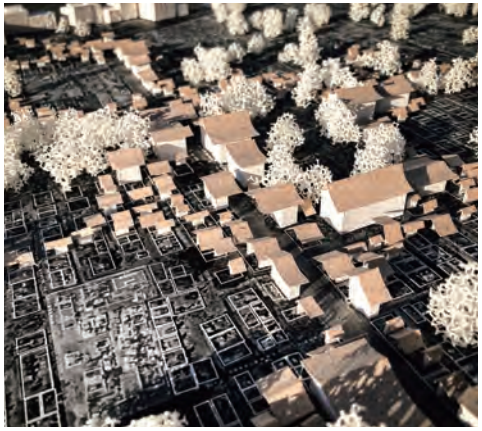
OTA Takumi

［野口直人研究室］

私たちの身近に在りながら覆い隠され閉ざされてきた“墓地”に空間的価値を見出し、そのシステムを用いた建築群をもって新たなランドスケープとして提案する。墓から生まれる小さな建築が壮大な公共空間を構成するこれからの墓地の可能性を示唆するとともに、今後の葬送空間との向き合い方を問うものである。

優秀学士設計賞、KD奨励賞、JIA神奈川・卒業設計コンクール 銀賞



















認知外境界を解く

グリッドフレームによる
高密度ビル群の一体化

五十嵐拓巳

IGARASHI Takumi

［野口直人研究室］

独立した箱が積層され密集するオフィスビル群にて、壁や床等などの境界をグリッドフレームにより再編し、既存環境にはない関係性を生む。人々はさまざまな尺度の境界を操作し、単調なビル群の中に緩やかにつながる・大胆に広がる空間を創る。やがて、ビル群は一体化し、新たな営みのサイクルを街区中に創出する。

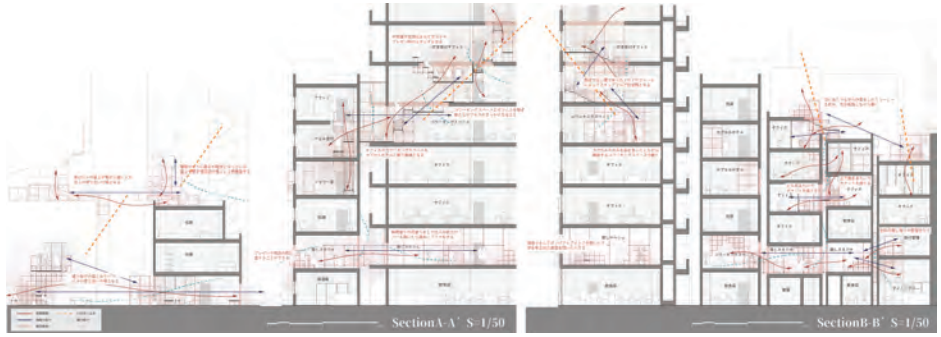
優秀学士設計賞



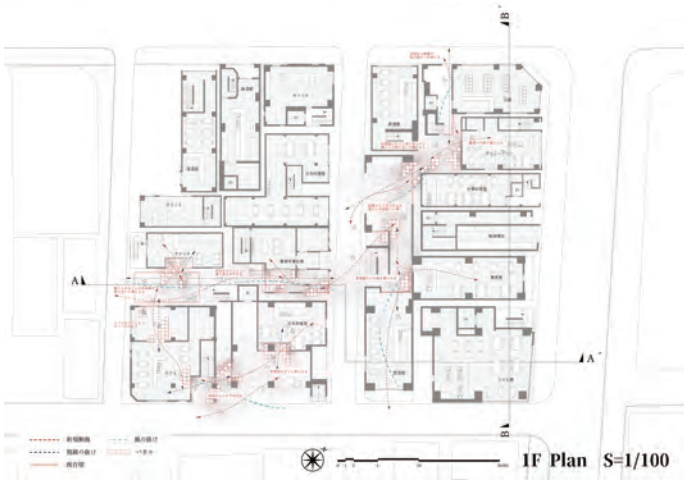
3つのビルに囲まれる暗所を開いた寄合の場



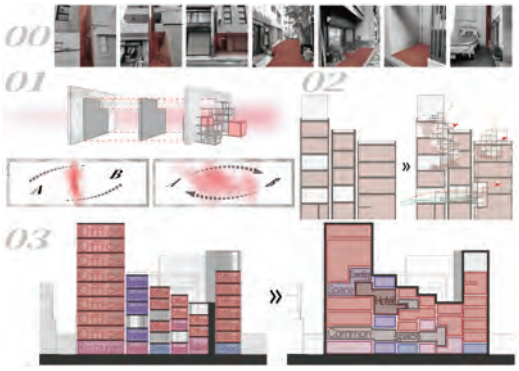
住人や働く人、カフェ利用者などが集まるウラミチ広場



断面図



平面図



ダイアグラム



視線を制御しつつ外部環境を取り込むオフィス



小さな商いが集まるマルシェ



断面パース

雑踏の間隙

空間エッジによるマチの多義的な図書館

後藤龍之介

GOTO Ryunosuke

［野口直人研究室］

人は空間のエッジを抽出しても空間を認識できる。待つ行為の身体動作と体験をエッジ空間に落とし込み、内部や外部の認識を同時に獲得することでエッジによる多義的空間を誘発させる。待つ行為が生み出すパーソナルな時間が、本とともに豊かな空間をつくり出し、雑踏な都市における多義的な図書館となる。

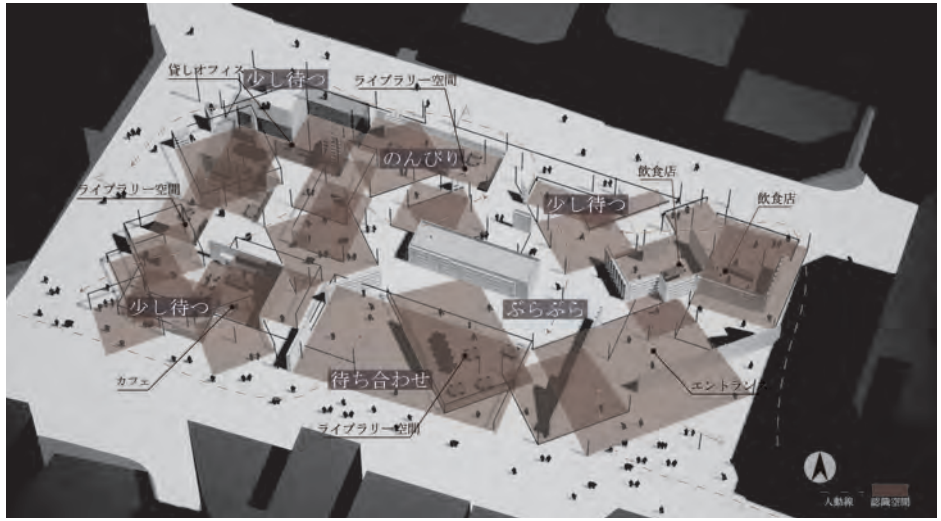
優秀学士設計賞



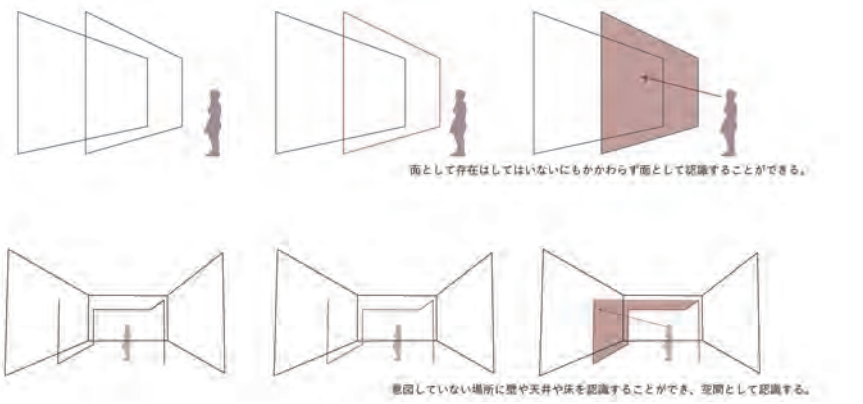
大空間に潜む見えない面



オフィスと図書空間



平面パース



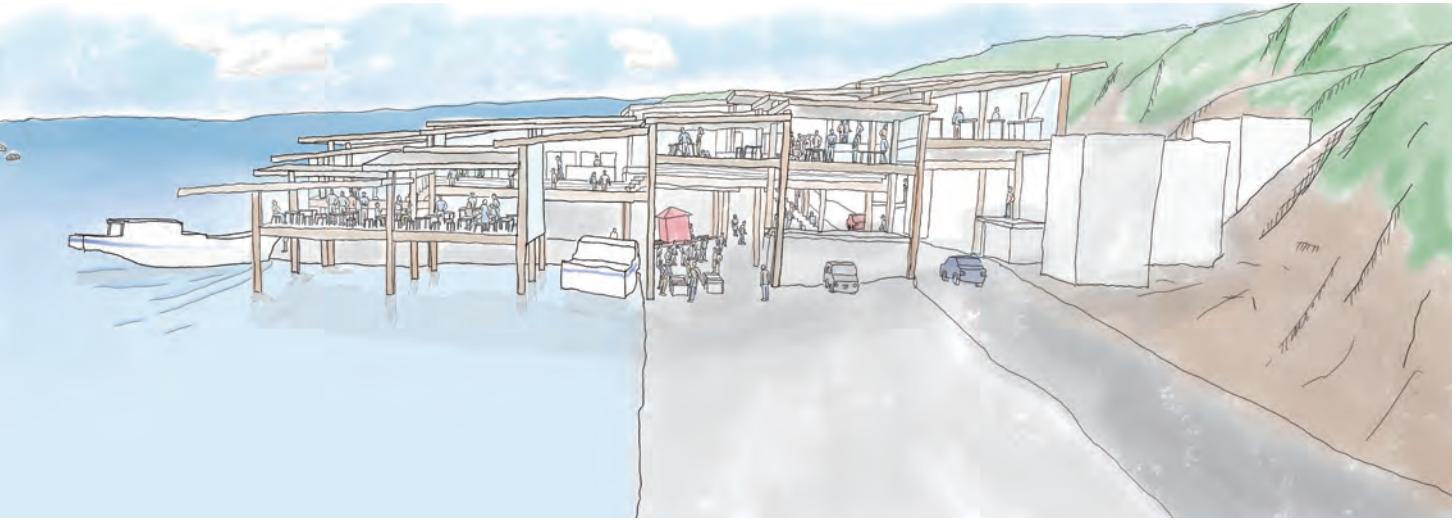
面を補完するエッジ

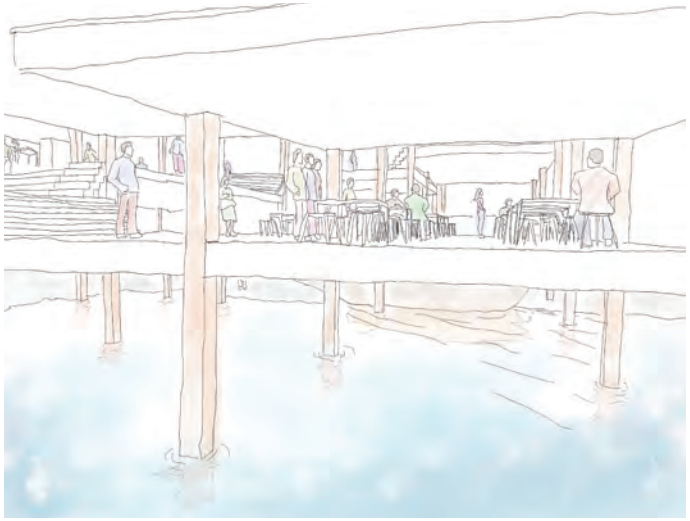


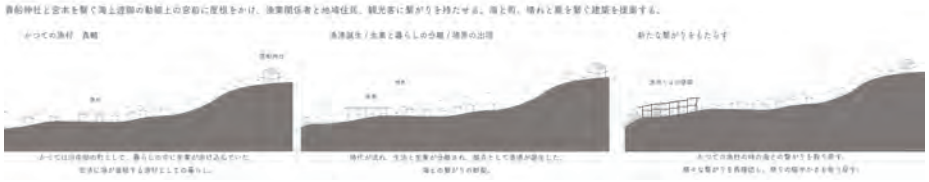
空間に現れるエッジが内外の中間領域を生み出す



空間体験







奇縁

「晴れ」と「褻(け)」のエレメントによる
真鶴港の再興

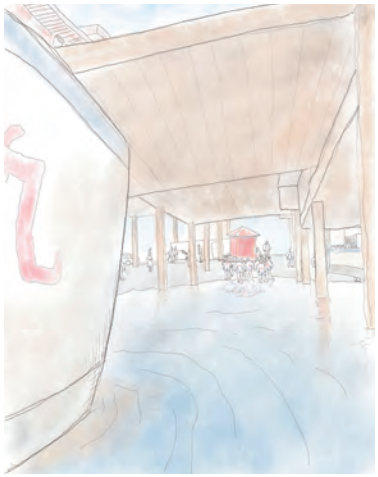
北村 陸

KITAMURA Riku

[河内一泰研究室]

真鶴町に晴れと褻を横断する建築を計画する。真鶴町は縁が紡いできたまちである。人々の温かい縁、豊かな自然との縁、そして神様との縁がこのまちを育ててきた。衰退していくまちに人々のつながり、自然とのつながり、神様とのつながりを、まちの未来に残す。

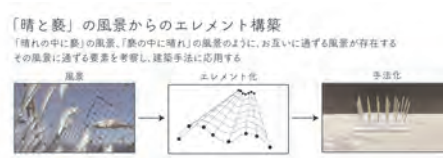
特別審査員賞

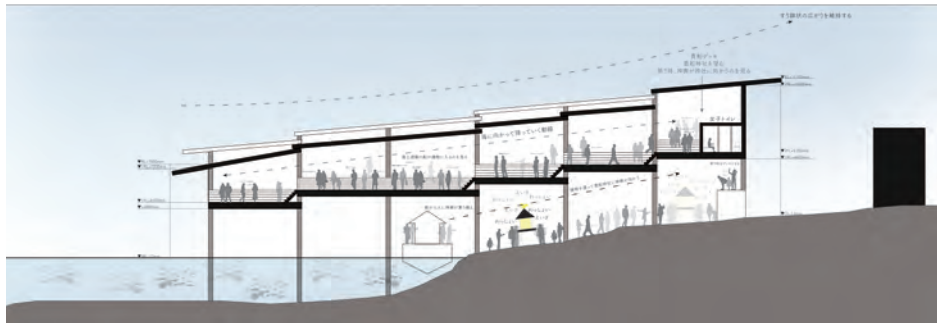














残像交互に滲む

水彩の特徴を応用した空間設計

金 雪寅

JIN Xueyin

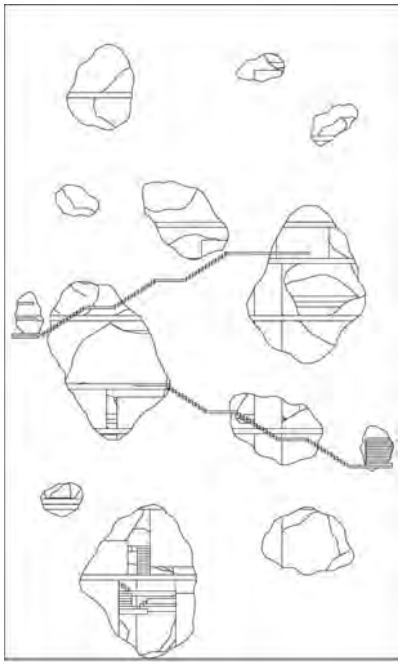
［野口直人研究室］

銀座に立つ美術館の提案である。デザインは水彩の特徴から発想した。水彩画は透明や色の重ねにより、明暗や色を構成している。この「重ね」と「透明」を美術館建築に応用し、銀座のまちを構成する建物形態と合わせて、空間が緊密につながる、深さのあるファサードを提案した。

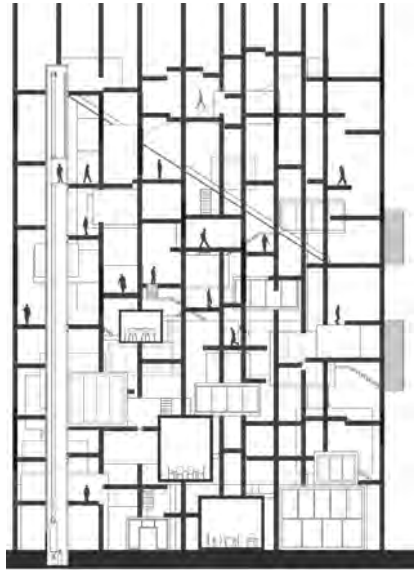
KD特別賞



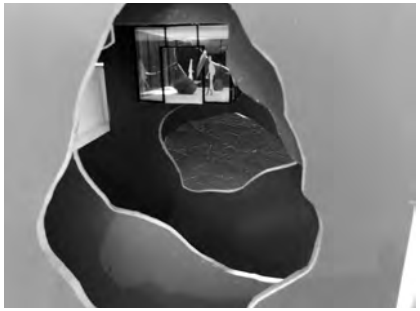




立面図



断面図

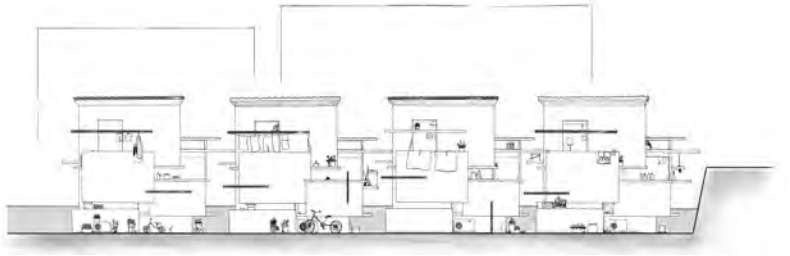












模型写真および断面図

内と外が反転する空間

積層と連続する囲碁の手の具現化







村上主雅

MURAKAMI Kazuma

［岩崎克也研究室］

内と外が明確に分かれている建築は、まるで黒石と白石で領域が分かれている囲碁のように感じた。囲碁では一手で形勢を逆転できる手があり、それは小さな手法の連続で起こっている。囲碁の手法を建築の手法に置き換えたとき、同じように建築内外の反転を起こすことで面白い空間がつくれるのではと考えた。

TOP10

暮らしを纏(まと)うまち

多様多大な壁での住み方



多種多様に使われる壁



暮らしの集積がまちに場をつくる

木村莉彩

KIMURA Risa

［野口直人研究室］

表面積の多い壁で住宅群を形成し、暮らしを表出させる提案。壁やスラブの重なりによって生まれた多種多様な空間は、暮らしの表出を促す。まちに表出した暮らしの一つひとつが、まちの要素となり、その集積がまちに場を生み出す。住民の暮らしが主体となってまちを形成していくことで、豊かな暮らしが育まれていく。

TOP10





模型写真および北側入り口・公園側パース

図書空間を媒介とした町コミュニティの再編

静的空間から動的空間へ

齋藤大雅

SAITO Taiga

［河内一泰研究室］

子どもの居場所となる公園が、時代の変化によって居場所になりにくくなっている現状にフォーカスし、「公園と図書館の中間のような空間」を神奈川県横浜市にある公園を敷地とし提案した。公園で遊ぶ感覚で利用できる図書館をイメージし、新しい公共の形を目指した。

TOP10



平面図



東側俯瞰パース





空間の派生

佃島の失われた領域の価値を提案

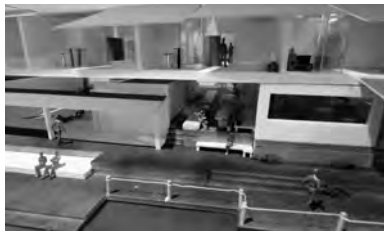
徳留慶太郎

TOKUDOME Keitaro

［岩崎克也研究室］

空間には視覚だけでなく、聴覚、嗅覚、触覚を刺激するものが点在している。佃島の五感を感じることのできる特徴的な空間を抽出して、地元と観光客に向けた建築空間に再構築する。佃島の環境と共存しながら、まちが発展することができるものだと考え提案を行った。

TOP10





松本乙希さんが卒業設計で「毎日·DAS学生デザイン賞」を受賞。

── 卒業設計はどのように考えましたか。

野口研究室では、体験や興味といった自身の根底に宿るものを構造化し、メタファー的に建築に応用していきます。そこで壊れた陶器を大事に継いでそこに新たな風景を創る「金継ぎ」に着目し、現代のリノベーションに一石を投じたいと考えました。また真鶴の石材業は自身の親戚が営んでいるのですが、現在さまざまな背景から衰退の一途を辿っています。そのため今後の産業遺構としての在り方を考える必要があると考え、卒業設計のテーマとしました。

── 設計を行う際に大切にしていることはありますか。

初期段階で敷地模型を大きな範囲でつくることだと思います。敷地には長い歴史や文化などのソフト面と地形や道などのハード面が存在し、それを模型化していくことでまちの個性が浮き彫りになり、リサーチの解像度が上がってきます。

── やりきれなかったことはありますか。

学部3年まではやりきれないことばかりでした。考えすぎて手が動かなくなり、完成度が低かったです。でも野口先生に思考と形を横断的にしていくことを教えていただき、少し設計するのが楽になりました。しかし今でもそれは私の課題です。

── 今後建築とはどうかかわっていきたいですか。

今後も卒業設計と同じような、まちにとって負とされるようなものを建築の力によって蘇らせていきたいです。修士のテーマでもこのような研究をしていくつもりです。



松本乙希

MATSUMOTO Itsuki

2018年東海大学付属相模高等学校卒業、2022年東海大学建築学科卒業。2022年度TD賞およびKD優秀賞受賞。JIA神奈川·卒業設計コンクール出展、『近代建築』掲載、日本建築学会 全国大学·高専卒業設計展示会出展、全国合同卒業設計展55選、赤れんが卒業設計展101選、毎日·DAS学生デザイン賞「佐野正一賞」受賞。東海大学大学院進学。

太田匠さんがJIA神奈川·学生卒業設計コンクールで銀賞を受賞。

── 受賞した感想は?

正直、まったくの予想外でした。学内の評価でも、万人に受け入れられる提案ではなく、ごくごくマイノリティに共感してもらえるそんな作品だと理解していたので、審査員の中に私の作品を推してくれる方がいたというのは僥倖に恵まれました。受賞という形で手伝ってくれた先輩·後輩に多少なりとも恩返しができたのならば幸いです。

── 卒業設計で一番心掛けたことはなんですか?

3年間の設計課題では良くも悪くも70点キープのような設計をずっとしてきました。そこで得られたこともありますが、それがコンプレックスでもあったので卒業設計は0か100のような個性丸出しの、東海大学らしくない作品をつくることを心掛けていました。

── 卒業設計をまたやりたいと思いますか?

思いません(笑)。もちろん、自分の好きなように設計できる機会なんて最初で最後であり、まったく違う設計をしてみたらといった気持ちもありますが、1回しかないからこそ選ぶテーマを吟味して、1回しかないからこそ、あれだけサーベイやスタディに心血を注ぐことができたと思っています。現に後悔なんて無いと言い切れるようにあの1年間を過ごしていたので、卒業設計は見に行く分で結構です。

── 今の建築への興味は?

学生のころは建築家をまったく知らず、自分がどこを目指していくのか分かっていないところがありました。今は設計事務所で建築の実務に触れながら、どのようなスタンスで設計している人がいるのか、建築とどうかかわっている人がいるのか勉強し、今後の選択に活かして自分の建築との向き合い方を見定めていきたいと考えています。



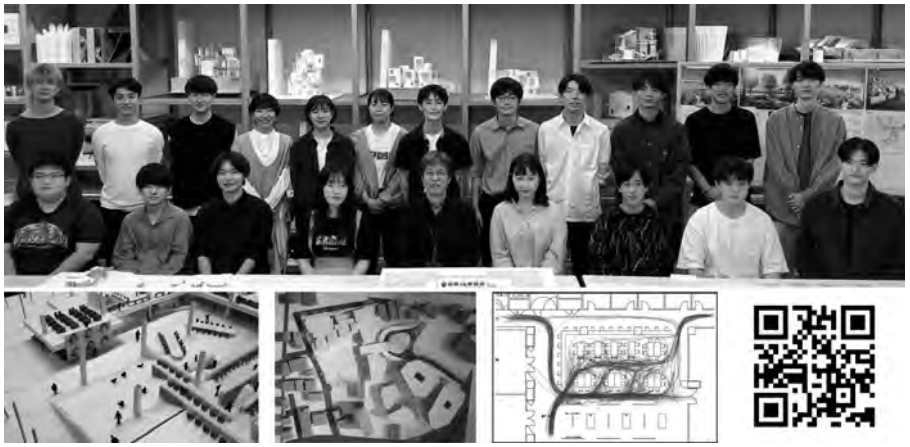
太田 匠

OTA Takumi

2018年静岡県立掛川東高等学校卒業、2022年東海大学建築学科卒業。2022年度優秀学士設計賞およびKD奨励賞受賞。JIA神奈川·卒業設計コンクール出展(銀賞受賞、JIA全国学生卒業設計コンクール出展)。2022年より設計事務所勤務。

研究室紹介 01　laboratory 01

ゼミは「Inspire」と「Experience」の場



上段：2021年度岩崎研究室（建築専門演習生含む。前列中央が岩崎先生）
下段：大学・行政・企業連携の各プロジェクト

岩崎克也

IWASAKI Katsuya

［学部長・教授／建築設計・都市デザイン］

1964年千葉県生まれ。東海大学大学院工学研究科博士前期課程修了。1991年より株式会社日建設計勤務・建築家。設計部長を経てダイレクターアーキテクト。主に大学キャンパス計画を中心に設計を行い、BCS賞、建築士会連合会賞、図書館建築賞、他多数受賞。2020年建築学科教授、2022年建築都市学部長・プロフェッサーアーキテクト・ユニバーシティービューロー付。著書に『未来を拓くキャンパスのデザイン』（彰国社）。詳細はhttp//www.iwasakilab.com/に記載。

建築を統合的に捉え、遠くの射程を目指す

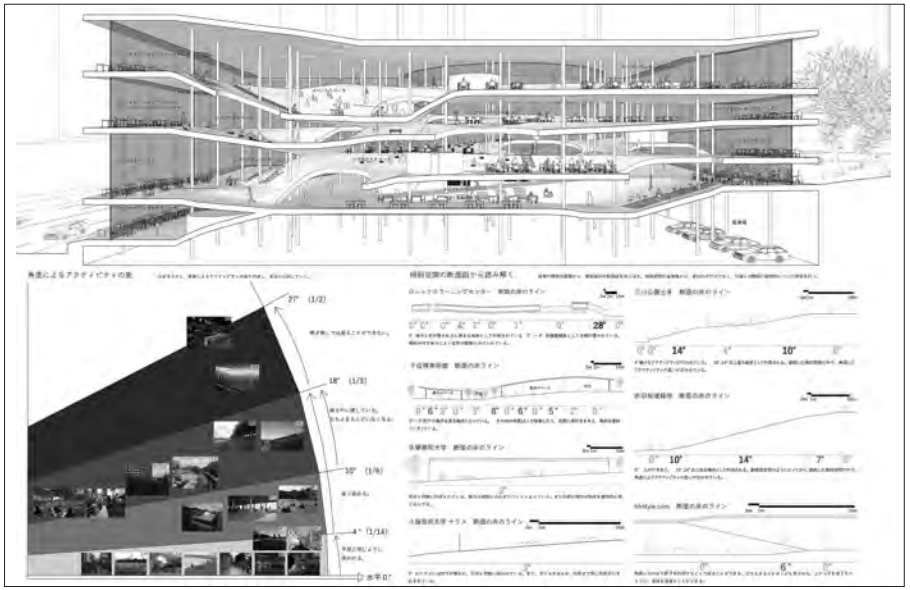
建築の設計はデザインだけでなく、あらゆるものが総合的にも求められます。そこに建築を創る意義や価値をはじめ、独創性や社会性、コンセプトの力強さ、造形力。さらには、構造や設備、ランドスケープといった分野を統括する力が必要です。皆さんもぜひ感性を研ぎ澄ませて、好きな建築空間の中に身を投じて自問してみてください。設計を通じて「自分の目指すものは何か?」を良く考え、できるだけ遠くへ跳躍してほしいと思います。ゼミ活動や卒業設計の創作を通じて「建築デザインの面白さ」をInspireしていきます。

プロジェクトを通じたワクワク体験を共有

「建築から都市を、都市から建築を考える」。これが私たち研究室の基本となるテーマです。この考え方を実践の場に連動させ、研究室では大学院生を中心に具体的なプロジェクトに参加をして一緒に建築の計画に取り組んでいます。考えたものが形になって出来上がっていくプロセスを通じてワクワク・ドキドキを一緒に体験しています。この試みは活きた教材であり他にはないExperienceです。また、プロジェクトと関連して湘南キャンパスをモデルとしたアクティビティ（人の活動）の調査・分析を形につなげる研究を並行しています。

研究室紹介 02　laboratory 02

建築の「かたち」について考える



岡田優希さんの修士設計プレゼンテーションパネル

河内一泰

KOCHI Kazuyasu

［特任准教授／建築設計・都市設計］

1973年千葉県生まれ。1998年東京藝術大学美術学部建築科卒業。2000年同大学院修了後、難波和彦＋界工作舎入所。2003年河内建築設計事務所設立。2012–2019年東海大学非常勤講師、2019年より現職。2002年SDレビュー新人賞。2009年AR award入賞。2013年日本建築学会作品選集新人賞。2015年JIA新人賞。2019年AR HOUSE AWARD Commended受賞。

河内研究室は建築のデザイン（かたち）について研究、実践を行う研究室です。建築は廃墟になっても使われ方が変わっても、その形と空間性は残ります。研究室では「かたち」のもつ働きや空間性を研究し、設計へ展開させる活動を行っています。

僕自身は大学で教えながら自分の事務所での設計活動を行っており、同じように「かたち」についての研究と実践をしています。昨年度の修士設計（岡田優希・2021年修了）の学生は「傾き」について研究を行いました。床の傾きによって人間のアクティビティが変化することについて、日常のまちの風景から事例収集を行い、数値化と分析をし、その原理をもとに設計を行いました。研究室の学生には足を使って実際の空間を体験し、頭で考え、手を動かして形をつくりながら将来自分がどんな建築をつくりたいのか見つけてほしいと考えています。

研究室紹介 03　**laboratory 03**

既成概念を疑い、自分なりのデザイン思想を確立する



ゼミでのエスキスの様子（右が野口先生）

野口直人

NOGUCHI Naoto

［助教／建築設計・都市設計］

1981年神奈川県生まれ。2000年東海大学付属相模高等学校卒業、2004年東海大学工学部建築学科卒業。2006年横浜国立大学大学院修了後、2006–2012年SANAA勤務を経て、2013年野口直人建築設計事務所を設立。2013–2015年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手、2014–2017年東海大学非常勤講師、2016–2017年横浜国立大学非常勤講師、2017年より現職。

「従来の設計の手法と違う観点から建築をデザインすることはできるのか」をテーマに、あらゆる事象を横断的に考えて新しい価値観を確立しようとする研究室です。

建築とは一見関係のない個人的な興味や経験の分析から始め、何に価値を抱くのか、それはなぜなのかを徹底的に問い、皆で議論します。そのようなプロセスを経て浮かび上がった独自の価値観を普遍的な言語にすると、他のカテゴリーにおいても共有できるようになります。そしてその言葉を使って既存環境を再評価し、喩えてみます。「建築の瞬き」「空間を食べ比べる」「街を着崩す」など、従来の設計では扱われない言語で表現することで、都市や建築に新しい概念を与えるのです。何気ない環境が自分にとってはすごい可能性を秘めているかもしれない。言葉からカタチを創り、またカタチから言葉を明確にしてゆく。その繰り返しはワクワクするような作業です。

このように個人的な思想をもって既成概念を取り払うことが、最終的に都市や建築の新しい可能性、そして新しい出来事を創造することにつながると考えているのです。

研究室紹介 04　**laboratory 04**

建築環境の原点を自問しながら、滑っても前に進む



研究室の集合写真（前列中央が山﨑先生）

山﨑俊裕

YAMAZAKI Yoshihiro

［教授／建築計画学、環境心理・環境行動学］

1958年京都府生まれ。福井大学建築学科卒業、東京都立大学大学院博士課程修了。東京都立大学移転準備室・非常勤講師、東京電機大非常勤講師、職業能力開発大学校専任講師、東海大学助教授を経て、現職。著書に『フィールドワークの実践』（朝倉書店）、『建築系学生のための卒業設計の進め方』（井上書院）など。計画・設計に「植草学園大学新棟、同図書館棟」、「千葉市南小中台保育園」（こども環境学会デザイン奨励賞受賞）、「くず葉学園通所活動棟」など。

精神分析医ドナルド・ウィニコットは、環境の原点を「抱えられること」、「良好な環境は無意識化される」と述べていますが、建築計画学では建築規模・機能・空間構成の望ましいあり方を考えること、そして建築の使われ方に関わる問題点・課題解決に向けた提案を行うことが目標の一つといえます。個別化・多様化する人の行動や意識、価値観を捉えることは大変難しいことですが、少なくとも不幸な建築をつくらないためには何をなすべきか、

日々自問し、ゼミ生にも面倒臭い？問題提起をしております。研究室では「愛ある弄りはOK」を標語にし、「滑っても前に進む（某お笑い芸人の言葉）」を旨としていますが、実際の研究活動では学校・生涯学習施設、医療・福祉施設、庁舎などの調査研究の他、大学・保育園・障がい者施設の建築計画の実践・建築設計支援活動などを行っています。

本格的な人口減少時代に入った現在、広域的な視点から近隣自治体とも連携し、公共建築再編計画にかかわる研究にもチャレンジしています。

研究室紹介 05　laboratory 05

それ、熱く語れるのか？



学生と都市デザイン調査をまとめ中の様子（右奥が後藤先生）

後藤 純

GOTO Jun

［特任准教授／まちづくり、都市計画、ジェロントロジー（総合高齢社会学）］

1979年群馬県生まれ。東京理科大学理工学部建築学科卒業、東京大学大学院都市工学専攻博士課程修了。博士（工学）。東京大学高齢社会総合研究機構特任講師を経て、2020年度より現職。2011年日本都市計画学会論文奨励賞、2013年・2015年グッドデザイン賞。著書に『コミュニティデザイン学』（東大出版会）など。

都市計画・まちづくり研究は、ひとことで言えばケーススタディです。ケーススタディのポイントを2つ挙げます。

1つめ。自分が選んだケースについて、何時間でも熱く語れるようになってください。調査の過程で住民や関係者の話を丁寧に聞き、資料を集めていく。何に困っているのか、なぜ困っているのか、まちの社会的関係を深く理解する。試しに課題解決につながるアクションを起こしてみる。語るべきことは山ほどあります。

2点目は、共感を得ることです。特にあなたに協力してくれた住民や関係者の方に語り、共感を得られるようになりましょう。あなたの話を聞いて、「感動した！」「面白い！」といってくれる人を2〜3人でよいので見つけてください。もし一人もいないのだとすれば、そのケーススタディはどこかが間違っています。

私たちの研究室は、自分がなぜそのテーマを選んだのか、いま何が課題なのか、それを熱く語り、当事者の共感を得ることが大切だと考えています。

研究室紹介 06　laboratory 06

宇宙建築を学べる研究室



宇宙建築賞メンバーらと宇宙飛行士・山崎直子さん（中央右が十亀先生）

十亀昭人

SOGAME Akito

［准教授／宇宙建築学・建築計画］

1970年愛媛県生まれ。東海大学工学研究科建築学専攻修了。東京工業大学大学院総合理工学研究科修了。文部科学大臣表彰、宇宙開発担当大臣表彰、松前重義賞（最優秀）受賞。現在は、日本建築学会において「宇宙居住特別研究委員会」を立ち上げ、宇宙建築にかかわるさまざまな活動を行っている。著書に『宇宙建築Ⅰ』『宇宙建築Ⅱ』（編著、東海大学出版）など。

十亀研究室は、日本で唯一宇宙建築について学べる研究室として約20年間、研究活動を行ってきました。これまで多くの学生が宇宙展開構造物と呼ばれる研究などに取り組み、何人かの学生は宇宙業界でも知られるいくつかの特許も申請し、さまざまなメディアで取り上げられました。最近はそのような展開構造物の研究をテレビやWEBなどで見て興味をもったという学生も入学してきてくれ、大変うれしく思っています。

現在は、日本建築学会で「宇宙居住特別研究委員会」という会を名古屋大学、大阪大学の先生方などと立ち上げ、徐々に研究者も増えつつあります。

大学の価値をどこに求めるかということはたびたび議論がされますが、これまでにない人類未踏の分野を開拓する研究ができる貴重な機関として大学を捉え、ぜひ皆さんも好奇心の赴くままに研究に没頭してみませんか。そしていつかはこれが自分の研究だと言えるような発明にも挑戦してみてはいかがでしょう。

研究室紹介 07　laboratory 07

蟻のように、鳥のように、建築を探る



子ども向け和室体験ワークショップにて（左が小沢先生）

小沢朝江

OZAWA Asae

［教授／日本建築史・近代建築史］

1963年神奈川県生まれ。東京理科大学工学部建築学科卒業、神奈川大学大学院修士課程修了。湘北短期大学助手を経て、2002年東海大学助教授、2007年より現職。1999年度日本建築学会奨励賞受賞。著書に『和室学ー世界で日本にしかない空間』（共著、平凡社）、『住まいの生命力ー清水組住宅の100年』（共著、柏書房）、『明治の皇室建築ー国家が求めた〈和風〉像』（吉川弘文館）、『日本住居史』（共著、吉川弘文館）など。

建築史という分野に出会ったのは高校時代です。横浜生まれ、横浜育ちで、関内地区に残る近代建築を見て歩いたり、保存運動にかかわったりしていました。大学進学後は、設計や構法、構造など新しい建築を創るための勉強が楽しくてのめり込みましたが、3年生のときに実測調査に参加し、古い建築を隅々まで調べ、そこに残された過去の人々の生活や考えを探り出す、推理小説のような面白さに開眼しました。

ひとつの建築やまちを調べるには、実際に訪れて体験し、自分の手と目で舐めるようにじっくりと見るのは基本中の基本。でも、周辺地域や社会的背景など俯瞰的な視点も必要で、これは卒業論文や修士論文も同じです。

身近なまちや建築も、自分で調べることで新たな魅力や課題が見えるはず。各地で都市化・没個性化が進むなか、古建築はまちのかつての性格や生活を伝え、個性を示す核になるという想いから、全国各地で建築調査や、保存活用・復元にかかわるプロジェクトに学生たちとかかわっています。

研究室紹介 08　laboratory 080

頭（知性）と心（感性）と手（技術）を建築スケッチによって結びつける



コロナ禍での卒業研究ゼミナールでの記念写真（左が渡邉先生）

渡邉研司

WATANABE Kenji

［教授／近代建築史・保存再生・ニューロアーキテクチャ］

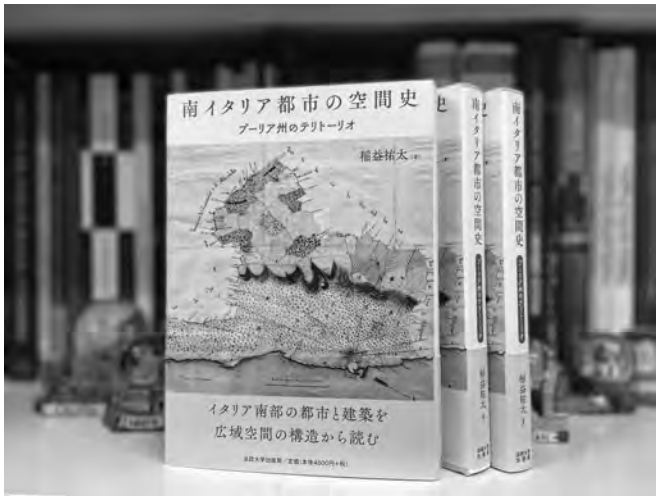
1961年福岡市生まれ。日本大学大学院修士課程修了。芦原建築設計研究所で公共施設及び都内事務所ビルの設計を担当。1993-98年AA Graduate School留学。帰国後イギリス近代建築運動に関する研究で博士（工学）。2005年本学助教授。2011年より現職。2018年より一般社団法人DOCOMOMO Japan代表理事。著書に『論文はデザインだ!』（彰国社）、『スケッチで学ぶ建築文化史』（理工図書）訳書として『オーヴ・アラップ20世紀のマスタービルダー』（東海大学出版部）。

渡邉研究室では、スコットランド出身の工学教育者ヘンリー・ダイアーの「頭と手（mente et manu）」による教員と学生との「知的相互啓発（iIntellectural mutal edifications）」を方針としています。約20年におよぶ東京とロンドンでの設計実務と研究活動の経験を踏まえて、近代建築の保存・再生を軸に、調査・計画・設計と近代建築史研究の連関性を取りながら、国際的な視野に立った活動を続けています。近代建築史研究では、学生自らが設定した課題テーマにおける論文を日本建築学会や関連団体の研究会で発表し、学術的交流を高めるとともに、英語文献の読解や分析、編集力などを高めることもできます。

2017年からは、設計、歴史研究、保存再生を統合する新たな領域「ニューロアーキテクチャ」（神経建築学）を掲げ、建築空間の総合的な認知手法や表現方法の可能性を模索し、2023年までをめどに基礎的な研究理論と実践的手法を構築する予定です。

研究室紹介 09　**laboratory 09**

方法としてのフィールドワークの実践



2021年度末に刊行した『南イタリア都市の空間史』

稲益祐太

INAMASU Yuta

［特任准教授／西洋建築史・都市史］

1978年東京都生まれ。2002年法政大学工学部建築学科卒業、2012年同大学院博士後期課程満期退学。博士（工学）。2006–2009年に南イタリアのバーリ工科大学へ留学（2017年度イタリア政府奨学金留学生）。久留米工業大学特任講師を経て、2021年より現職。著書に『南イタリア都市の空間史』（法政大学出版局、2022年、単著）、『世界都市史事典』（2019年、昭和堂、分担執筆）など。

着任したばかりの2021年度はコロナ禍の影響が続いていただけでなく、ゼミ生もいなかったために研究室の活動はできませんでした。また、「西洋建築史2」は遠隔授業であったため、グループ課題もオンラインに適したものでなければなりませんでした。そこで、「テーマを設定した旅行計画」という課題を出し、西洋建築を見て回るためのテーマと旅程、そしてパンフレットを作成してもらうことにしました。どこか遠い国の話で現実感が薄かった西洋建築が、旅行を計画することで身近なものになったかもしれません。

こうして2022年度には西洋の建築や都市に興味をもった学生が研究室に入ってきました。海外渡航の制限も緩和されたことで、海外の都市や建築をテーマに卒業研究を行う学生は現地調査に出かけていきます。また、私は2022年3月に単著を出版した南イタリアの都市と地域の研究を発展させるべく、希望する学生を引率して現地での調査を計画しています。







1・2 semester

建築デザイン演習 1-2

Architectural Design 1-2

建築デザイン演習1は、設計演習の第一歩となる科目です。建築に必要な造形感覚や色彩感覚、それらを表現する技術を学び、図面から立体を読み取る能力とスケール感を養います。建築デザイン演習2では、建築構成を通して設計者の意図をくみ取る訓練を行い、建築設計につながる発想と表現の演習を繰り返します。

Architectural Design 1 and 2 are the first steps to learn basic design skills. Both technical and creative exercises are carried out, to comprehend lines, volumes, scales, shapes, light and shade, etc.

建築デザイン演習1–2

建築デザイン1-2で学ぶこと

建築デザイン1-2では、将来建築に携わる際に必要なスケール感や造形感覚などの基礎的な素養を身につけることと、空間提案の内容を伝える表現技術を学ぶことを目的としている。建築デザイン1では主に、図面の基礎的表現や建築模型のつくり方、パース・アクソメなどの立体表現を習得し、さまざまな表現方法の知識と具体的技術を身につける。建築デザイン2ではそれまで培った表現技術を活かし、空間構想や家具デザインなどの具体的なデザインに挑戦し、最後には建築的な提案として実際の敷地に建つことを想定した小空間や場の設計に取り組む。

建築デザイン１課題
・線の練習
・図面の基礎「ポチの家」
・図面の練習「森の中の家」平面図 立面図 断面図 矩計図、ボリューム模型
・実測の図面化
・パースの描き方「森の中の家」内観 外観 透視図
・小空間の設計

建築デザイン２課題
・内部空間のデザイン
・家具のデザイン
・小さな建築の設計

── なぜ最初に手描きの練習や模型の制作をするのでしょうか？

加藤仁美（以下同）：建築家の建築作品の図面を読み取りながら、これをトレースすることにより、その作品がどのような空間構成をもつ建築なのかを把握することができます。また、2次元の図面を3次元に置き換えながら模型を制作することで、その建築の外観や造形、素材や構法、ディテールを理解することができます。図面や模型により、敷地上の建物の配置や周辺との関係性を把握することにもなります。手描きによる図面や模型の制作は、その建築の空間を理解していく重要なプロセスだといえるでしょう。

── 「森の中の家」を題材にしている理由は何ですか？

建築家吉村順三が自分の別荘として設計した「軽井沢の山荘」とも呼ばれる名作です。小さな住宅ですが、周囲の自然と調和した外観と豊かな内部空間をもっています。たとえば、鉄筋コンクリート造の小さな1階の上に、片流れの木造部分を載せた構成で、2階がまるで浮いているようにみえます。主な居住部分である2階は、4間角の正方形平面で、居間兼食堂を大きくとり、L字型に窓を開いて外を取り込んでいます。吉村順三がこの建築に求めたものは「自然とともにあることが感じられる質素で気持ちの良い場であること」だといわれています。軽井沢の四季折々の変化や自然を感じることのできる心地良い空間を想像、理解しながら、図面を描いてほしいと思います。

── 図面などの評価基準が分からないのですが？

トレースした図面をみると、建築作品の空間構成や構法、ディテールを理解して描いているかどうかがよく分かります。図面の描き方には、手順も含めて一定のルールがあります。1本1本の線にも、建築の断面を示している線なのか、向こう側に見える線なのかなど、それぞれ意味があります。ルールに沿って描かれていないと、建築空間を正確に相手に伝えることができません。その表現がきちんとなされているかどうかが、基本的な評価基準になります。

── 学生に気をつけてほしいことは何ですか？

建築デザインでは、建築空間を理解し、創造していくプロセスが何よりも重要です。少々手先が不器用であったり、作業に時間がかかったりしても、地道に作業を重ねていると、最初は目に見えなかったことを形にしていくという楽しさや達成感を得ることができます。皆さんが普段何気なく歩いている町には多くのデザインされたものや空間で溢れています。日頃から、心地良いデザイン、空間とは何かをぜひ観察しながら生活してほしいと思います。

── 「建築デザイン1」と「建築デザイン2」はどんなところが違いますか？

野口直人（以下同）：「建築デザイン1」では、図面の読み書きや建築模型の作り方、立体図の描き方など基本的な表現技術を身につけ、理解することが目的です。デザイン1の最後に行う「小空間の設計」や「建築デザイン2」からは、身につけた表現技術を使って実際の空間をどのようにデザインし、どう表現するのか、具体的な課題を通してトレーニングすることが中心になります。

── 「内部空間のデザイン」や「家具のデザイン」は建築とどんな関係がありますか？

皆さんは建築を学び始めたばかりで、最初から大きな建築の設計は難しいので、まずは身近にイメージできる大きさや条件のもののデザインから始めます。「内部空間のデザイン」は光をどのように取り入れて小さな空間を演出するのか、光と空間の関係を考えます。「家具のデザイン」は実際の荷重に耐えられるように原寸で制作し、構造と素材の関係を考えます。いずれの課題も、与えられた条件を満たすだけでなく美しく機能的なデザインを考えることが重要です。採光や構造、素材などを考慮して形のデザインをすることは、規模の大小にかかわらず必要で、実際の建築を考えるうえでの基本となる感覚を学びます。

── 作品の評価基準がよく分からないのですが、どうすれば成績があがりますか？

建築デザインの授業はスポーツに似ています。練習もせずにいきなり試合には望めないでしょう？日々の練習やトレーニングを根気強く続けることが試合で活躍できる一番の近道です。良い評価の提案の陰には、必ず地道に積み重ねた思考と表現技術があります。自分にはセンスがないから、という言葉をよく聞きますが、センスだけでは建築デザインはできません。授業時の課題や学外での宿題は地道な作業ですが、根気強く丁寧に計画的に取り組みましょう。早々に諦めずに考えること、手を動かすことを続ければ必ず結果が伴います。

── 設計の授業は必要ですか？

もし将来、構造や施工、環境設備などの分野に進むとしても、建築の仕事をするには図面から空間をイメージしたり、逆に頭で考えた発想を図面で表現し、相手に伝える力が不可欠です。この能力は、単なる知識ではなく、トレーニングによって身につくものです。設計の授業は、具体的な課題を通してその能力を磨くものだからぜひ履修して、将来の可能性を広げてください。

建築デザイン演習1　第2課題

小空間の設計

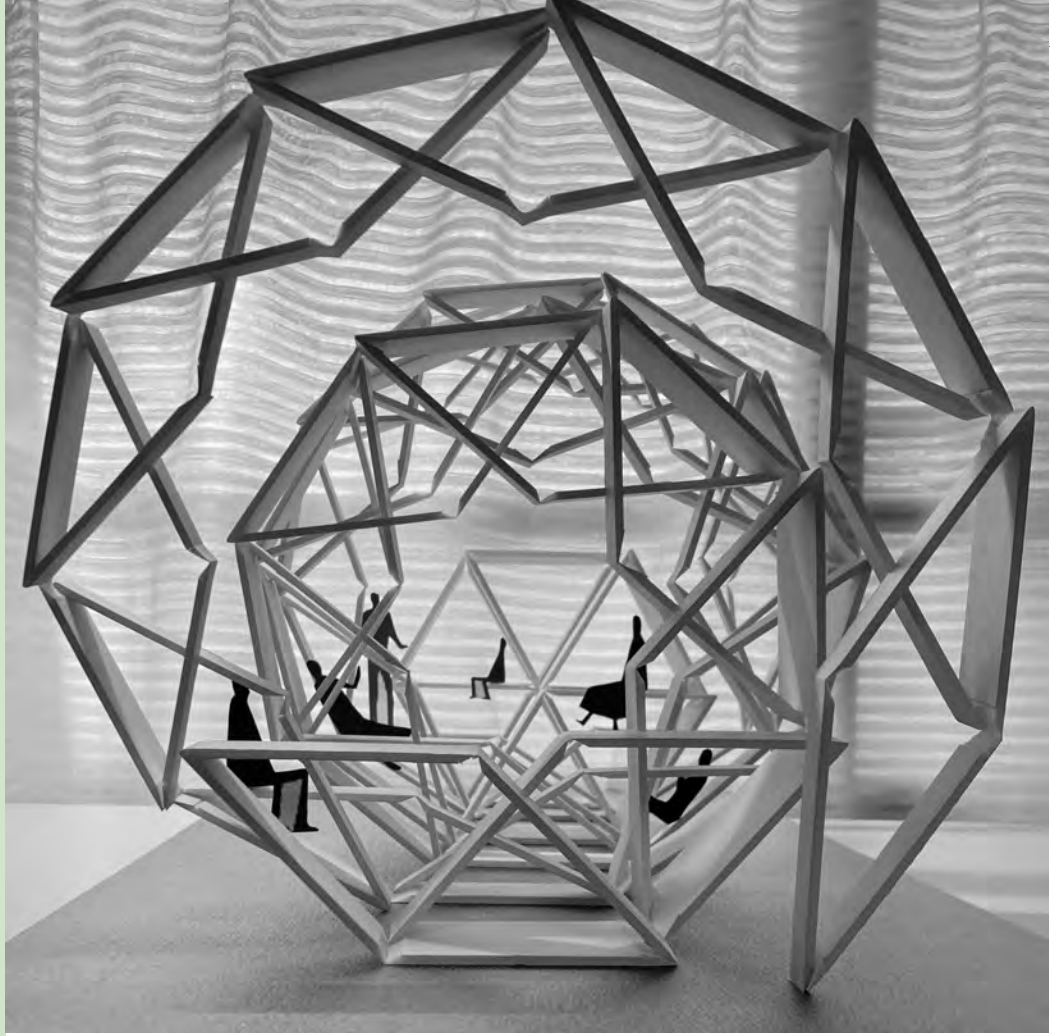
身体寸法と空間

担当教員：小沢朝江、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
金子哲也、長谷川栄子、番場俊宏、平本 玲、森 昌樹、梶浦 暁

身体に近い寸法をもつ単純な形態を複数回操作し、出来上がる形態や内部、外部空間の多様性を共有することを第一の目的とする。また、各自が行った操作について、他者に説明できることを第二の目的とする。

出題教員コメント
人体寸法に沿った断面をもつ筒状の形態に操作を加え、意外性のある空間を提案する課題である。鎌田案は異なる多角形を連ねた縄のような形態を捻って、広がりのある空間をつくる。高村案は網状の面を微妙にずらして重ねることで木陰のような空間を提案する。羽角案は折れ曲げた筒に鋭い凹凸をつけた崖のような造形、石井案はL字を組み合わせた同形のベースを3つつないだ単純な操作だが、面と空隙のバランスが美しい。秀作揃いだった。
（小沢朝江）

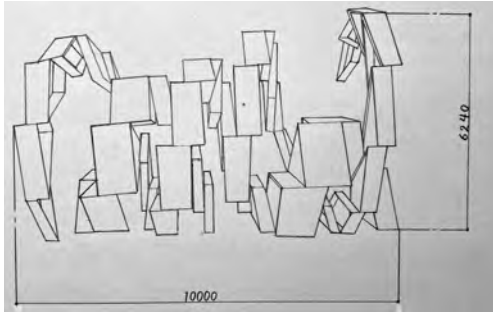
設計条件
・外形寸法1,800×1,800×18,000mmのチューブ状の形態に、何らかの操作を複数回加え、その内部・外部ともに使用できるものを想定する。
・模型の素材と厚み、着色は自由だが、内部に空間があること。自らの設計に相応しい素材を考える。たとえば、スチレンボード、ケント紙、木など。
・加えた操作のなかで、優勢な操作の名前をサブ・キーワードとして挙げる。たとえば、切断、曲げ、貫入、捻る、積み重ねるなど。
・出来上がる空間や形態にキーワードをつける。たとえば、悲しい、激しい、かわいいなど。
・どのように使用できるか、その機能を提案する。たとえば、学生のための休憩所、ベンチ、公園内の東屋、フォリーなど。



sequence

鎌田美春
KAMADA Miharu

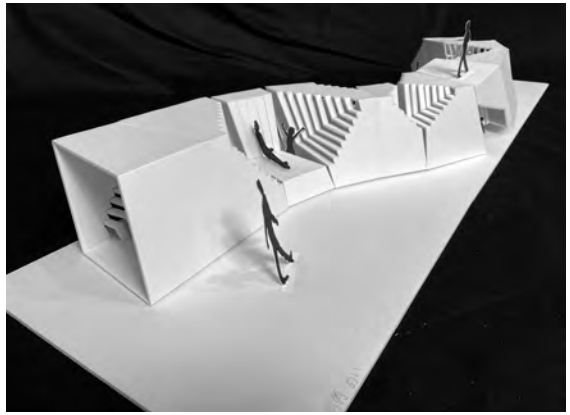
輪切りにしたチューブの1辺を切らずに残し、2本の「連続」した縄のような形態からできている。

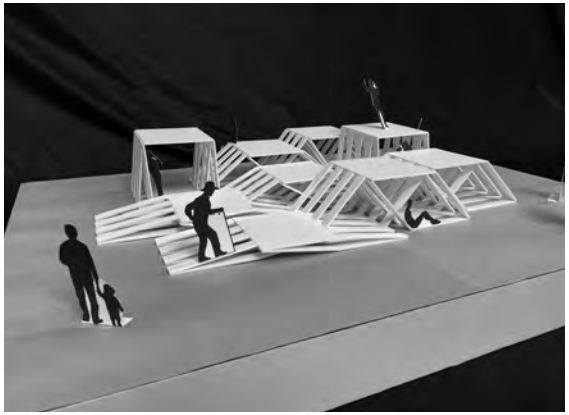


崖錐

羽角めい
HASUMI Mei

細かい切り込みを連続させることで、階段、座る空間、話せる空間が生まれ、親子で楽しめる空間を設計した。





互い違いから生まれるフロア

向井伊吹
MUKAI Ibuki

互い違いの噛み合いから生まれたレベルの違いが、行動のバリエーションを増やす。

木のドームテラス

髙村颯太
TAKAMURA Sota

チューブを細かく輪切りにすることのみで作成。上下層をトラス状に組み合わせることで強度が増している。



建築デザイン演習2　第1課題

光の空間

担当教員：野口直人、渡邉研司、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
森 昌樹、富永哲史、番場俊宏、伊藤州平、森屋隆洋

ヒトの知覚の中で「視覚」は最も大きな割合を占めている。よって、私たちの空間の経験は光に依存している。つまり空間をイメージし、つくるということは、光のコントロールを考えるということである。

スタディは遮光された真っ暗なハコに穴を開けることからスタートしてほしい。光源から直接与えられる光（直接光）ではなく、空間の中で反射する光（間接光）の重要性に気付くのではないだろうか。

この課題では、建築空間における光の制御方法について理解を深め、光と空間の関係を探求してほしい。

出題教員コメント

この課題は、光の効果を学び空間造形に活かすトレーニングである。とりわけ「間接光」に焦点を当てることで、光の表現をより深く掘り下げてほしいという意図があった。猿山案はダンボールの波形状が巧みに活かされ、壁と床・天井との接線から光が柔らかく入り込む。一般的な素材をラフに組み立てた簡素な操作であるが、カーブを描くことによって表情豊かな空間となっていることが評価された。一方で佐野案は繊細にデザインされた壁面によって光の透過率を細やかに変化させ、壁そのものが光源となっているかのような印象を受ける。光の透過を考慮した素材の選定と、それが画一的にならないように細やかな操作を加えたことによる効果がとてもよく出ている。対照的な操作の2作品だがともに、単に光のコントロールにとどまらず、床・壁・天井などの空間を構成する要素のデザインにまで波及していったことが高い評価を受けることにつながった。（野口直人）

課題

自然光を用いて、光と陰影を感じる内部空間を提案しなさい。また、「作品名」、「説明文」、「模型写真」を用い、作品をプレゼンテーションしなさい。

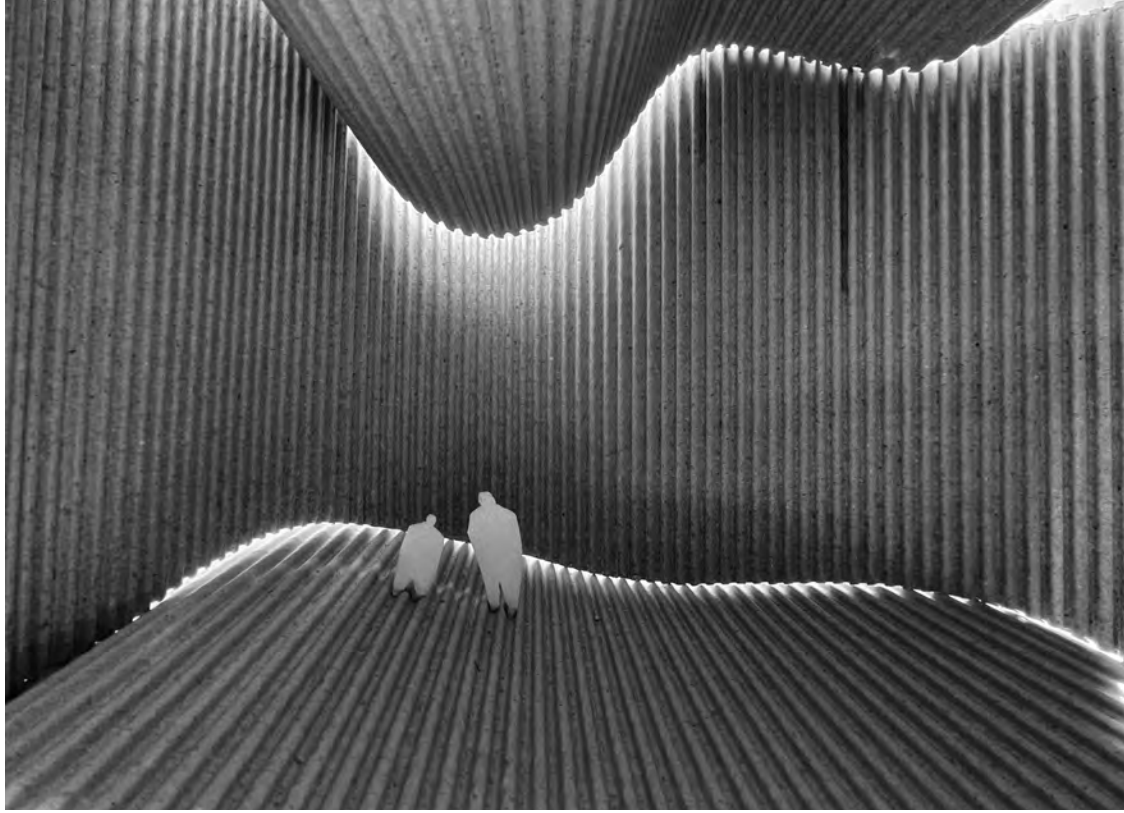
条件

1. 光を導入する。
・「自然採光のための開口」と「覗くための開口」をそれぞれ1つ以上設けること。
2. 素材の特性を考える。
・使用できる模型材料は自由とするが、色・反射率・屈折率・透過率などを考慮し用いること。ミラーの多用は避けること。
3. スケールと重力を与える。
・空間の縮尺は自由に設定していいが、建築で常用される縮尺を用い、模型自体に「縮尺」を書くこと。
・模型のサイズは500mm×500mm×500mm以内におさめること。
・人がどのように空間を体験するかをイメージし、内部空間に人の点景を配置すること。

評価

主な評価対象は作品の「外部」ではなく、「内部」である。光を効果的に用いた魅力的な内部空間が、模型とプレゼンシートによって提示できているかを評価する。

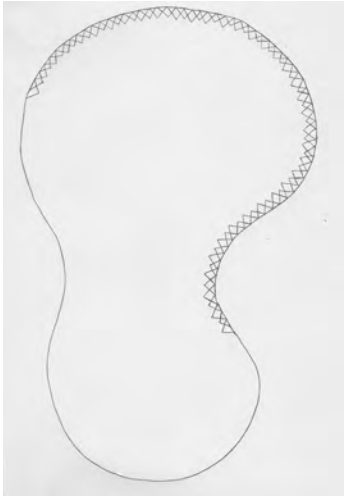




淡い光

佐野愛実
SANO Manami

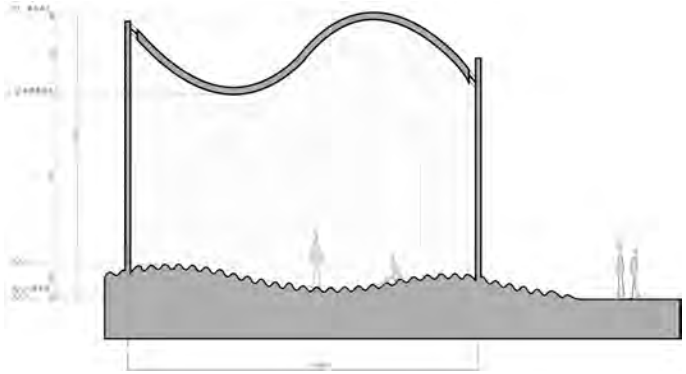
パーティションのような壁から光が映し出され、間接照明を思わせる淡く優しい光の中の空間となっている。



光のカーテン

太陽の高度・方位・色の変化を感じられる。昼は壁に白いカーテン、夕は床にオレンジの絨毯が浮かび上がる。

猿山綾花
SARUYAMA Ayaka



連なる光



森本美羽
MORIMOTO Miu

断面がフィルターのような役割をすることで柔らかな光となり、光の入り方でさまざまな表情を楽しめる。

光射す



伊藤絢香
ITO Ayaka

直接光だけでなく反射光も使うことで空間に変化をもたせた。また強く光が感じられるように内部を黒くした。

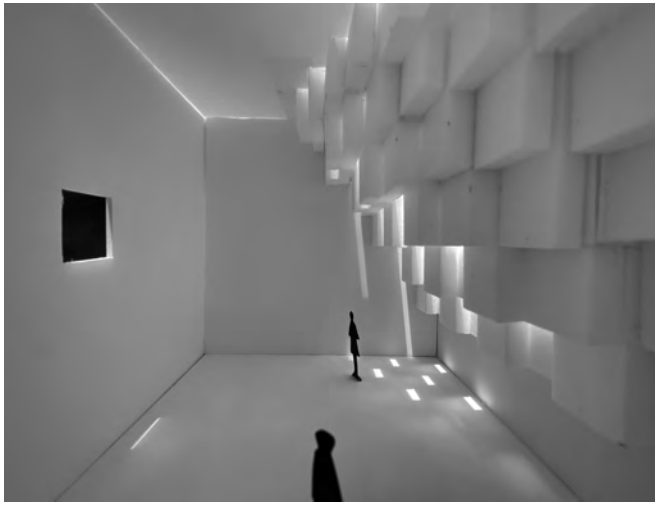
スリットライト



北條快李
HOJO Kairi

反射光だけを採り入れ、さらにスリットでほどよく遮ることで薄暗く落ち着いた広がりのある空間を設計した。

差し込む光



田中遥香
TANAKA Haruka

立体的に重なるデザイン。正面からは市松模様に見え直接外は見れないが、その隙間から光を取り込める。

建築デザイン演習2　第2課題

コドモノイス

構造とデザイン

担当教員：野口直人、渡邉研司、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
森 昌樹、富永哲史、番場俊宏、伊藤州平、森屋隆洋

子どもが使うことを想定し、目的、状況、場所を自らで設定し、そこで「座る」ことにふさわしい「イス」をデザインする。これまでの課題でも学んできた、スケールや身体寸法に注意し、自分が思い描く、新たな座るための道具としての「イス」を提案すること。

出題教員コメント

子どもが座るための道具としての「コドモノイス」のデザインを通じて、「スケール」「構造」「材料の特性」など、建築の基本となる要素をきちんと意識しながら、美しい形に取りまとめることを目的にした課題である。最小限の素材量と最小限の操作、そして人の身体的な行為が合わさってはじめてイスとして成立する眞木案は、過去にはない切り口とプレゼンテーションによって高い評価を受けた。その他にも接着を一切せずに折りとバランスによって成立させた構造が美しい寺内案、人が座ることで形状が安定する津田案、織り込みによって表情豊かな動きを与える平松案など、いずれの作品も紙という素材だからこそのデザインと構造を有しており、素材と操作の関係の豊かさを示している。（野口直人）

デザインの条件

「形状」
・平面の形状が300mm×300mmの範囲とする。
・形状は基本的に自由だが、座面を地面や台に置くことは禁止とする。

「素材」
・紙を用いること（段ボール、紙管などの紙を加工して作られた材料も可）。
・最低限の材料同士の接着、固定に紙以外の材料を用いることは可とする。

「強度」
・自立すること。
・子どもが座って壊れないこと。（提出物は、10kgの重りを載せて強度の確認を行う。）

評価のポイント
・想定した使われ方と、デザインの関係。
・構造とデザインの有機的な関係。
・素材の特徴の把握。
・強度（10kgの重りを載せた際に壊れないこと）。
・美しさ。



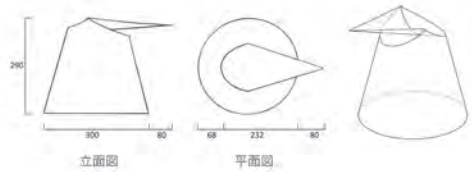
潰れたイス

眞木耕太朗

MAKI Kotaro

「子どもは物を壊すことが好きだ」。その性に着目した椅子。潰す、という実験的操作から強度を確かめた。

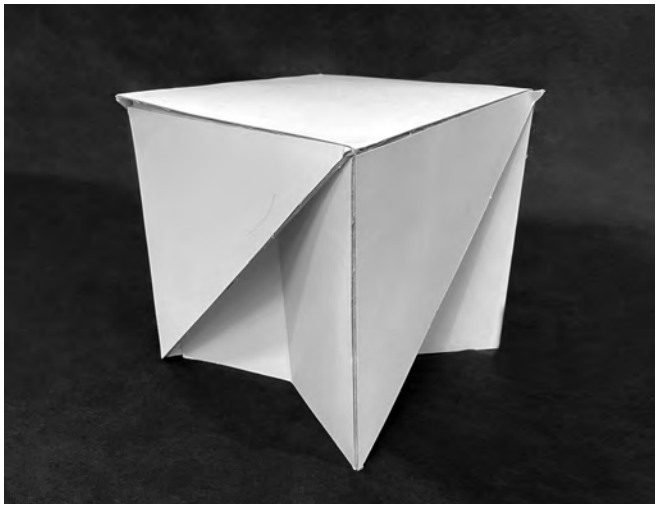








origami



寺内悠人
TERAUCHI Yuto

この椅子は正方形の紙を「折る」という行為のみで形成しており、強さと美しさを兼ね備えている。

構造の見える椅子



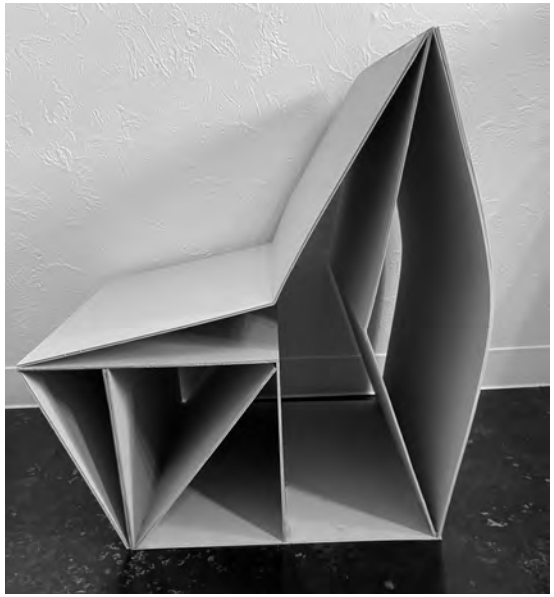
安藤 昴
ANDO Subaru

軸と軸を支えるパーツのみでつくった。シンプルでスマートな構造をもつデザインを目指した。

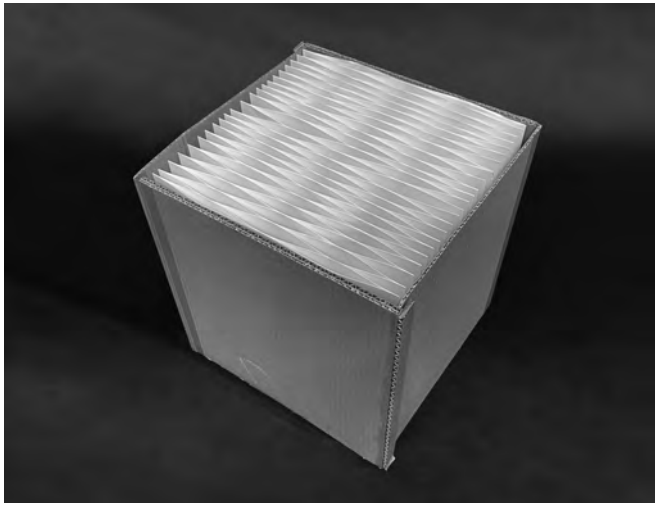
MOVING CHAIR

津田寛晟
TSUDA Kansei

「動くイス」をコンセプトに、子どもたちの動作に合わせてデザインした生活アクティブな椅子。



フォールディングチェア



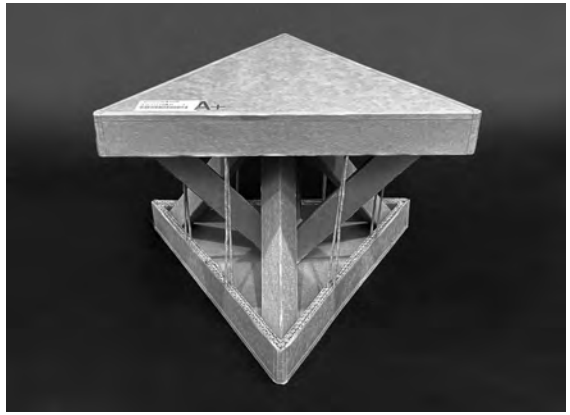
北條快李
HOJO Kairi

内と外を明確に分け、紙の性質を活かして折り畳めるようにしつつも十分な強度のある椅子を設計した。

アソビゴコロ

多田 泰
TADA Yasushi

見た目の不安定さの不思議と横方向に存在する少しの遊び部分が、子どもの遊び心に刺激をもたらす。





森の椅子

平松虎多朗
HIRAMATSU Kotaro

木の丸太をイメージしてつくり、段ボールを編むことで木の皮のようなざらざらとした手触りを再現した。

自由気ままに

小杉美佳
KOSUGI Mika

座面を点と線のみで支えることで、少ない材料でありながら上からの荷重に耐えられる設計にした。



建築デザイン演習2　第3課題

空間の分節とかたち

大きさ、プロポーション、バランス

担当教員：野口直人、渡邉研司、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
森 昌樹、富永哲史、番場俊宏、伊藤州平、森屋隆洋

立方体の空間に対し、容積の50%（半分）を埋めることで残りの50%の気積を立体的な空間としてデザインしなさい。空間をかたちづくるということは、ある大きな空間を分節したり切り取ることと言える。大きさ、プロポーション、バランス、それらをどのように関係づけて構成していくのか。有限で単純なかたちである立方体の中に、分節や切り取るための「かたまり」となる部分と、切り取られた「気積」となる空間のかたちを考える。立方体のアウトラインを活かし、それら「かたまり」と「気積」の自由で魅力的な関係性やさまざまな大きさの空間のつながりをデザインできるかを評価する。

出題教員コメント
空間をかたちづくる上で、物理的な「もの」の部分ではなく、いかに気積のかたちを興味深く浮き上がらせることができるか、そのために「もの」をどのように扱って組み立てるのかを考えデザインする課題である。小山案、安藤案、大羽案は、「もの」として形成した三次元曲面が、視る角度によって気積のかたちを浮かび上がらせる輪郭へと反転する作品である。八津案、小杉案は、体積100%のかたまりからさまざまな大きさの相似状の立体を50%分くり貫いて、明確なかたちによる重なりから複雑な気積のかたちを表現した作品である。中山案は、50%のかたまりを幾何学的なルールで分割・再構成することで、結果的に50%の“もの”と同じかたちの気積を浮き上がらせる作品である。手法がある程度カテゴライズできるなかで、小山案の感覚的なかたちへの操作が高い魅力を放っていた。（伊藤州平）

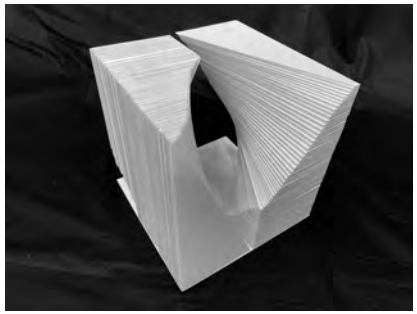
条件
- 立方体の大きさは7.5m×7.5m×7.5mとし、その中を50%の「かたまり」で埋め、残りの50%の「気積」を立体的な空間としてデザインする。
- 「気積」となる空間はひとつながりとし、外に対して完全に閉じた空間とならないこと。
- 「かたまり」となる部分はあくまでもかたまりとして表現すること。人が入ることはできない。
- 重力の概念があるものとし、必ずひとつの面が底面となること。
- 底面以外の5面のうち最低3面から空間が確認できること。
- 人がどのように空間体験するかを考え、人を配置すること。
- 最終的に立方体のアウトラインが認識できないものは不可とする。
- 立方体を埋める材料や色などの表現は自由とし、積極的に取り扱うといい。
- 作品名、説明文、ダイアグラム、空間の特徴を捉えた模型写真をプレゼンテーション（A2）にまとめること。



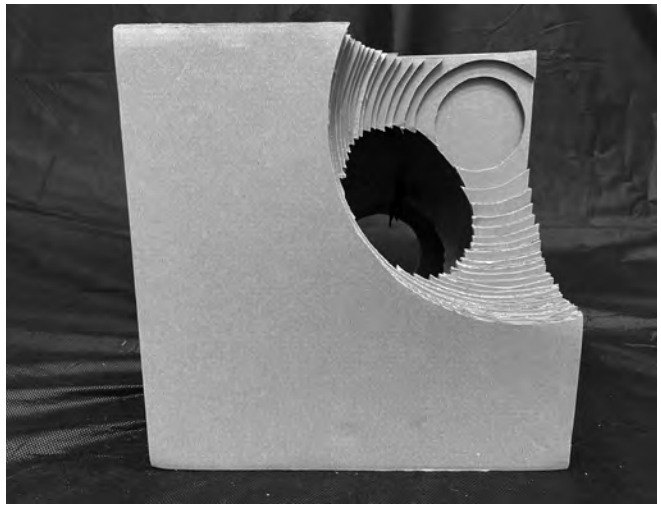
チョクトキョク

小山莉空
KOYAMA Riku

直線で曲線を表現。異なる切断の仕方、板の厚さにより並べた際に生まれる小さな差異で空間全体は歪む。



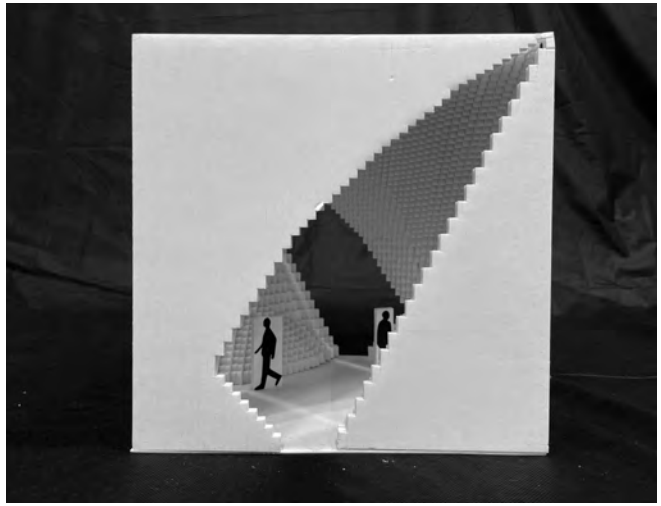
栖



八津一樹
YATSU Kazuki

ここでは外の世界とのつながりを断ち切りながら座り、寛ぎ、ぶら下がったりと自由に過ごすことができる。

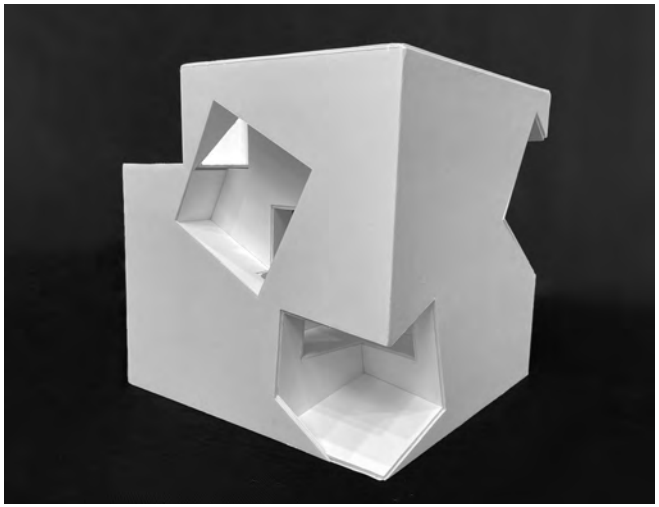
チューブを切り集めて



安藤 昴
ANDO Subaru

体積の50%をチューブ状に細分化し、積み上げていった。アイレベルでの変化や、上下の変化にこだわった。

立方体の集合

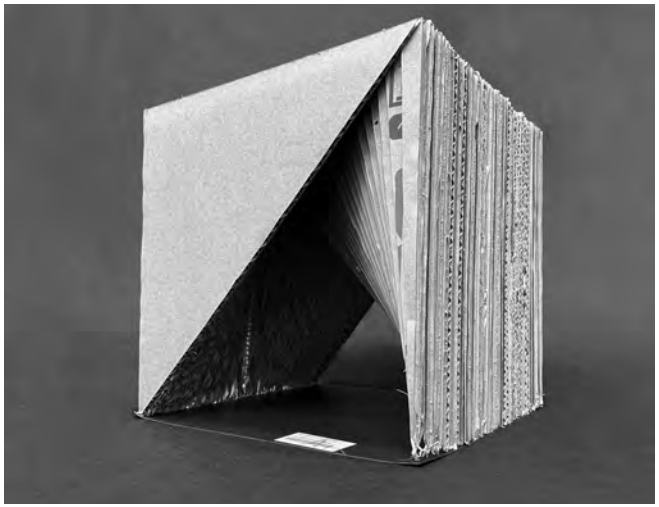


小杉美佳

KOSUGI Mika

全体のかたまりから大小さまざまな大きさの立方体を、くり抜きながらつなげていくことで複雑な空間が生まれた。

波打つ三角

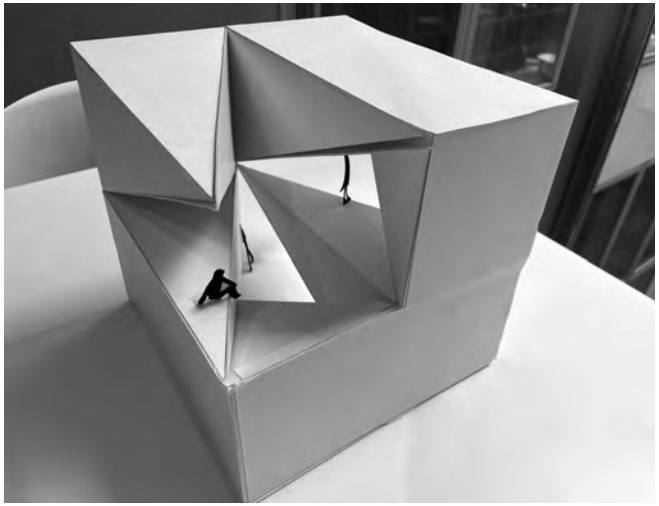


大羽洋輝

OBA Hiroki

三角形というシャープな形を、奥にいくにつれ頂点を変え、重ねることでフラットな空間をつくり出した。

拡がり、広がる

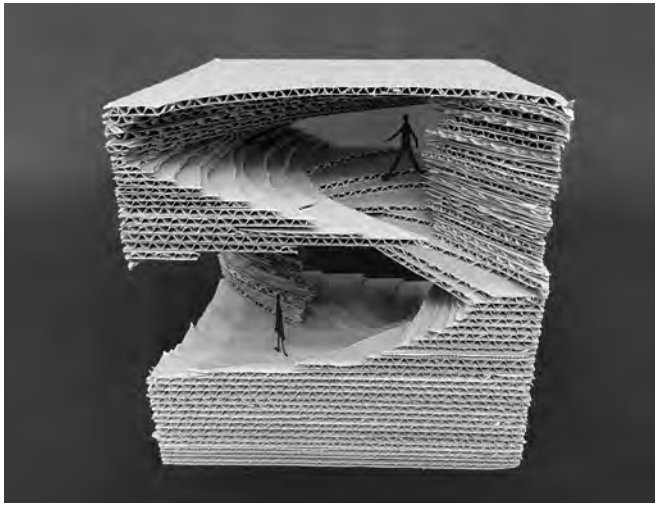


中山太陽

NAKAYAMA Taiyo

立方体に対して同じ形の四角錐を引き算していく形で空間をつくることで、直線が広がりを見せるような軌跡を残した。

重ねる空間

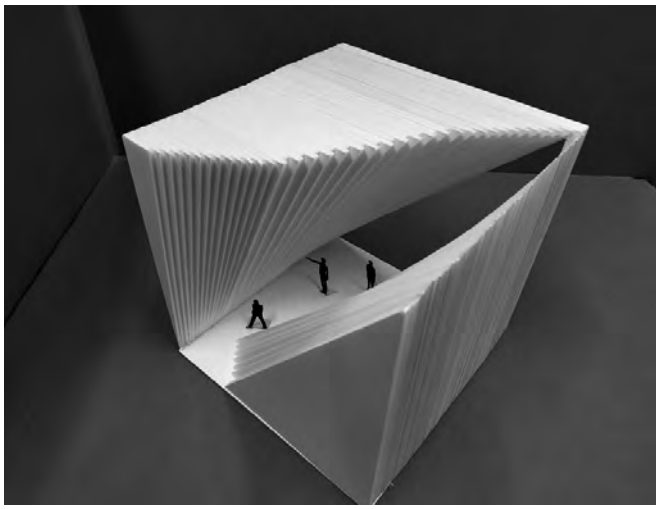


田中遥香

TANAKA Haruka

重ねながら曲線を意識したデザイン。空間によって屋根や天井と使い方が異なり、ひとつながりの空間にした。

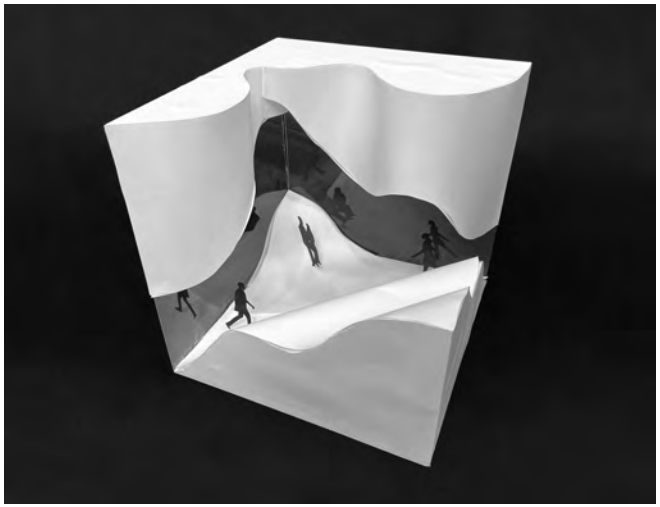
直線による曲面の形成



福田滉貴
FUKUDA Koki

三角形を何層にも連ね、曲面を形成した。内部は丸みを帯び、直線を活かした壁面が外部へ開けた空間である。

波打つ空間



小松由季
KOMATSU Yuki

曲線の取り入れ方を変化させることで、かたまりではなく気積を捉えられるような空間とした。



建築デザイン演習2　第4課題

価値の転換

前半:「場」の価値を発見し評価する
後半:「場」から生まれる「コト」をデザインする

担当教員：野口直人、渡邉研司、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
森 昌樹、富永哲史、番場俊宏、伊藤州平、森屋隆洋

前半課題:「場」の価値を発見し評価する
自分が普段使っているキャンパスを注意深く観察し、気になった場所や状況に対してどのように感じているのか「自分」で考え、その場所のもっている価値を発見してみてください。たとえば、他の場所にはない広さや狭さ、人や物の密度、そこから見える景色、その場ならではの人の行為、特徴的なかたち、時間による変化、などなど。そして場のもっている特徴を、図面、写真、グラフ、他との比較などの客観的な資料を用いて評価し、他者が分かりやすいようにプレゼンテーションしてください。

後半課題:「場」から生まれる「コト」をデザインする
前半で選定した場の価値を活かして、そこに何かしらの小さな「空間デザイン」を加えて、いままでそこで起きていなかった「コト」を生み出してください。「コト」何でもよいですが、人の行為の具体的な状況を思い描き、自分がその場を使ってみたい・見てみたい・居たいと思えるような空間や状況を目指してください。提案の規模は自由ですが、その場だからこそできることが望ましいです。そして単に「コト」が可能な場をつくるだけでなく、「コト」を生み出すことで「場」の価値が増幅するような、「場」を育てるような提案をしてください。最小限の操作で最大限の効果を生むような提案を期待しています。

出題教員コメント
単に要求される条件をこなすのではなく、自らの切り口で現状を評価し、価値を見出し、それを具体的提案に昇華させる。この一連のプロセスを当たり前と思ってほしい。現状を疑うことは建築的常識にとらわれていない1年生のほうが優れている。猿山案は普段何気なく感じていた微細な風の動きをロープによって可視化させ、人の流れや動きにまで波及させた点が評価できる。小さな操作と柔らかい情景の変化が高い共感を得た。カーン案は現状のベンチの綿密なリサーチと、それらをランドスケープとして昇華させた提案のプレゼンテーションが巧みであった。荒石案は地面の大規模な操作ではあったが、有機的なデザインと天気によって美しく変わる情景がたいへん美しい。玉井案は小さな構築物によって大きな空間が浮かび上がり人の滞留を生み出した点が評価された。いずれの案も、「場」のもつ価値を柔らかく浮かび上がらせている点が優れていた。(野口直人)



紡ぐ

猿山綾花
SARUYAMA Ayaka

風や光など林の良いところはすべて今まで通り感じられ、糸によりランダムな木々の中に心地よい場を創り出す。



Up to you

カーン リファ タスヌバ
Rifah Tasnuva Khan

ベンチの位置を変えることなく、周囲を芝生で覆う。利用者自身の工夫によりさまざまな可能性をもった空間。





美を映す庭

荒石菜々美
ARAISHI Nanami

木々と池により道を流動的に設けることで、雨の日の小景がこの場所を通る人の目に流れるように映る景色をつくる。

人の淀む場

玉井 颯
TAMAI So

たくさんの生き物が集まる川の「淀み」を人の空間に取り入れた。人が自然と集うような空間が完成した。





3・4 semester

建築デザイン演習 2-3

Architectural Design 2–3

建築デザイン演習2では、建築構成を通して設計者の意図をくみ取る訓練を行い、建築設計につながる発想と表現の演習を繰り返します。建築デザイン演習3では、基本的な建築設計方法を学び、住宅をデザインする授業です。「住宅」の概念を疑い、「住まうこと」そのものを考え直すことが求められます。

Starting with a house and ending with a small public building, the goal of Architectural Design 2 and 3 is to learn how to turn an idea into architecture.

建築デザイン演習2秋　第1課題

光の空間

担当教員：野口直人、渡邉研司、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
森 昌樹、富永哲史、番場俊宏、伊藤州平、森屋隆洋

ヒトの知覚の中で「視覚」は最も大きな割合を占めている。よって、私たちの空間の経験は光に依存している。つまり空間をイメージし、つくるということは、光のコントロールを考えるということである。

スタディは遮光された真っ暗なハコに穴を開けることからスタートしてほしい。光源から直接与えられる光（直接光）ではなく、空間の中で反射する光（間接光）の重要性に気付くのではないだろうか。

この課題では、建築空間における光の制御方法について理解を深め、光と空間の関係を探求してほしい。

出題教員コメント

この課題は、光の効果を学び空間造形に生かすトレーニングである。とりわけ「間接光」に焦点を当てることで、光の表現をより深く掘り下げてほしいという意図があった。向井案、石井案は光が当たる壁と当たらない壁をレイヤー状に配置し、奥行きのある空間をつくり出している。一見単純な操作ではあるが、視認できる壁の量や間接光の入り加減、空間のプロポーションなどへの繊細な配慮が随所に見られ、実際の距離以上の「空間の深さ」を獲得することに成功している。落合案も同じくレイヤー状に重ねた壁によって光のコントロールを試みているが、視認できる範囲を壁のみに狭めることで、間接光が複雑に折り重なって空間の豊かな変化が楽しめる。いずれの案も、間接光そのもののデザインから一歩踏み込んで、それらが空間に与える効果まで考えたことが評価につながった。（野口直人）

課題

自然光を用いて、光と陰影を感じる内部空間を提案しなさい。また、「作品名」、「説明文」、「模型写真」を用い、作品をプレゼンテーションしなさい。

条件

1. 光を導入する。
・「自然採光のための開口」と「覗くための開口」をそれぞれ1つ以上設けること。
2. 素材の特性を考える。
・使用できる模型材料は自由とするが、色・反射率・屈折率・透過率などを考慮し用いること。ミラーの多用は避けること。
3. スケールと重力を与える。
・空間の縮尺は自由に設定していいが、建築で常用される縮尺を用い、模型自体に「縮尺」を書くこと。
・模型のサイズは500mm×500mm×500mm以内におさめること。
・人がどのように空間を体験するかをイメージし、内部空間に人の点景を配置すること。

評価

主な評価対象は作品の「外部」ではなく、「内部」である。光を効果的に用いた魅力的な内部空間が、模型とプレゼンシートによって提示できているかを評価する。



幽けき光

向井伊吹
MUKAI Ibuki

この先に何があるのか？ 前に進みたくなるような空間。進んでみると、あるのは柱ではなくただの空洞だった。



ANNULUS



石井紫月
ISHII Shizuki

仕切りを蛇腹状に段々と間隔が狭くなるように配置し、明暗の変化に加えて奥行きが短く感じるように表現した。

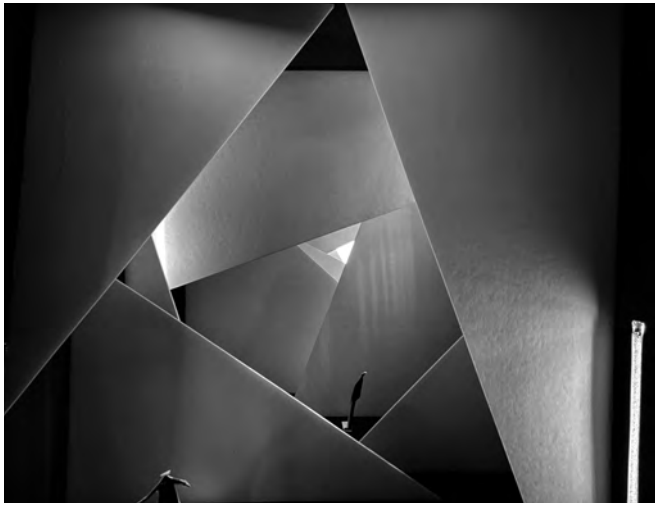
波折り



衣川晃平
KINUGAWA Kohei

波のように折り込んだ穴に入る光は優しく全体を照らす。穴をカーブさせることでより奥行きを感じさせる。

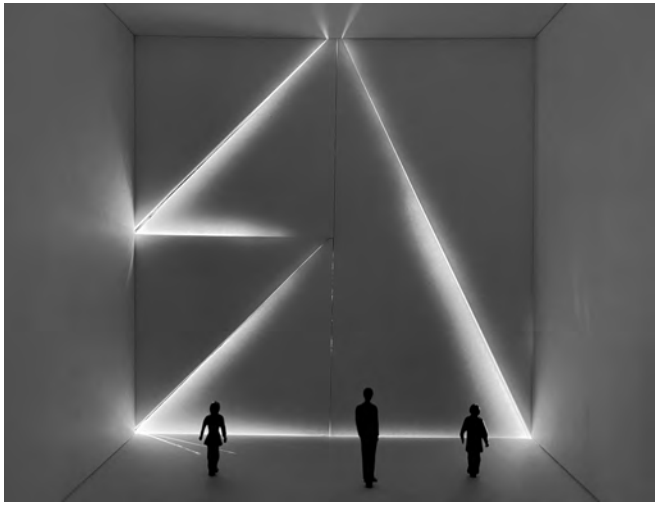
millefeuille



落合恵一
OCHIAI Keiichi

内部には大小さまざまな形をしている壁があり、中央の「自然採光のための開口」に集まるように設計されている。

gradually



小幡高大
OBATA Takahiro

切込みが左右で異なっているため光の入り方が異なり、光の方向によってさまざまな空間を体感することができる。

木漏れ日

平田まい
HIRATA Mai

森をイメージし、形に変化をつけ自然かつ葉の隙間から光が淡くもれるような神秘的な空間である。





歪んだ世界

香川柊馬
KAGAWA Shuma

縦方向にうねった曲面を斜めに配置することで、一直線の印象をもつ光が歪み不思議な空間となった。

Line of Light

宮川湧斗
MIYAGAWA Yuto

スリットから入る光を壁でコントロールするという簡単な操作で、平面が立体的な空間に変化する。



建築デザイン演習2秋　第2課題

コドモノイス

構造とデザイン

担当教員：野口直人、渡邉研司、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
森 昌樹、富永哲史、番場俊宏、伊藤州平、森屋隆洋

子どもが使うことを想定し、目的、状況、場所を自らで設定し、そこで「座る」ことにふさわしい「イス」をデザインする。これまでの課題でも学んできた、スケールや身体寸法に注意し、自分が思い描く、新たな座るための道具としての「イス」を提案すること。

出題教員コメント
子どもが座るための道具としての「コドモノイス」のデザインを通じて、「スケール」「構造」「材料の特性」など、建築の基本となる要素をきちんと意識しながら、美しい形に取りまとめることを目的にした課題である。晦日案・高村案は、織り込みや差し込みなどの薄い紙ならではの操作によってデザインされている。接着を一切せずに荷重がかかったときの摩擦力によって座面を保持させる手法は、イスにしなやかさと柔らかさを与えており、そのオリジナリティが評価された。石塚案や砂川案も同じく接着を一切しないで折りのみによって構造を成立させており、通常はアンバランスな脆さを醸しながらも荷重がかかることで形状が安定する。イスという強固な既成概念に、まるで衣服のような軽やかさを与えている点が評価された。いずれの作品も紙という素材だからこそのデザインと構造を有しており、素材と操作の関係の豊かさを示している。
（野口直人）

デザインの条件
「形状」
・平面の形状が300mm×300mmの範囲とする。
・形状は基本的に自由だが、座面を地面や台に置くことは禁止とする。

「素材」
・紙を用いること（段ボール、紙管などの紙を加工して作られた材料も可）。
・最低限の材料同士の接着、固定に紙以外の材料を用いることは可とする。

「強度」
・自立すること。
・子どもが座って壊れないこと。（提出物は、10kgの重りを載せて強度の確認を行う。）

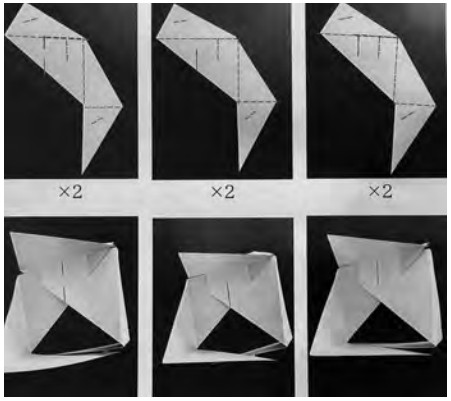
評価のポイント
・想定した使われ方と、デザインの関係。
・構造とデザインの有機的な関係。
・素材の特徴の把握。
・強度（10kgの重りを載せた際に壊れないこと）。
・美しさ。



折り紙CHAIR

晦日帆乃香
MISOKA Honoka

直角三角形4つが1枚続きになっている同じ形の厚紙を6枚使用し、接着剤を一切使わずに作成した。

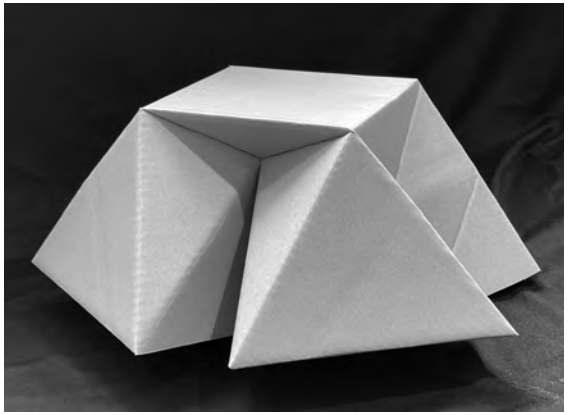


Bee Waist

髙村颯太
TAKAMURA Sota

1枚のダンボールでできており、座ると中心に力が吸収されることで強度が増す仕組みになっている。





オリイス

石塚千夏
ISHIZUKA Chinatsu

紙の折るという特性を活かし、正方形の段ボールに折り目を付けた。引き寄せるだけで展開できるイスである。

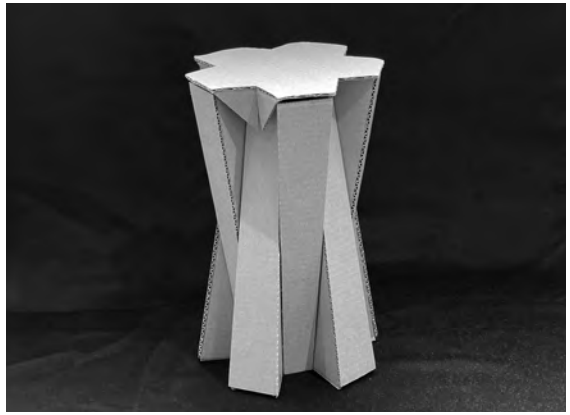
Stylish chair

砂川文良
SUNAGAWA Fumiyoshi

ケント紙のみでつくることを意識した。また、シンプルな外観を目指しこの作品が完成した。

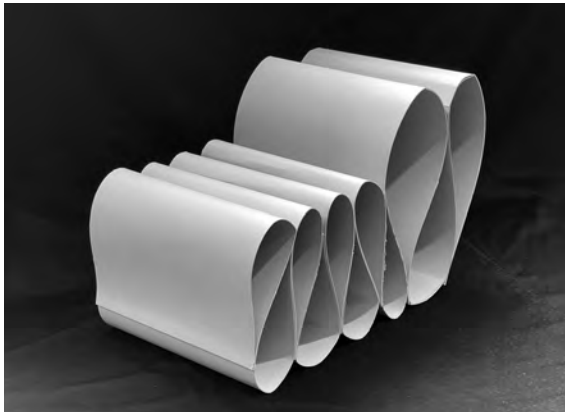


「澪」



増川碧仁
MASUKAWA Aoto

三角柱の柱を交互に配置し、座ったときにかかる圧力を効率よく分散できる。スマートなデザインにした。



Wave Chair

高橋京平
TAKAHASHI Kyohei

この椅子は曲線と曲線が噛み合ってできているため、座面に重さが加わると沈む動きが出る。

Twisted chair



西川侑馬
NISHIKAWA Yuma

ただ捨れただけだが違和感混じりの存在を感じられるコドモノイスをケント紙でデザインした。

建築デザイン演習2秋　第3課題

空間の分節とかたち

大きさ、プロポーション、バランス

担当教員：野口直人、渡邉研司、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
森 昌樹、富永哲史、番場俊宏、伊藤州平、森屋隆洋

立方体の空間に対し、容積の50%（半分）を埋めることで残りの50%の気積を立体的な空間としてデザインしなさい。空間をかたちづくるということは、ある大きな空間を分節したり切り取ることと言える。大きさ、プロポーション、バランス、それらをどのように関係づけて構成していくのか。有限で単純なかたちである立方体の中に、分節や切り取るための「かたまり」となる部分と、切り取られた「気積」となる空間のかたちを考える。立方体のアウトラインを活かし、それら「かたまり」と「気積」の自由で魅力的な関係性やさまざまな大きさの空間のつながりをデザインできるかを評価する。

出題教員コメント

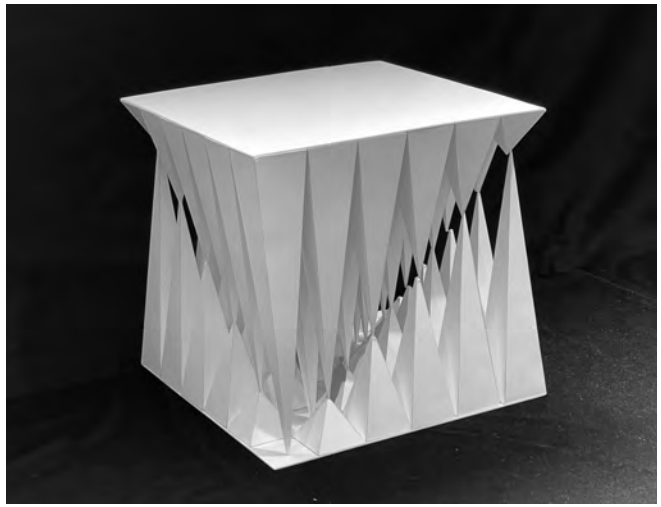
空間をかたちづくる上で、物理的な「もの」の部分ではなく、いかに気積のかたちを興味深く浮き上がらせることができるか、そのために「もの」をどのように扱って組み立てるのかを考えデザインする課題である。砂川案は、鋭角な四角錐の連なりから「もの」として存在感の強いかたちをつくりながらも、その隙間が同じくらい強いインパクトをもった鋭角な立体が連続した逆空間として気積のかたちを表現している。また、面材をあるルールで重ね合わせて連続したかたちをもった「もの」をつくり、それを立方体から差し引いて生まれる気積のかたちを浮かび上がらせる優秀案（吉田案、田中案、浦勇案、吉岡案、鎌田案）が多いなかで、吉田案は幾何学的規則性と感覚的な操作のバランスが興味深く、より魅力的な気積のかたちを浮かび上がらせた秀逸な作品である。（伊藤州平）

条件

- 立方体の大きさは7.5m×7.5m×7.5mとし、その中を50%の「かたまり」で埋め、残りの50%の「気積」を立体的な空間としてデザインする。
- 「気積」となる空間はひとつながりとし、外に対して完全に閉じた空間とならないこと。
- 「かたまり」となる部分はあくまでもかたまりとして表現すること。人が入ることはできない。
- 重力の概念があるものとし、必ずひとつの面が底面となること。
- 底面以外の5面のうち最低3面から空間が確認できること。
- 人がどのように空間体験するかを考え、人を配置すること。
- 最終的に立方体のアウトラインが認識できないものは不可とする。
- 立方体を埋める材料や色などの表現は自由とし、積極的に取り扱うといい。
- 作品名、説明文、ダイアグラム、空間の特徴を捉えた模型写真をプレゼンテーション（A2）にまとめること。



Facing Edges



砂川文良
SUNAGAWA Fumiyoshi

ギザギザした空間を意識し、高さレベルを変えた四角錐のみでつくった。構造が生む空間は異質であり、美しい。

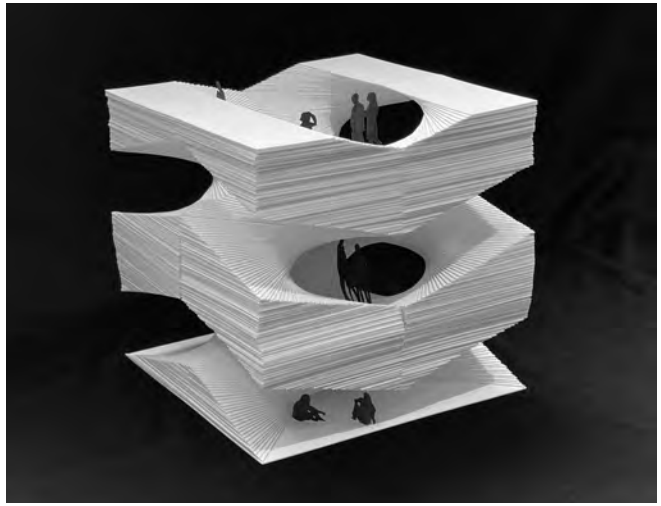
HELIX

吉田奈央
YOSHIDA Nao

操作は非常に簡単であるが複雑な空間になっている。どこまでも天井が続いていくような空間である。



溜まりを生み出す曲線



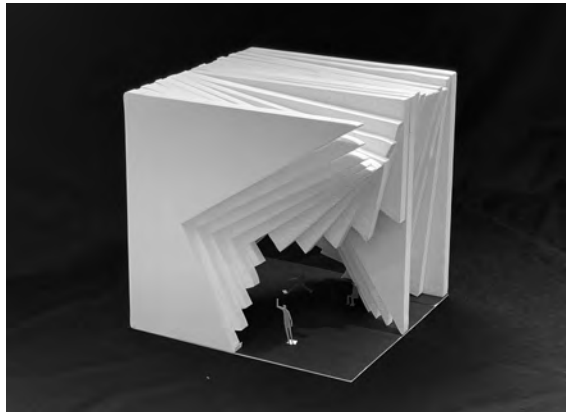
田中大輝
TANAKA Daiki

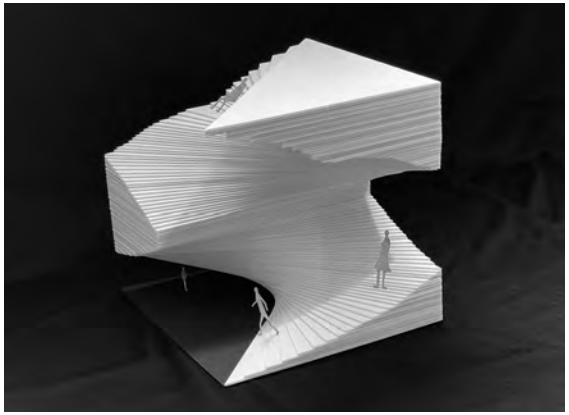
4つの螺旋階段を組み合わせ、溜まりと広がりの空間をつくり出した。溜まり場は人々の関わりを生み出す。

犀利

浦勇 樹
URAISAMI Itsuki

三角形を組み合わせた。連続した流れと鋭利な角をつくり、自然にはない緊張感を感じるような空間を目指した。





Semi-Spiral

吉岡アラタ
YOSHIOKA Arata

三角形の頂点をずらしながら積み上げていくだけで、すれすれで立っている緊張感やダイナミックさを表現した。

Overlap

鎌田美春
KAMADA Miharu

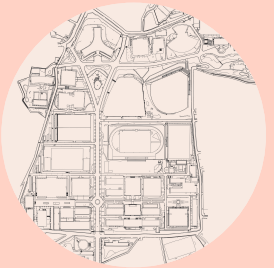
直角三角形のずれで床と壁と天井が一体となる空間。上る人と小空間にいる人の目線が合わない工夫をした。



建築デザイン演習2秋　第4課題

価値の転換

前半:「場」の価値を発見し評価する
後半:「場」から生まれる「コト」をデザインする



担当教員：野口直人、渡邉研司、十亀昭人、後藤 純、稲益祐太
森 昌樹、富永哲史、番場俊宏、伊藤州平、森屋隆洋

前半課題:「場」の価値を発見し評価する
自分が普段使っているキャンパスを注意深く観察し、気になった場所や状況に対してどのように感じているのか「自分」で考え、その場所のもっている価値を発見してみてください。たとえば、他の場所にはない広さや狭さ、人や物の密度、そこから見える景色、その場ならではの人の行為、特徴的なかたち、時間による変化、などなど。そして場のもっている特徴を、図面、写真、グラフ、他との比較などの客観的な資料を用いて評価し、他者が分かりやすいようにプレゼンテーションしてください。

後半課題:「場」から生まれる「コト」をデザインする
前半で選定した場の価値を活かして、そこに何かしらの小さな「空間デザイン」を加えて、いままでそこで起きていなかった「コト」を生み出してください。「コト」何でもよいですが、人の行為の具体的な状況を思い描き、自分がその場を使ってみたい・見てみたい・居たいと思えるような空間や状況を目指してください。提案の規模は自由ですが、その場だからこそできることが望ましいです。そして単に「コト」が可能な場をつくるだけでなく、「コト」を生み出すことで「場」の価値が増幅するような、「場」を育てるような提案をしてください。最小限の操作で最大限の効果を生むような提案を期待しています。

出題教員コメント
単に要求される条件をこなすのではなく、自らの切り口で現状を評価し、価値を見出し、それを具体的提案に昇華させる。この一連のプロセスを当たり前と思ってほしい。現状を疑うことは建築的常識にとらわれていない1年生のほうが優れている。吉岡案は既存の樹木配置を踏襲する位置にポールを立てることで、境界を跨いだ空間を認識させ、一元的な人の流れを穏やかに変化させている。道の結節点に歪みをつくり車から人のための空間を生み出す内田案、境界を跨いだメッシュで新たな地面のレイヤーをつくり落葉によって場を変化させる晦日案、建築のカーテンウォールの反射を屋根のフィルターによって美しく可視化させた平田案、地面を歩く楽しみを湧き上がらせる児高案など、時間の経過や人の流れによってその場のもつ価値が浮かび上がる案が高い評価を得た。(野口直人)



集めさせる柱

吉岡アラタ
YOSHIOKA Arata

柱と木をつなぐと階段と周辺の境界線を乗り越えるような円になる。最小限のデザインで集まることを誘発する。



集結の先
動作の変換



内田涼大
UCHIDA Ryota

坂のふもとの並木道を曲線にした。下るという1つの動作から各々別の動作に変換され坂の集結が強調される。

自由な境界



晦日帆乃香
MISOKA Honoka

人工的に設置された境界が季節や環境、自然によって消滅することで生じる境界の変化をより強調できる空間。

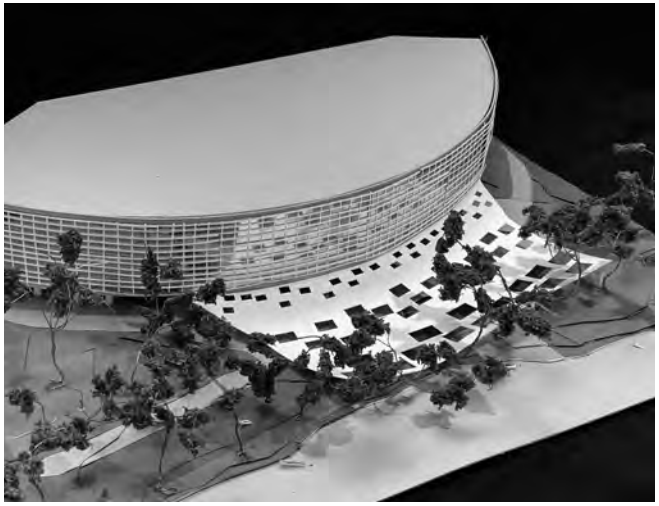
誘起の三角屋根



田中大輝
TANAKA Daiki

三角屋根は散らばった木々を直線で結び、三角屋根に誘導された視線は人々に行動を起こさせる。

陽光と反射



平田崚馬
HIRATA Ryoma

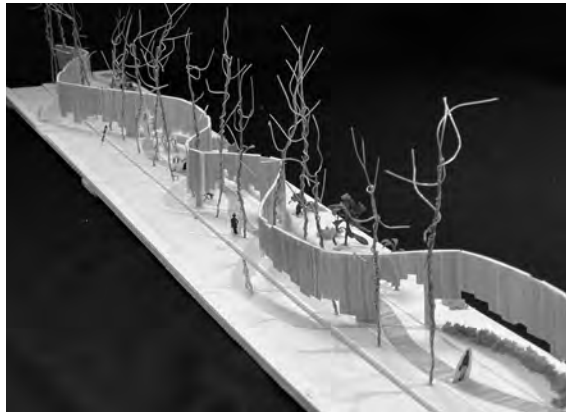
2号館前の反射する光と太陽光が交差する空間に屋根を架け、人工的な模様を地面に映し出す操作を行った。

足で楽しむ道

児高 真
KOTAKA Makoto

一本道を6つの種類に分け、うねらせたりして地面が変わる楽しさや道を選択して歩けるようにした。





聴いて、感じて、囲われて。

福本大知
FUKUMOTO Daichi

直線的で平坦な空間を二重の波状で区切ることで複数の空間として転換し、元よりある「静けさ」を強調する。

隠れて感じる自然

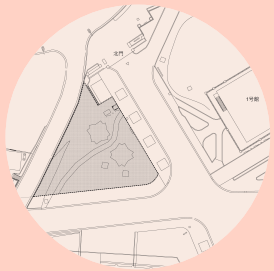
宮下航希
MIYASHITA Koki

この土地の自然に意味をもたせるために歩道部分の高さを下げ、自然がアイレベルになるようにした。



建築デザイン演習3　第1課題

非日常としてのTea House



担当教員：山﨑俊裕、小沢朝江、野口直人、河内一泰
明野岳司、伊藤州平、井上 玄、佐屋香織、富永哲史、
森屋隆洋、山口紗由

日本の伝統的な建築のひとつに「茶室」がある。一番小さな交流施設ともいわれ、日常生活から切り離された非日常体験を可能とする空間でもある。小さいがゆえに、空間スケール、空間構成、各部寸法が身体感覚を伴って捉えられる。本課題では、現代における「tea House」を設計する。「tea House」とは、日常と切り離された空間で、2人以上でお茶のセレモニーができる建築とするが、伝統的な茶道に沿ったものに限らず、交流の形式は自由である。

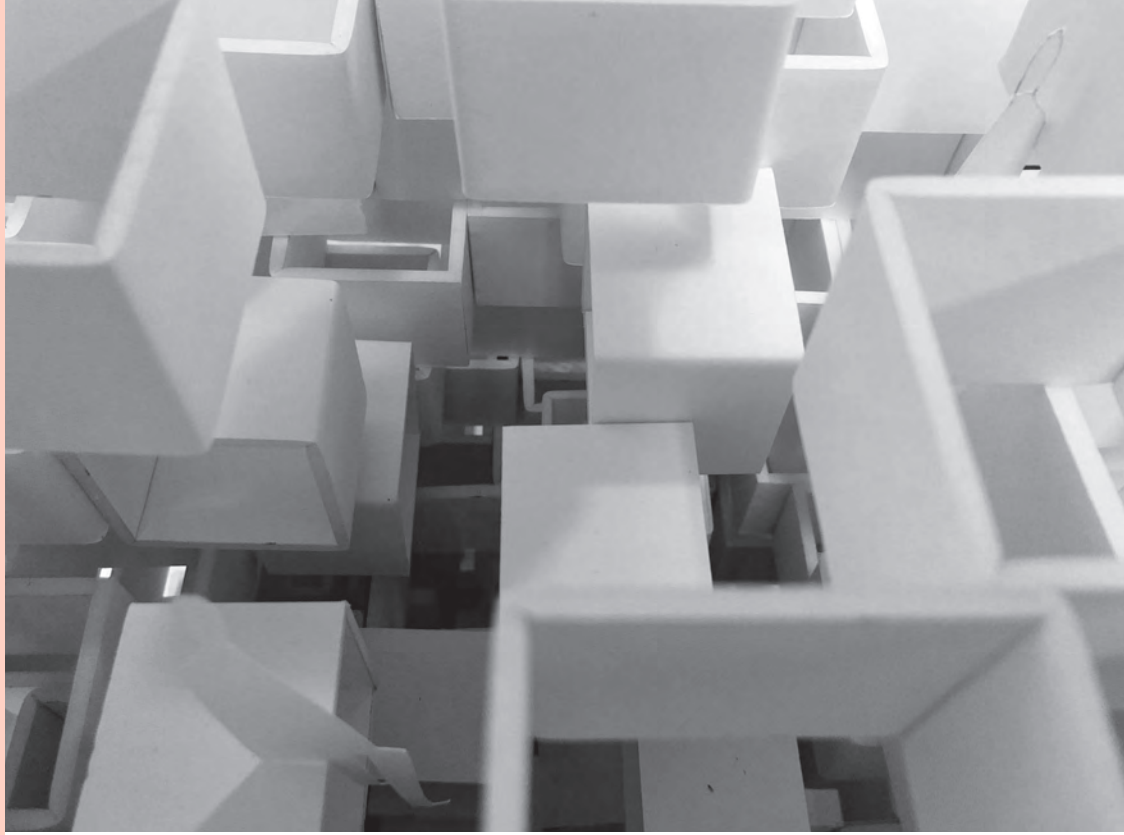
あなたが考える日常とは何か、その対比としての非日常とは何か。そうした状況で生まれる交流とは何か。自分ならではの考えを元に、それが可能となる最小限の空間をデザインしてほしい。

出題教員コメント

「茶室」という最小限空間を通して、人と人との新たな交流の場を創造することがこの課題の目的である。カーン案は家具レベルの小さな立方体を集合させて建築的なスケール概念を崩し、福田案はプロポーションの異なる空間を内外の関係に考慮しつつ高低差をつけて連続させる。板状の床をランダムに配して階層を曖昧にした小杉案、視線を上方に誘導して横方向のつながりを再構築した及川案など、スケール感の巧みな操作が新鮮だった。（小沢朝江）

敷地
・東海大学湘南校舎敷地内

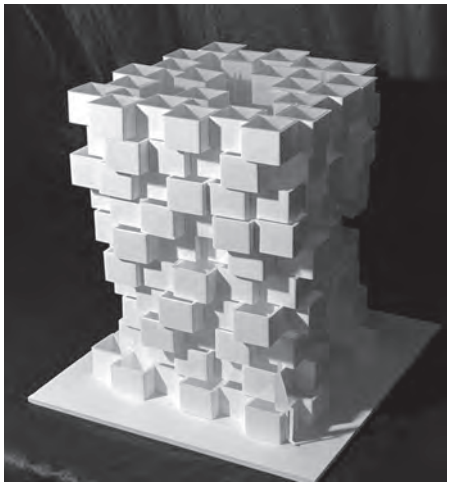
設計条件
・建築面積：10㎡以下
・延床面積：15~20㎡、2層以上が必要
・構造：自由
・常設、ポータブルな組立て式、セルフビルド可能など、設定は自由。



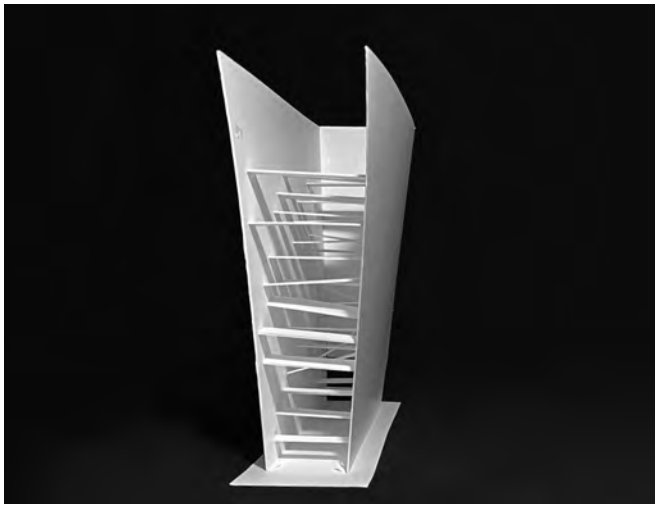
記号のない空間

カーン リファ タスヌバ
Rifah Tasnuva Khan

テーブルや椅子、階段といったように、見ただけでその物体の利用方法がわかってしまう状態を直方体を使うことによってわからない状態にした。そうすることによって非日常空間を表すことができると考えた。



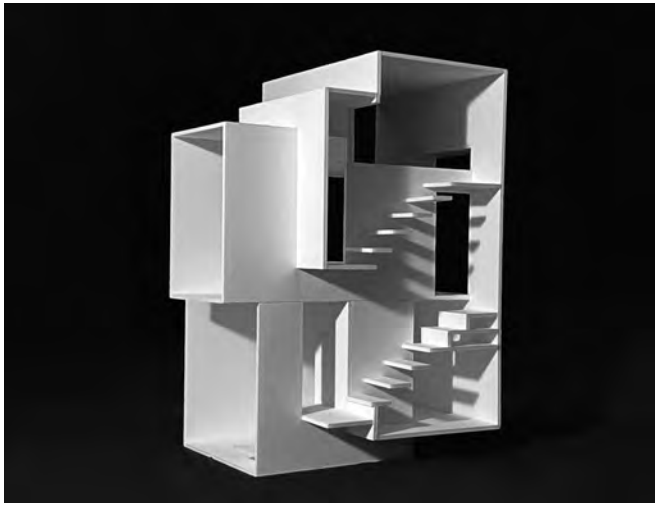
上下する視線



小杉美佳
KOSUGI Mika

お互いの視線が上下することで非日常的な「お茶をする」が生まれると考えた。内部は、幅の異なる板状の床をランダムに設置し階層を曖昧にすることで、同じ空間でも場所により異なる非日常が生まれる設計にした。

内・外



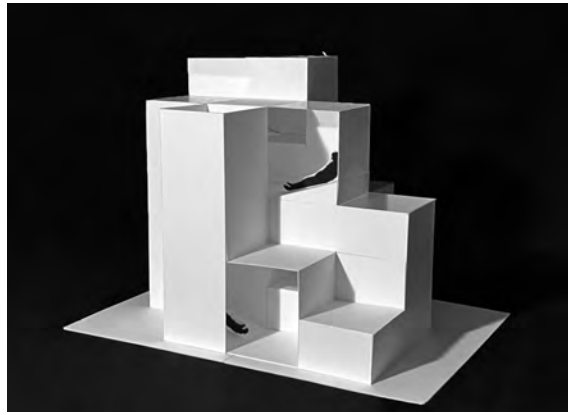
福田滉貴
FUKUDA Koki

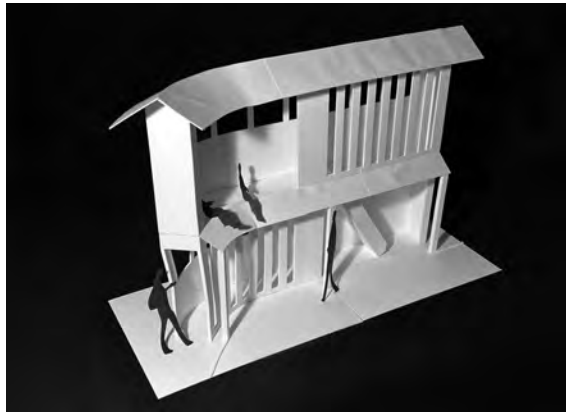
内に閉ざされた日常に対し、外に開けた非日常としての空間を目指した。人通りの少ない閉鎖的な立地だが、内外の空間の使い分けや天井高を工夫し、小さいながらも交流の形式に応じた使用ができる開放的な空間。

空と共に茶を楽しむ
1人でいるのに会話のできる空間

及川 司
OIKAWA Tsukasa

コロナウイルスの影響で家に滞在することが「日常」になっていた。そこで、「非日常」の空間をつくるため「空に視線を誘導」「会話も1人の空間も楽しむ」「一期一会の出会い」の3つの点を意識して作成した。





RETRO

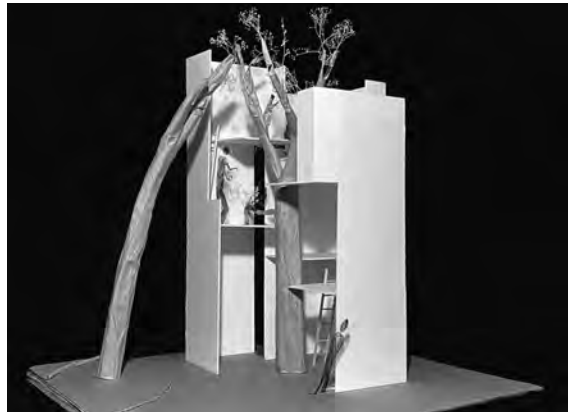
篠原 裕
SHINOHARA Yutaka

東海大学湘南校舎のスケールの大きな建物に対して、道なりに沿って細長いスケールの建物を配置することで、最小限の空間をデザインした。2階からは狭小がゆえに、レトロな見た目から非日常を味わえる。

非ツリーハウス

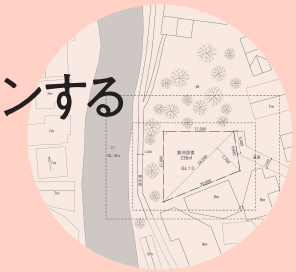
中山太陽
NAKAYAMA Taiyo

日常に存在する木に着目し、非日常で囲いこむ。その木はやがて非日常空間の一部へと変化していく。日常のなかに別の日常を出現させることで非日常を形成する。木にただ建築物をつけるだけではない非ツリーハウスである。



建築デザイン演習3　第2課題

変わりゆく生活と境界をデザインする



担当教員：山﨑俊裕、小沢朝江、野口直人、河内一泰
明野岳司、伊藤州平、井上 玄、佐屋香織、富永哲史、
森屋隆洋、山口紗由

これからの生き方を表す、新しい常態の家を設計せよ。

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により、私たちの生活や生き方、価値観は大きく変わりました。今まで当たり前だと思っていた経験や常識は覆され、多くの人が自分たちにとって何が一番大切かを問い直す機会となり、私たちの生活においても「在宅勤務」や「オンライン授業」などの新しい振る舞いが常態化し、住宅に求める機能は利便性だけよりも周辺環境や住環境へと移行してきています。

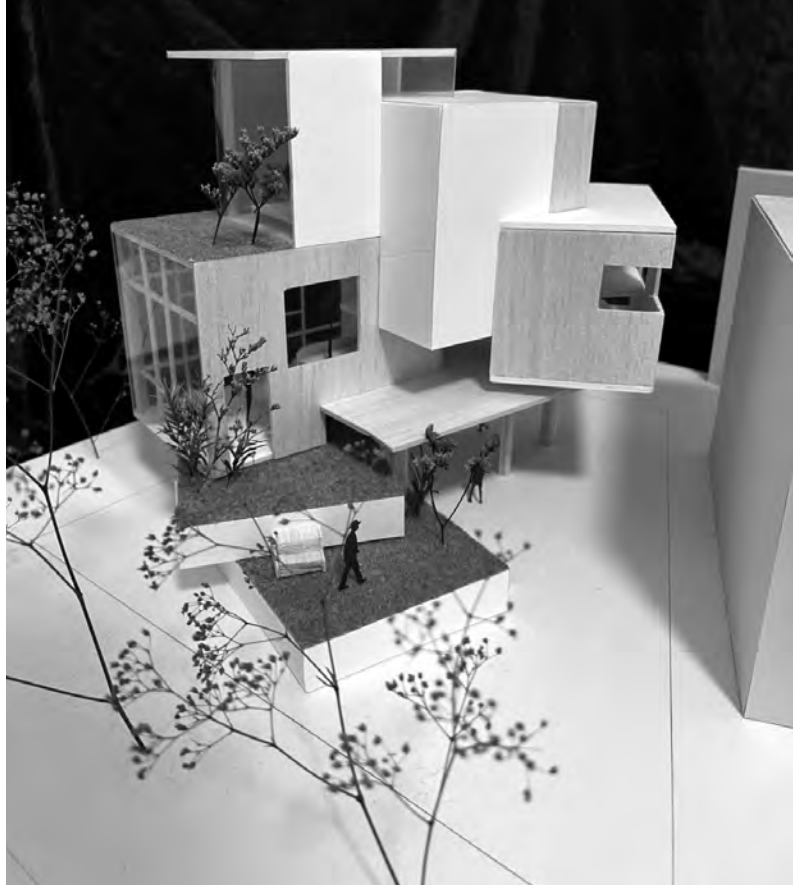
また、自宅で過ごす時間が増え家族のつながりの大切さを感じる一方、長時間家族と居ることがストレスの一因になることもあり、従来の住宅では補いきれない多様な住まいが顕在化してきました。家族でありながら、個人の活動が強まっているなかで、住宅には内外にかかわらず、閉じるだけではない新たな境界の設定が必要です。

本課題では、住宅地の中にある森と川に隣接する敷地に、従来のnLDK形式とは違う、家族のつながり方、地域とのつながり方を考えた、これから先の新たな生活様式を想定した住宅を設計してください。

敷地
・神奈川県葉山町（現地見学不可）

設計条件
・敷地面積：238m^2
・建ぺい率：60%
・容積率：200%
・用途地域：第一種中高層住居専用地域
・最高高さ：12m
・要求面積：120~150m^2
・構造・階数：自由
・その他：建築だけでなく敷地内のランドスケープも提案すること 。
・住人：40代夫婦+子ども（大学生1人、高校生1人）

出題教員コメント
これからの生活様式を想定し、家族・周辺地域との新たな境界を設計する住宅課題。玉井案は分割した床にレベルを与え、最少限の壁の配置で境界を生み出したが周辺との呼応が感じにくい。カーン案は周囲の木々を住宅の中に引込むことで境界を崩そうと試みたが、物理的境界が優ってしまった。猿山案は傾きのあるスラブを集積することで、緩やかな境界を発見しかけているが、用途に縛られた印象。佐野案は大きさの異なる箱を積み重ね噛み合わせることで、一空間でありながらスケールが変化し周囲とも調和した秀逸な作品であった。（佐屋香織）



積み重なる家

佐野愛実
SANO Manami

箱と箱を積み重ねることで室内に段差や間仕切りが生まれ、扉で空間を区切らずとも自然と境目を認識する住宅を提案した。それぞれの箱の方向、奥行き、高さを変えることで、建物が地域に調和することを期待した。



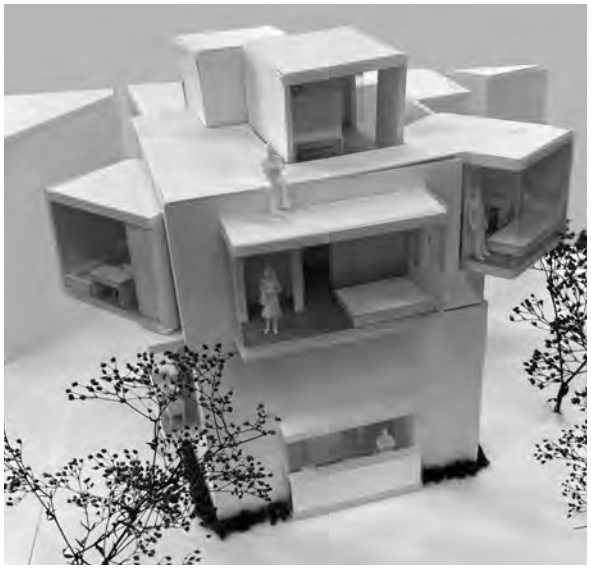
まちのリビング



玉井 颯
TAMAI So

住宅は間仕切り壁や階層などの境界により仕切られる。新たな境界の形として間仕切り壁を最小限にし、スキップフロアの床で空間を仕切る。結果、部屋ごとの新たなつながりが生まれ、そこに住まう人のつながり方が変化する。

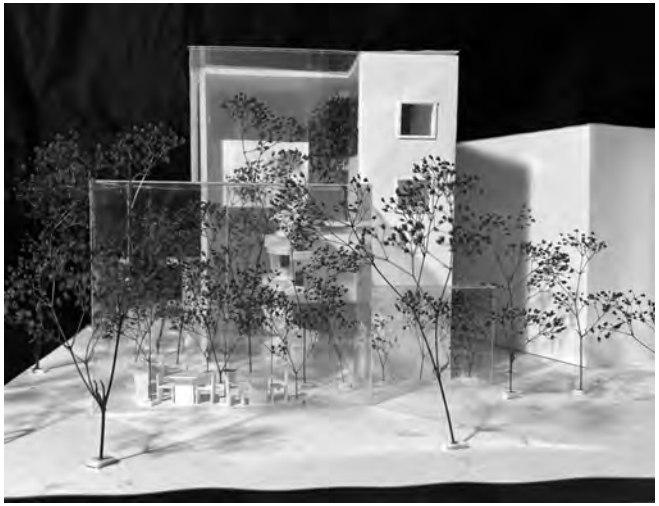
箱の家



伊藤絢香
ITO Ayaka

大きな箱によって屋内外の境界を目立たせることで、大きな箱から飛び出す小さな箱の内部と屋外の交わりを強く感じさせる。プライベートを守りながらも周辺環境や地域とのつながりを感じられる。

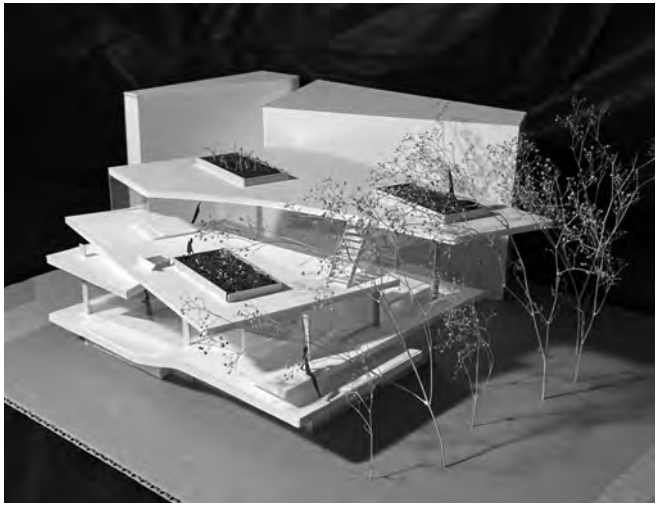
緑



カーン リファ タスヌバ
Rifah Tasnuva Khan

自然豊かな場所に家を建てると考えたときに、家と周りの緑をはっきり分けてしまうのはもったいないと考えた。そこで、建物の中にも植物を入れることにより、家の中からも外からも自然を感じられるようにした。

つながりに住む



猿山綾花
SARUYAMA Ayaka

その地と、家族と、内外をつなぐ家。地面の上に建築物を置くのではなく地面も一つのスラブと考え、それを上に重ねることにより構築する。いくつものスラブが地面のような傾斜をもち見えない緩やかな境界をつくる。

建築デザイン演習3　第3課題

広く立体的であること

豊かな狭小都市型住まい

担当教員：山﨑俊裕、小沢朝江、野口直人、河内一泰
明野岳司、伊藤州平、井上 玄、佐屋香織、富永哲史、
森屋隆洋、山口紗由

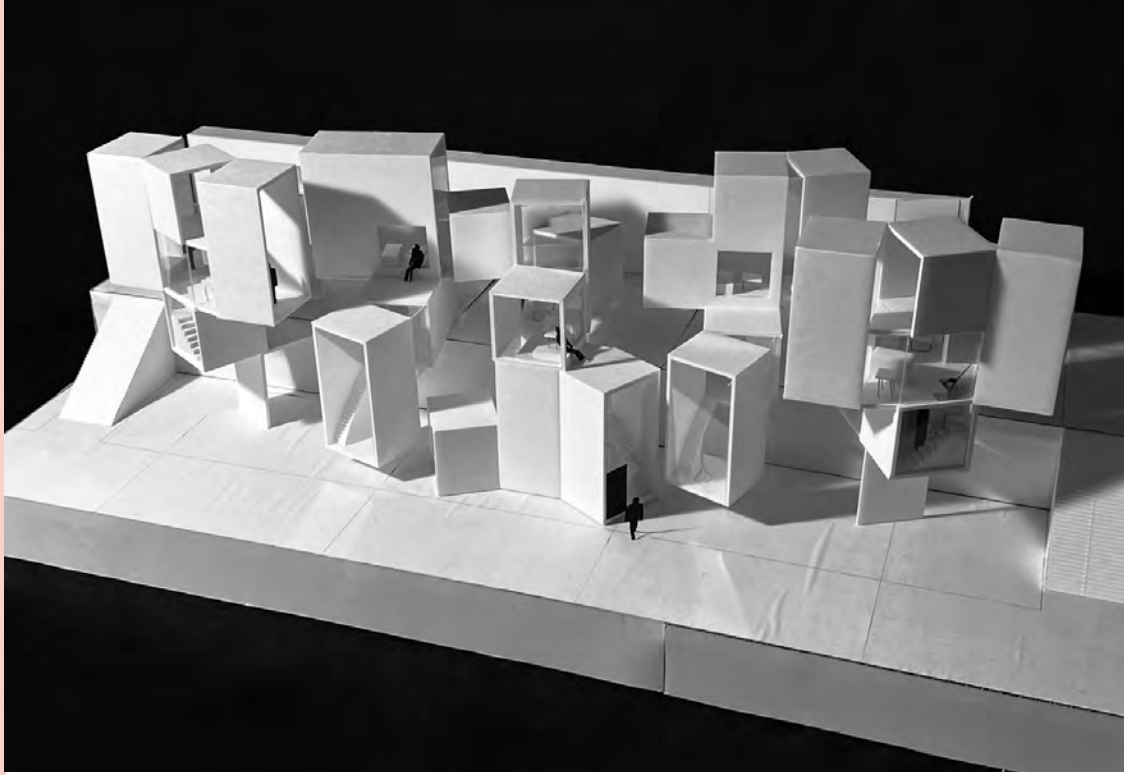
都市部では、必ずしも衣食住を自分の住まいの中で完結させなくとも日常生活を成立させることが可能である。昼夜にかかわらず溢れるさまざまな情報や機能を取り入れた生活に魅力を感じる人は少なくなく、地価の高い都市部において低家賃の狭小住戸が集合したアパートやマンションに住まいを借り、衣食住をまちの中で補いながら生活を楽しんでいる人が多く存在する。しかしながら、そういった集合住宅建築は、高密度な都市部においては小さな箱の集合となりやすく、豊かな住環境（光・風・広さ・機能）の提供が難しい場合が少なくない。そこで、床面積としては狭小でありながら空間的に立体的でさまざまな広がりをもった住戸群からなる集合住宅を設計課題とする。限られた面積や機能が拡張されてより良好な住環境が得られる空間構成や共用部との関係を考えることが重要となる。都市部での生活がより豊かで楽しくなる集合住宅を考えよ。

出題教員コメント

狭小であることをポジティブに捉え、新たな空間の広がりについて考えられた住空間集合住宅の提案を求めた。小野案はヴォリュームに切れ目を入れ折り曲げ、内外の抜けが交錯することで広がりの感じられる住空間をつくっている。藤倉案は幅2m・7層のヴォリュームを49のセルに分け、共用スペースと5つの住戸が断面的につながるように埋めている。薄すぎるスペースが外部をより近づけ、内部空間の奥行きを断面方向にとることで広がりを獲得する興味深い案である。平松案、原田案、小林案、カーン案も細かなレベル設定や、さまざまにコントロールされた抜けを用いて広がりのある空間を構成した秀作である。（伊藤州平）

敷地
- 東京都渋谷区代官山町（ログロード代官山内）
- 敷地情報：第2種住居専用地域／準防火地域
- 敷地面積：400m^2
- 建ぺい率：60%
- 容積率：300%

設計条件
- 高低差、周辺環境や方位などから採光・通風・眺望・活動について考えること。立体的な空間構成により狭小住戸がどういった豊かさを獲得できるかを考え、住戸群を計画すること。
- 要求諸室
  住戸：1戸40m^{2}前後かつ最低2層×5世帯（単身者およびDINKs）。
  共用部：住人同士がシェアすることができ、まち並や遊歩道とつながることのできるスペース。
- 要求面積：300m^{2}程度
- 高さ制限：30m（GL±0からとする）
- 構造：自由
- 階数：建物全体を3層以上とする。

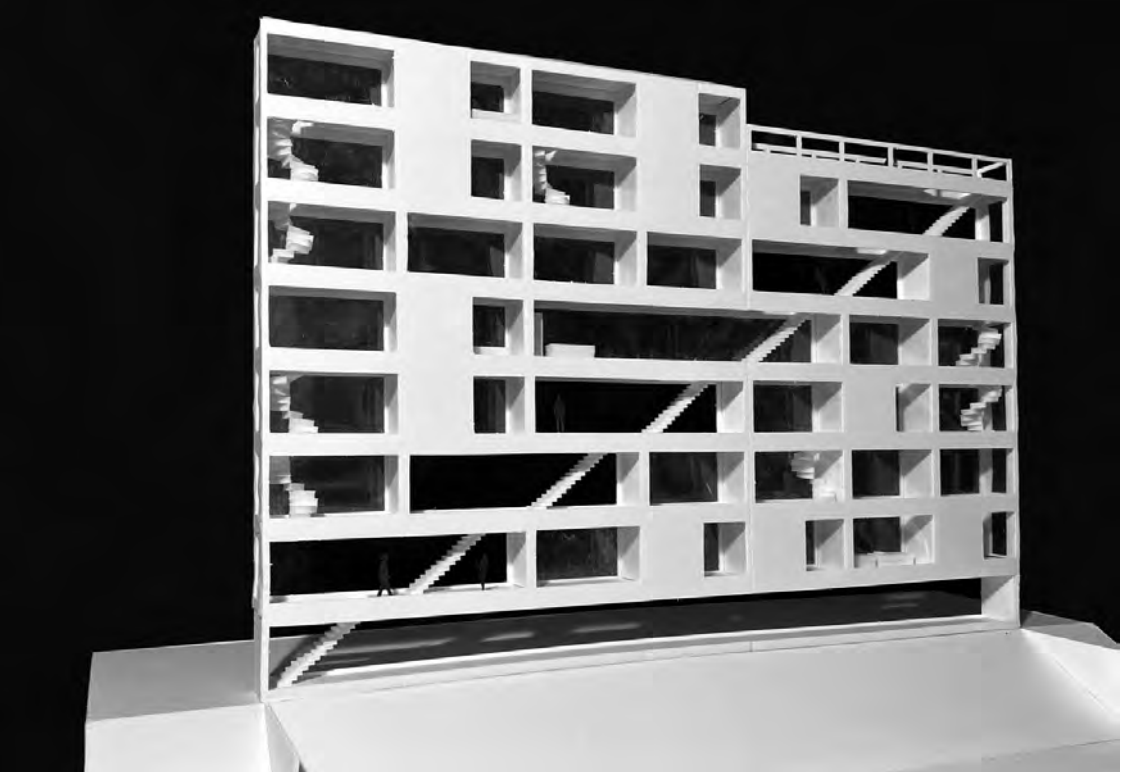


New direction

小野櫻朱
ONO Oshu

周辺の建物と人の流れや動きの視線や動線の軸とは、異なる新しい方向性を軸に平面的、断面的に広がりのある集合住宅である。隣の棟だけでなくさらに隣の棟との関係性がジョイント部分と大きな開口部で変化する。

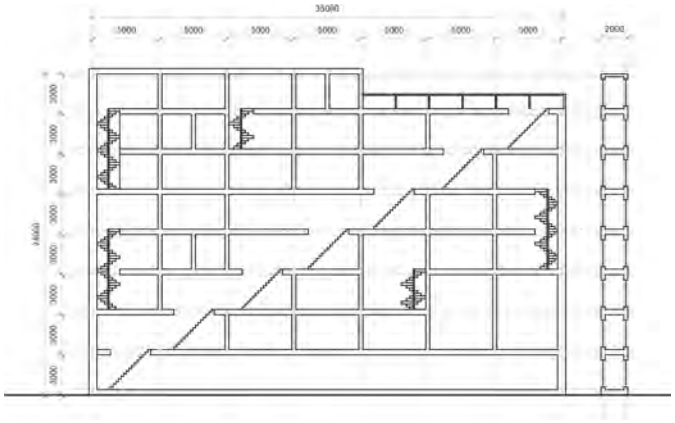




狭長

藤倉茉央
FUJIKURA Mao

発展している都市部なら、住宅の外で衣食住を補えてしまう。それらが外部で補えてしまうのであれば、住宅に広々とした空間は必要とされないのではないだろうか。「最小限の面積で成り立つ生活とは」なにかを考えた。



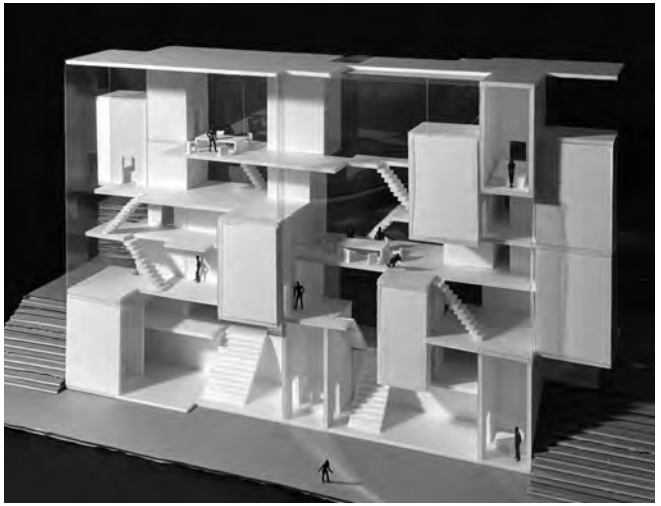
階のない共同住宅



平松虎多朗
HIRAMATSU Kotaro

GLを一階と決めつけず、隣の家の1階が自分の家の3階というように階の基準のない共同住宅。住戸をつなぐデッキ通路も差を設けることで住民とのちょうどいい距離感をもたせ、広く立体的な共同住宅になるようにした。

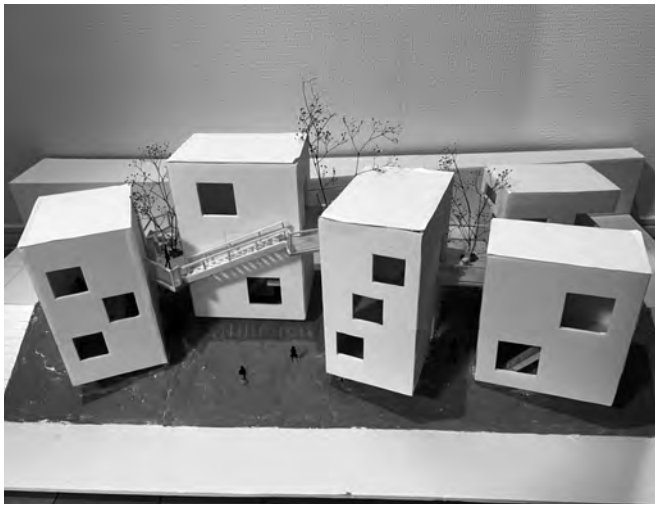
立体的な抜け



原田朋弥
HARADA Tomoya

「視線の抜け」を意識し各部屋を配置する。建物自体にも隙間をつくり、視線の抜けをつくることで、周辺の建物にも感覚的な広さを与える。また同じ操作のもと周辺に伝播させることで、より広いまちになるよう提案した。

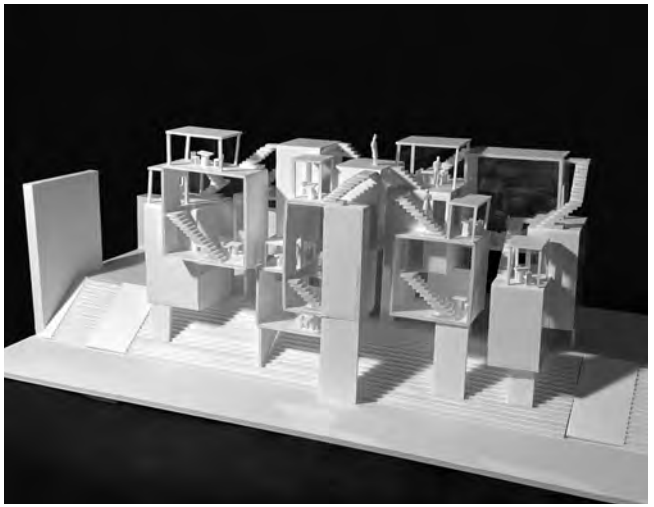
テラスで繋がる集合住宅



佐野愛実
SANO Manami

5つの住宅がテラスでつながった集合住宅を提案した。1階にプライベートな空間と玄関、テラスのある3階にパブリックな空間と玄関を設けた。1階は主人、テラスからは友人を招くことで、プライバシーの確保ができる。

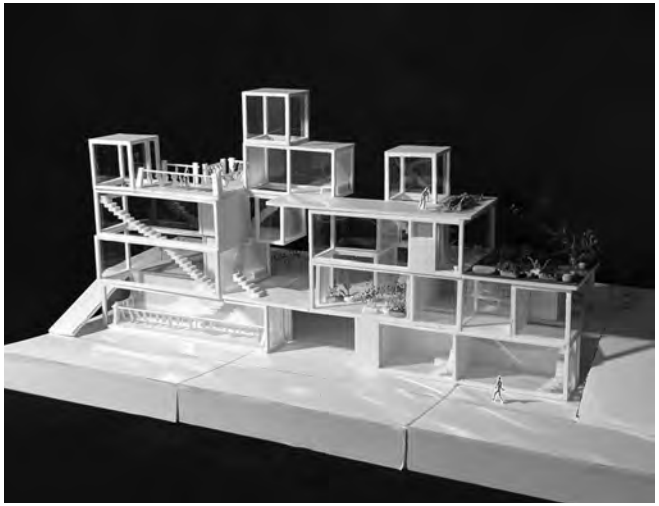
Labyrinth



カーン リファ タスヌバ
Rifah Tasnuva Khan

箱のレベル差や位置をずらすことによって、機能を拡張した。また、1つひとつは小さい空間ではあるが、開口や天井を大きくとることによって、開放感のある空間にした。さらに、住戸の大きさ・高さ・数も変えた。

見せる家



小林彩音
KOBAYASHI Ayane

おしゃれな街である代官山にはおしゃれな人が集まる。そんな自分の生活を見せたいという人たちのための住戸である。そのため壁はほぼ無く部屋がガラスで覆われており、中からも外からも生活が見えるようになっている。

差に住むこと



中山太陽
NAKAYAMA Taiyo

床レベル、形、天井高、積み上げの4つの差を用いて、ありふれた集合住宅たる箱にはできない空間をつくりだす。別の住戸で同じスラブを共有、床レベル差による機能の違いなど差を全面に押し出すことによる住まい。



5・6 semester

建築デザイン演習 4-5

Architectural Design 4–5

建築設計を本格的に学ぶ授業です。実際的な設計作業に準じる課題が出され、第一線で活躍する建築家によるエスキスチェックを少人数で受けます。建築デザイン演習4では、まちのサーベイからはじまり、中規模公共建築を考えていく設計手法を学び、建築デザイン演習5では低層と高層の複合建築を設計する総合力を学びます。

Architectural Design 4 and 5 are advanced subjects focused on larger buildings, more complex programs, and full-scale process of architectural design practice, which includes planning, structure, equipment, etc.

建築デザイン演習4　第1課題

シモキタ・スモールリノベーション

街をサーベイし、小さな操作で大きな変化をつくる



担当教員：河内一泰、山﨑俊裕、岩崎克也
納谷 新、井上 玄、山口紗由、山下貴成、佐屋香織、武田清明

リノベーションとは一般的に建物の改修のことです。ゼロからつくる新築とは違い、元々ある素材や構造を活かしながら一部に変更を加えて、新しい空間の見え方や使い方を生み出すものです。

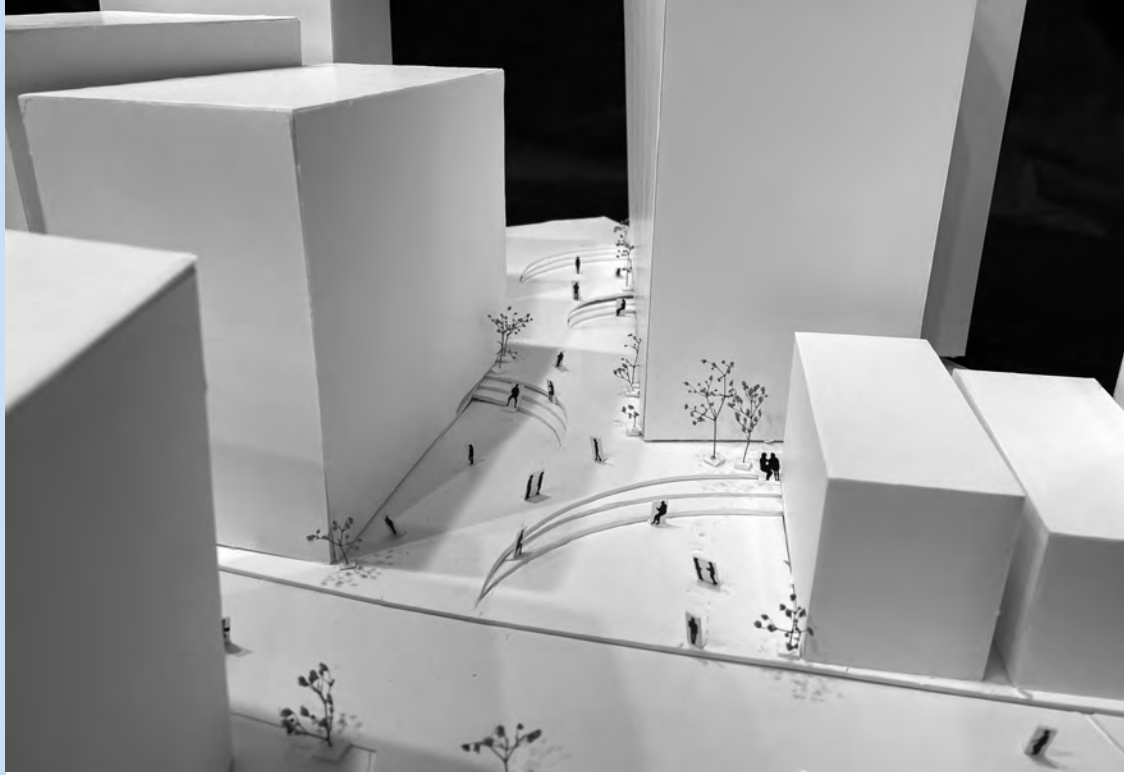
この課題では下北沢駅北口周辺を素材とした「街のリノベーション」に取り組んでもらいます。建築は道に面して建てられ、その道が集まって街となります。道と建物の境界を考えることは街の風景を考えることにつながります。街をサーベイ（観察、調査）し、小さな操作で大きな変化をつくる提案をしてください。元の街の素材を最大限に利用しながら、最小限のデザインを加え、より豊かな街の風景や人の居場所、人の流れなどをつくってください。

下北沢はもともと歩きながら楽しめる路地のたくさんある街です。コロナウイルス感染症の影響を受け、建築は街に開かれようとしています。みなさんの自由な発想を期待しています。

出題教員コメント
優秀案に選ばれたものの多くは道と建物の境界線をデザインすることで道が動線から居場所になり、建物とまちが混ざっていくという案だった。小倉案や大野案は路地と建物の境界線を編集した。岩上案は既存建築の床レベルと素材を道に延長した。既存建物の軸組を延長し道に再構築した佐々木案も新鮮な提案だった。なかでも緩やかな坂道を等高線の広場に変換した中元案は単純なデザインだが、大らかなスケールによって境界線を横断しているのが良かった。（河内一泰）

敷地
・下北沢駅周辺で各自設定する。

設計条件
・建築的・都市的な提案であること。
・規模は特に規定しない。
・周辺とのかかわりに配慮した提案であること。
・新しいアクティビティを発生させるために必要な機能を含むこと。

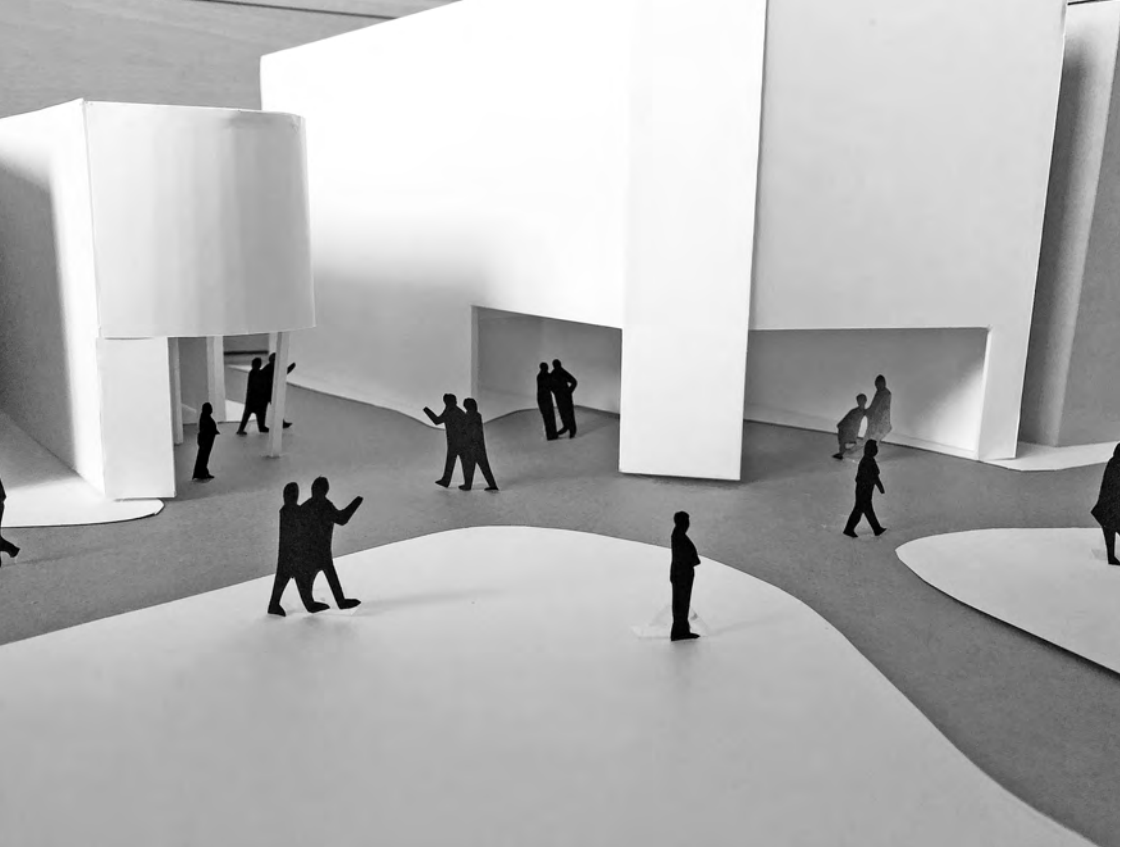


暈（ぼかす）

中元萌衣
NAKAMOTO Mei

下北沢で活気のある通りが2つ存在する。各々が独立しているため、住宅街で人通りが少ないが、引き込まれるような魅力があると感じた路地を敷地に選び、独立した2つの通りの境界を暈すことをコンセプトとした。





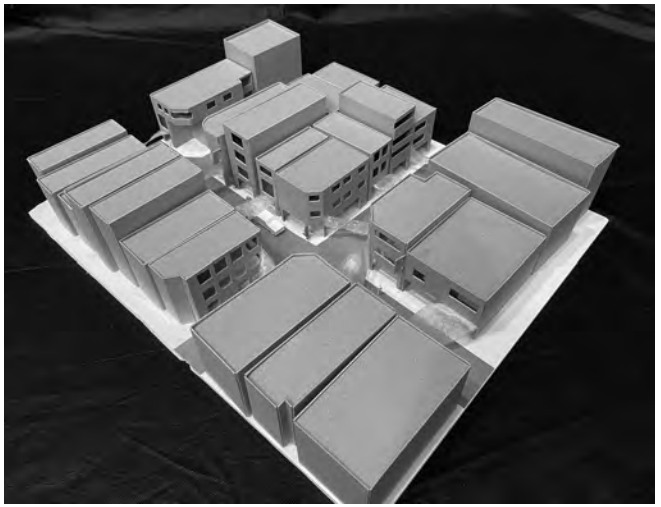
曲線が作る居場所

小倉南風
OGURA Minami

商店街の直線的な人の流れを変えるために十字路を構成する四隅の店舗の敷地を削ったり、広げたりすることで道の重心をずらした。重心をずらすことでできた「たまり」に人々の新たなアクティビティが生まれる。



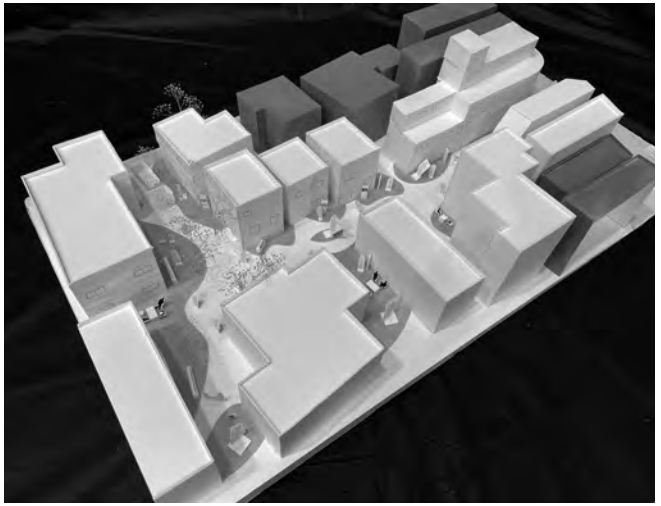
見え隠れアーケード



長瀬ルナ
NAGASE Runa

モノの多い下北沢。半透明のテントの効果で近づくと見え、遠ざかると見えない景色がつくられる。重なる半透明のテントが見えるものを制限することで、人々は本当に必要な情報を受け取ることができる。

芸術と暮らしを繋ぐ道



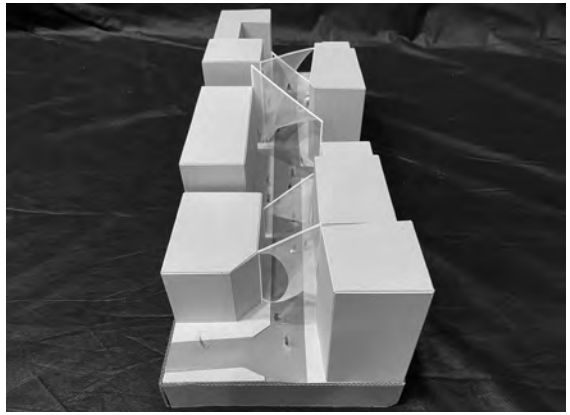
大野維親
ONO Ichika

1階にある貸しギャラリーと住宅を芸術を介してつなげるために、ギャラリーの道に面した壁の一部取り除き、ギャラリーの床に使われていたフローリングを動線を意識しつつ道に展開した。

可変性のあるファサード

渡部裕介
WATABE Yusuke

シモキタを歩く楽しさを再発見させるために視線と動線をやわらかく操作する。のれんのように布を掛けて視線を制限すると、くぐって歩く楽しさを感じられる。建物をつなぐフレームは既存のまち並みの良さを気付かせる。





個性が集う路地

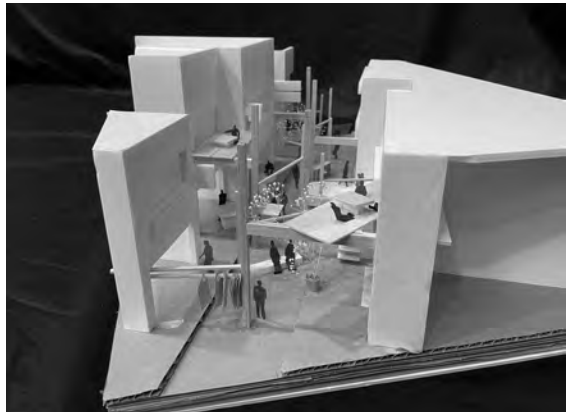
岩上奈菜美
IWAKAMI Nanami

強いファサードをもたない路地に、元々あるお店の高低差、テクスチャを道に延長させ、それらをつなぎ合わせる。緩やかに動線を操作し、隣同士の領域を曖昧にすることで、交流が生まれ、にぎわいのある路地となる。

シモキタを拡張する

佐々木 優
SASAKI Yu

下北沢は古着屋や劇場、音楽、アートなどさまざまな個性で溢れている。そこで個々の店舗の構造体を通りに拡張し、それを頼りに住民たちの手で、さらに柱や梁を拡張して店舗ごとの個性(看板や展示など)を拡張する。



建築デザイン演習4　第2課題

シモキタ・サテライトキャンパス

下北沢に建つ東海大学建築学科のサテライトキャンパス



担当教員：河内一泰、山﨑俊裕、岩崎克也
納谷 新、井上 玄、山口紗由、山下貴成、佐屋香織、武田清明

下北沢の北口の商業地と住宅地の混在するエリアの一角に東海大学建築学科のサテライト機能をもつサードプレイスを計画する課題です。サードプレイスとは自宅(ファーストプレイス)でも職場・学校(セカンドプレイス)でもない自分にとって心地の良い時間を過ごせる第三の居場所という意味です。通常の大学の教室とは違い、まちの人にも開かれた場所で学んだり発信したりする場所です。下北沢の小さなスケールのまち並みや路地などの人々のアクティビティを引き込みながら、建物内外で起こるさまざまな活動が緩やかに交わる建築のかたちを考えてください。

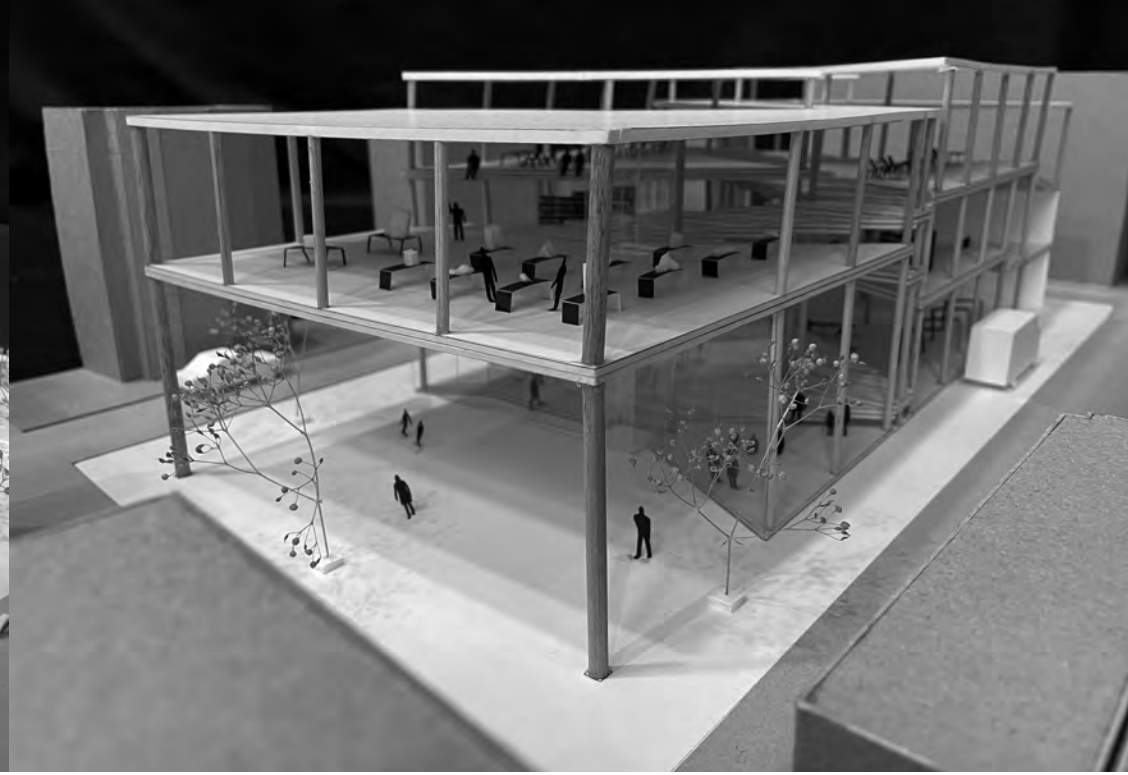
出題教員コメント
下北沢のまちの小さなスケールや雑多な風景を引き継ぎながら中規模の建築をつくるときにどのような形式が良いのか考えさせられる課題だった。大野案、木村案、大石案のように手数を尽くして多様な空間をつくることもできるし、都丸案や吉松案のように単純な形式によって複雑な風景をつくっていくこともできる。個人的には後者の方に惹かれる。都丸案の平行四辺形の階段の形式や、吉松案の路地を再構築した形式に発展性があると感じた。
(河内一泰)

敷地
・東京都世田谷区代沢
(小田急鉄道小田原線 下北沢駅下車徒歩数分)
・敷地面積：1,450㎡
・用途地域：商業地域
・建ぺい率：80%
・容積率：500%

設計条件
・構造：自由、階数2階以上、地下可能(敷地には1m程の高低差があるが活用しても無視してもいい)
・建築規模：延床面積1,500m²程度

施設内容
・教室(授業、ワークショップ、講演会など、150m²を2室、50m²を2室)：400㎡
・メディアサービス、図書コーナー：200mm²
・展示イベントスペース(まちの人が利用する)：400m²
・その他自由提案(カフェ、ミーティング室、ものづくりセンターなど)
・トイレ2カ所、階段2カ所、EV1カ所
・管理機能(事務室、倉庫)：100m²
・搬出入、荷捌室、機械室：100m²
・屋外広場(ピロティーや屋上も可)：300m²
・搬入車スペース：2tトラック1台分





見る、見られる

視認性をテーマにさまざまな場所で「見る、見られる」関係性が生まれ、相互の行動に変化が起こることを狙い設計した。また、半屋外空間を各フロアに設け、開放的な空間になるようにした。

大野維親
ONO Ichika



Step Place

下北沢の平面的なカタチと、ステアとフロアの組み合わせによる立体的なカタチの掛け合わせで、壁のない連続的なStep空間を生み出す。利用する人々の使い方で空間の規模やつながりが変化するようなキャンパス。

都丸優也
TOMARU Yuya

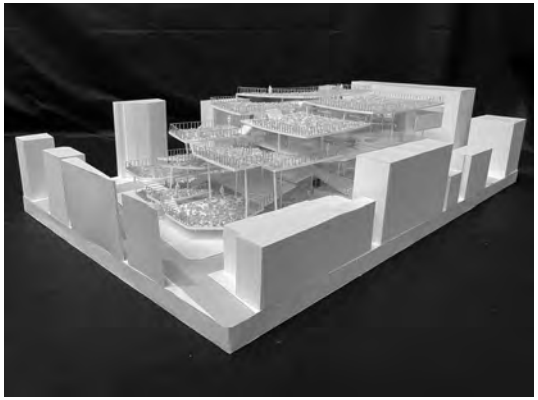




引き込まれる街並み

木村友香
KIMURA Yuka

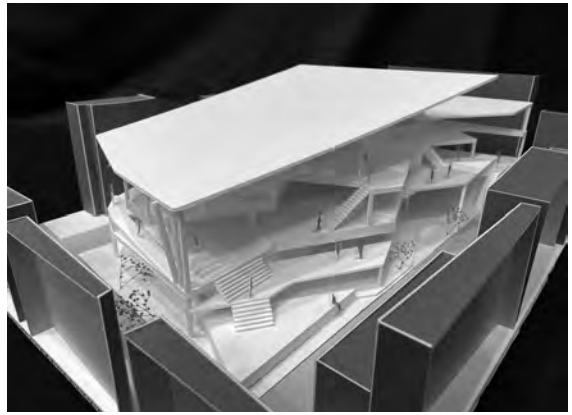
平面的、断面的、空間など、どこかしらでつながりをもっていながら、そのつながりが複雑である空間を考えた。サードプレイスと下北沢の特徴を合わせることで生まれる空間を考えた。

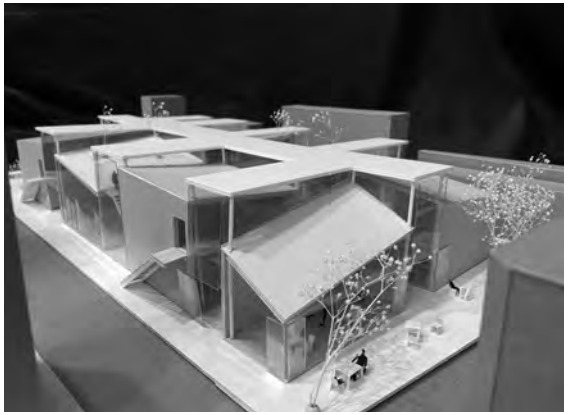


まちの踊り場

大石真輝
OISHI Masaki

拡張された踊り場を連続的に配置し拡張させることで、人々がただ通り抜けるのではなく溜まれるような場所ができ、踊り場で人々と交流しながらキャンパス内の教室やカフェなどへ行き来することが可能となる。





遭遇の路地

吉松佳亮
YOSHIMATSU Keisuke

箱を路地空間に開くことで箱の内部に溜まっていたアクティビティが路地空間に溢れ出し、向かい合う箱のアクティビティと混ざり合う。混ざり合うことで、新しいアクティビティが自然発生する。

浮遊する空間

渡部裕介
WATABE Yusuke

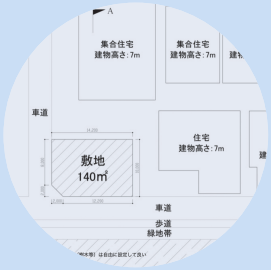
壁による「空間の文節」と「構造の制限からの脱却」を目指した。箱型の空間は壁を貫くように差し込み浮かせ、壁で支えることで階高に縛られない配置を実現した。斜めに配した壁で周辺や他階との関係性をつくる。



建築デザイン演習4　第3課題

自然と建築

自然公園のとなりに建つ住宅



担当教員：河内一泰、山﨑俊裕、岩崎克也
納谷 新、井上 玄、山口紗由、山下貴成、佐屋香織、武田清明

あなたの周囲をとりまく環境のなかで、もっとも興味のある自然（※1）一つに着目してみよう。それをよく観察分析し、建築や空間に活かせそうな機能（※2）を見つけてみてください。その機能が、建築のエレメントの一部を補完することができれば、これまでにない新しい合理性をもった空間構成が生まれるかもしれません。ここで求められる自然を受け入れる建築とは、単に大きな開口で自然の風景を取り込む建築のことではありません。自然から空間的、環境的、構造的な機能を抽出し、自然と新しい接続性を発見した建築のことです。周囲をとりまく自然も含めて建築計画し、自然と建築が融和した家の中で、どのような快適性、空間の質、新しい生活が生まれるのかを創造してみる課題です。

※1の例_植物、樹木、葉、枯葉、幹、枝、蔦、花、果実、種、根、土、砂、石、岩、丘、谷、山、川、池、湖、水たまり、結露、地下水、雨、雪、氷柱、霜、霧、雲、光、朝日、夕日、月光、虹、風、昆虫、鳥など。

※2の例_あたたかさ、冷たさ、静けさ、賑わい、響き、明るさ、暗さ、影、反射、色彩、風通、素材感、手触り、高さ、広さ、狭さ、奥行き、柔らかさ、硬さ、強さ、弱さ、移ろい、可変性、柔軟性、透過性、蓄熱性など。

出題教員コメント

災害を経験するたび、自然と空間の境界、人間と他生物の居場所の分断はますます強くなっています。我々は自然がつくり出す環境が豊かで美しいということはよく分かっているからこそ、庭に植栽をしたり、屋上や壁面に緑化を施したりします。しかし、建築や人の居場所の賑やかしとしての植物は、人間側からの一方的な視点で計画されたものです。人と他生物の暮らしの間に、お互いが無くてはならない存在として、需要と供給を相互補完し合える新しい合理性で成り立つ建築はないだろうか。木村案は、人だけでなく、植物という他生物も受け入れようと試みた家。植物を、単なる添景・賑やかしとしてではなく、人の住空間を構成するための“生きたエレメント”として捉え、自然がつくりだす豊かさ、恵みを日々実感できる暮らしを生みだそうとした、これからの建築提案に感じました。（武田清明）

敷地
・東京都の住宅地内の自然公園に面した敷地。
敷地面積140m^2。

建築条件
・延床面積：室内で100m^2（100m^{2}以下は不可）
・用途地域：住宅地域
・建ぺい率：60%
・容積率：150%
・階数：自由（地下も可能とするが、地上階にも立面が存在すること）
・最高高さ：10m
・構造：自由
・住人は2人以上（各自設定のこと）。
・庭、駐車場1台、を含む敷地内のすべての外部を設計すること。

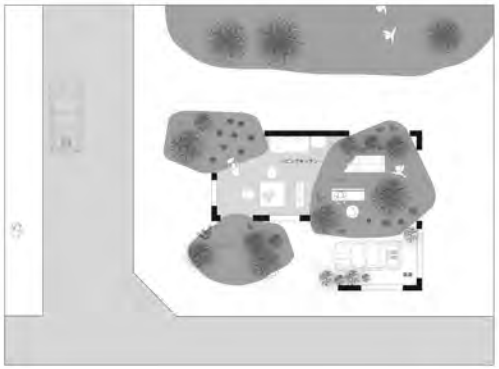


補完し、拡張する

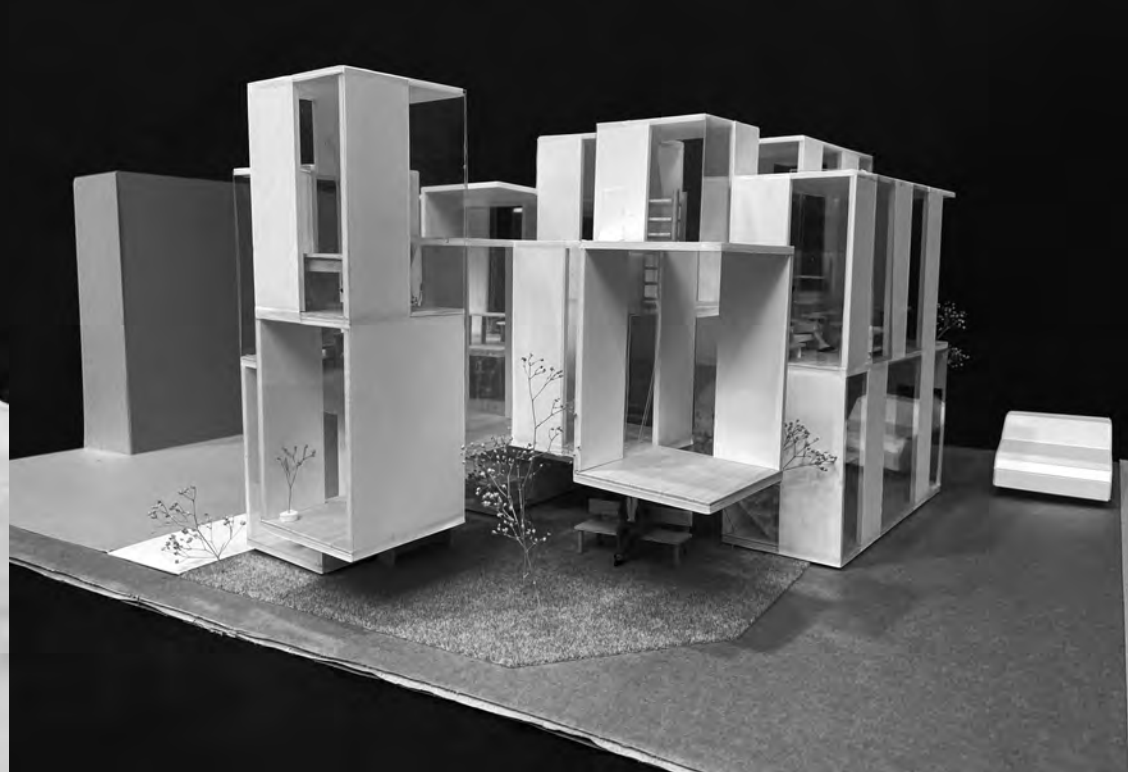
池谷琳花

IKEYA Rinka

樹木や土は空間を曖昧に区切ったり、広げるような効果をもっている。そんな自然を、外壁や屋根に設けた開口に介入させることで壁や屋根や床を補完しつつ、人のアクティビティを拡張していくような建築を考えた。



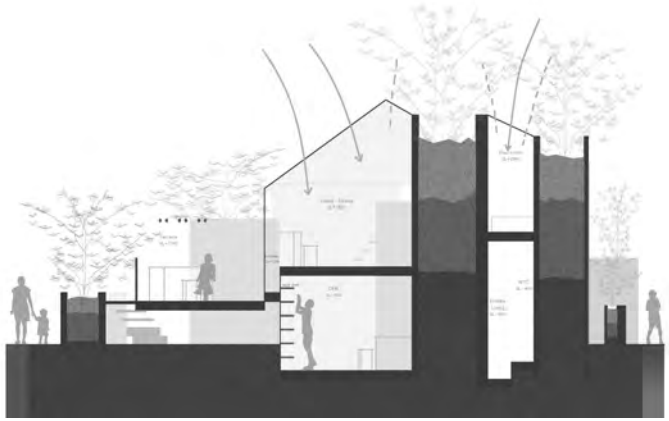




充実した余白

人の場所を囲うのではなく、自然を囲み、囲むことによって生まれた余白に人が住みこむように考えた。自然（木）があるから、人が住める空間になり、居場所も生まれる。

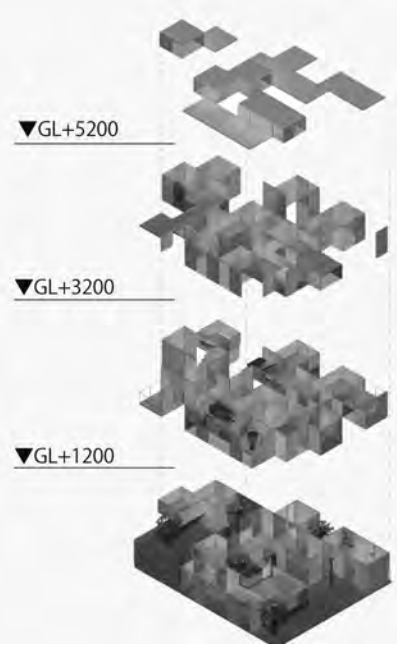
木村友香
KIMURA Yuka



木に生きる家

和内秀龍
WAUCHI Hideto

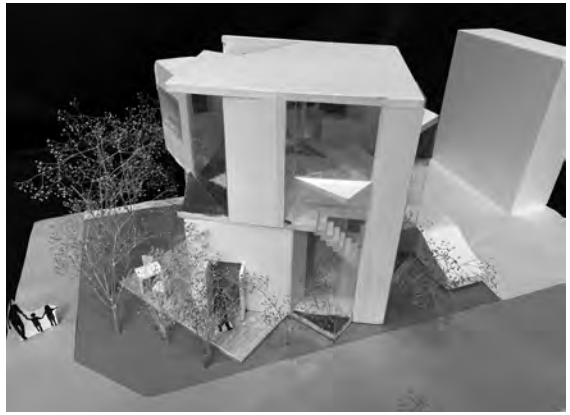
「木」という植物のもつ遮光や透過、高度による見え方の違いといった性質や機能を人間大のスケールに落とし込み、木の中に生きつつ周りの木々と共生することで、より心地良い空間が得られる建築とした。



自然が染み込む暮らし

大野維親
OHNO Ichika

新しい空間を生むために、自然の上に住宅が建つという建築が自然と同等もしくは自然の方が上の関係性になるように意識し、より人と自然との距離が近くなり、外と中が連続するように設計した。





拡がる領域

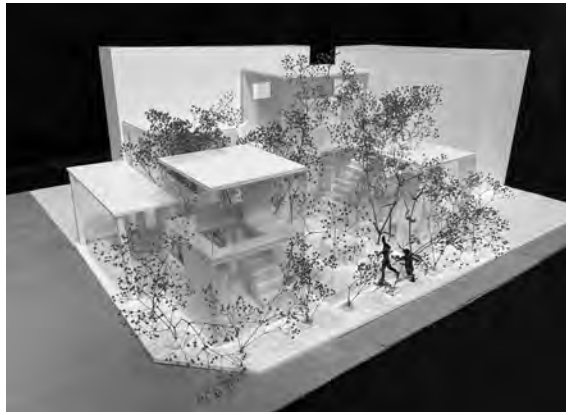
吉松佳亮
YOSHIMATSU Keisuke

木の空間構成を住宅に置き換えて考えた。住宅の2階部分は異なる高さの床がさまざまな領域をつくり出し、住人が暮らす。住宅の1階部分は外部に開くことで、家族や友人と集い、憩いの場として使用される。

「キ」の中へ入る家

久保木悠理
KUBOKI Yuri

「穏やかさ」を表現した。家の機能ごとに分岐化して樹木が接する部分が多くなり、穏やかで時がゆっくり流れる空間を目指した。樹木に高低差をつけることでリビングへ誘導する。

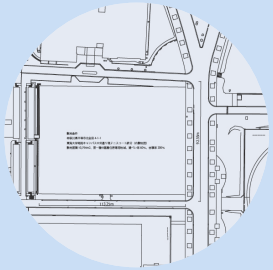


建築デザイン演習5　第1課題

湘南メディアライブラリー

建築に都市空間を内包させ、
公共性をもつ低層建築の意味を考える

担当教員：岩崎克也、渡邉研司、河内一泰
　　長谷川祥久



この課題では、20年後の大学図書館のあるべき姿を考えてほしい。

メディアとは何か？ 現代の本は文化の根源的メディアです。しかし、デジタルツールの普及によりデジタルメディアがさらに普及することが予想されます。最近ではデジタルメディアに対してプリントメディアという言葉も使われるようになり、これまでの本の位置づけも変わってきています。また、学生や教員を対象とした図書館から地域の人も利用できる図書館へと、その機能は学内にとどまらず外部の社会へと情報のリンケージを図っています。

敷地は湘南キャンパスのなかでも富士見通りを中心とした文科系ゾーンと中央のケヤキ通りを軸とする理工学系ゾーンの結節点にあたります。複数の学部学科が利用する文理融合キャンパスとして求心力のあるマグネット効果をもつ皆さんが実際に利用してみてワクワクするようなライブラリーの提案を期待します。湘南キャンパスの学生、教員、外部の市民のアクティビティを引き込みながら、さまざまな活動が緩やかに交わる建築のかたちを考えてください。

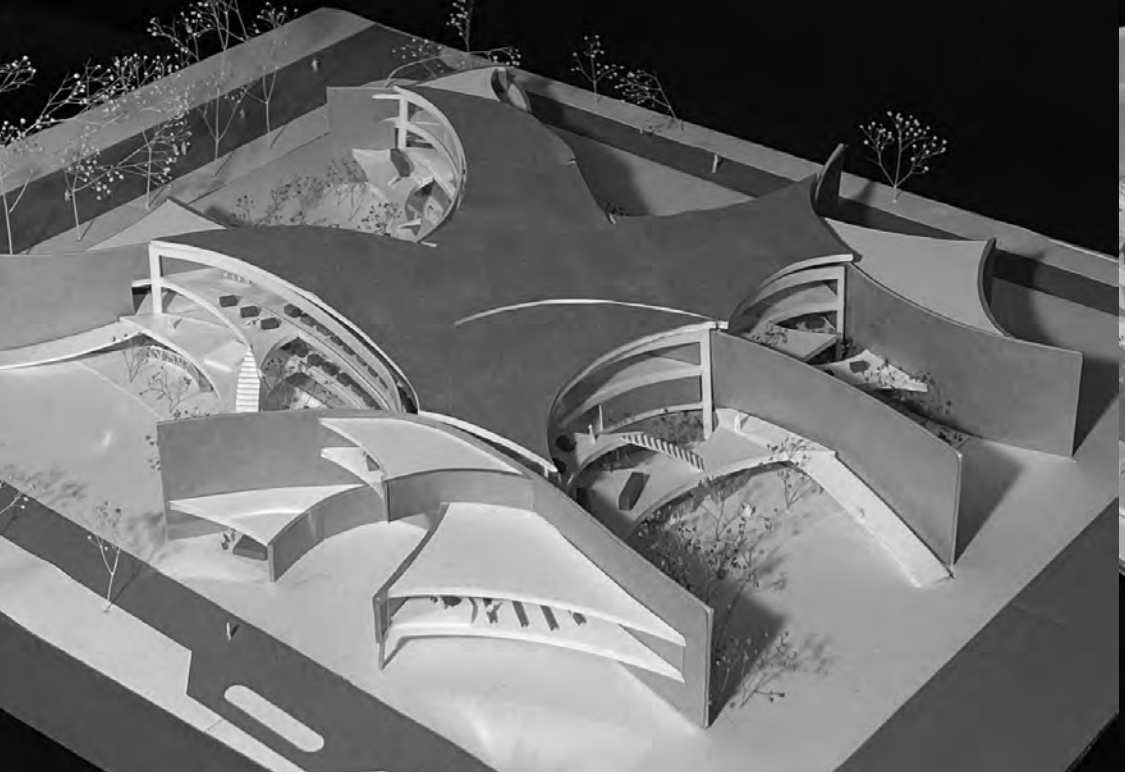
出題教員コメント
実際にこれから設計が始まる図書館を課題とした。同時に、20年後の図書館はどのようになっているか？ を合わせて考える課題である。これまでの図書館建築の「形式」から、メディアライブラリーという新しき概念を入れることで新しい「形態（カタチ）」が生まれるかどうかの問いかけでもあった。また、キャンパス内の閉じた環境ではなく、いかに外部の環境（社会）との接続を図る空間の構築も、課題としての意図があったが、ここまではさすがに難しすぎたようだ。（岩崎克也）

敷地
・神奈川県平塚市北金目 東海大学湘南キャンパス中央通り現テニスコート部分
・敷地面積:10,794m^2
・用途地域:第1種中高層住居専用地域
・建ぺい率:60%・容積率:200%

設計条件
・構造:自由、階数2階程度
・建築規模:延床面積7,500m^{2}程度

施設内容
書架（開架7万冊 1,400m^2+閉架1万冊、160m^{2}程度）、ラーニングコモンズ・閲覧席（500席程度、1,750m^2）、クワイエットルーム（周りとは切り離された静かな環境、85m^2）、ワークショップ学習室（85m^2×2室、講義スペース60人、160m^2）、レクチャー講演会スペースなど（400m^2）、レファレンス・ブラウジングコーナー（150m^2）、受付+作業スペース（100m^2）、カフェ（35席、180m^2）、外部、内部からそれぞれ直接アプローチができる エントランスロビー（トランジットスペース、200m^2）、メディアスペース（230m^2）、その他プログラム（自由提案、200m^2、関連性のある別のプログラム※を加えた提案する）、トイレ各階男女+多目的トイレ各1カ所（各階85m^{2}程度）、階段2カ所以上、EV1カ所、面積適宜、管理機能（事務室、倉庫、180m^2）、機械室＋設備シャフト（延床面積の8%程度、600m^2）、搬入車スペース（100m^2、2tトラック1台分）、その他（キャンパス全体のアクティビティ〈人の動く、軌道〉を観察して、周辺の外部空間を含めて提案すること）

※プログラムを重ねること、双方に利点のあるものを提案



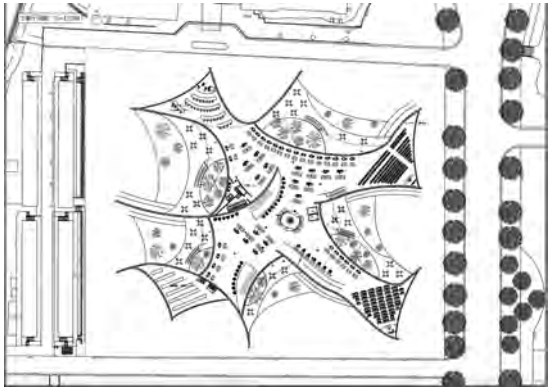


領域を揺らがす

「巡り」そして「出会う」図書館

壁を「めくる」と、書架を「全体に配置する」という操作を行うことで、空間としての領域が揺らぎ、アクティビティが混じり合うようになり、人が探求心の下で図書館を巡り、同じ興味をもつ者と出会う図書館となる。

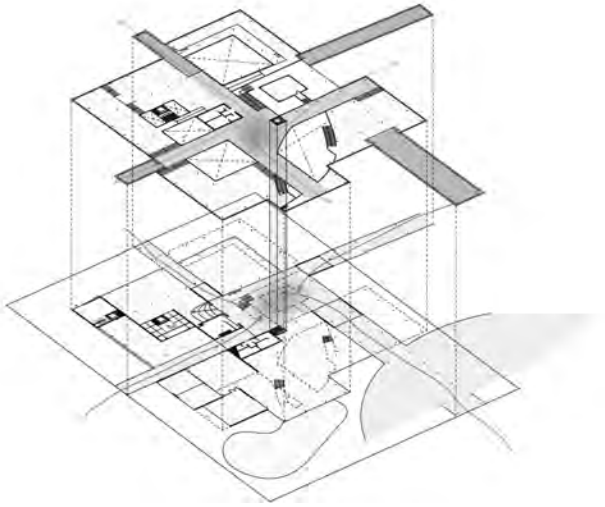
池谷琳花
IKEYA Rinka

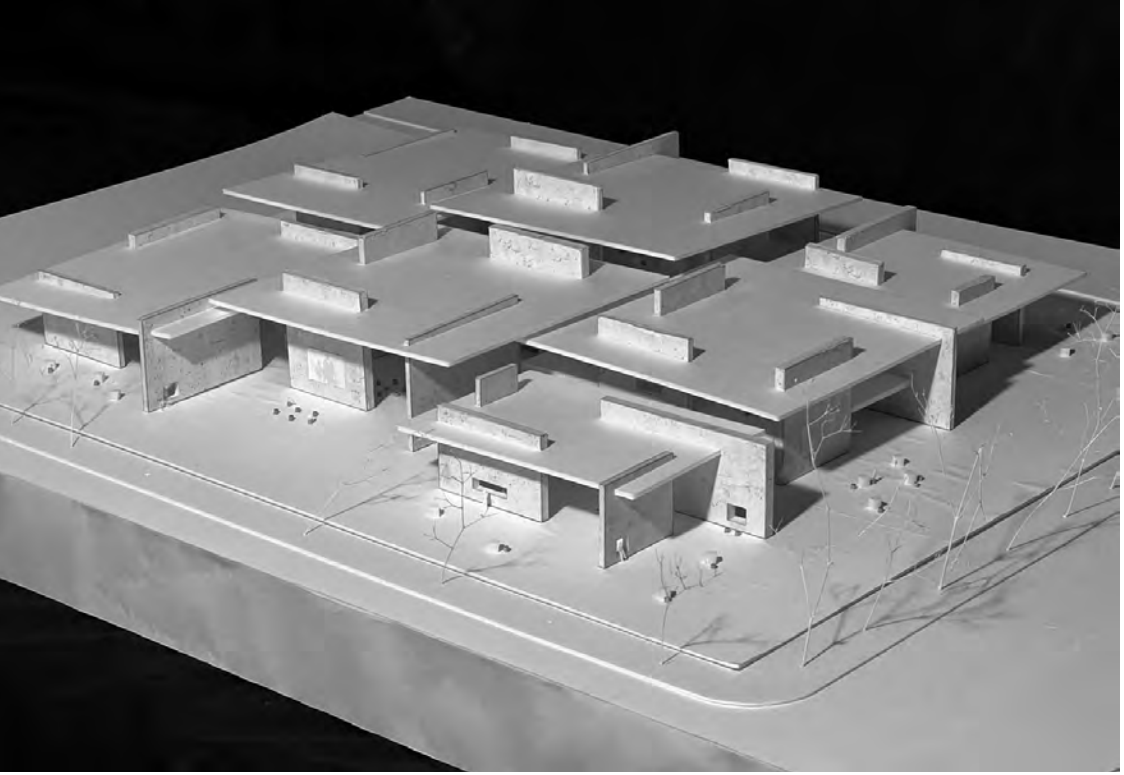


「きっかけ道」

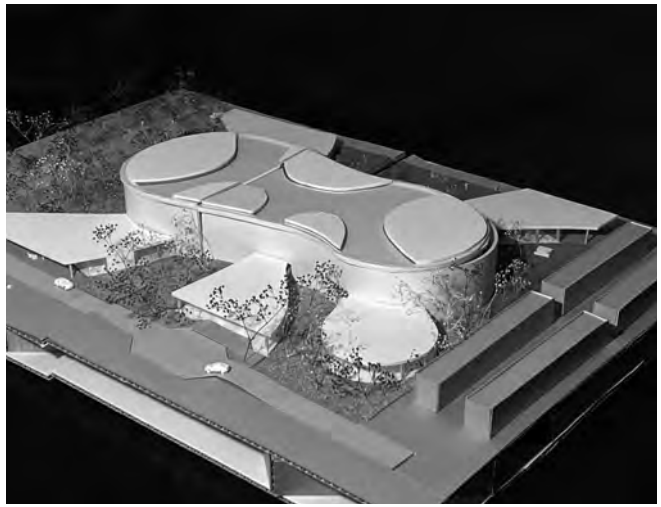
岩上奈菜美
IWAKAMI Nanami

既存する4つの道を敷地内に延長させ、交流が生まれるきっかけを生み出す。緩やかにつながる空間は“きっかけ道”によって拡張され、敷地内にとどまらずアクティビティが重なり合うメディアライブラリーを設計した。





本の世界



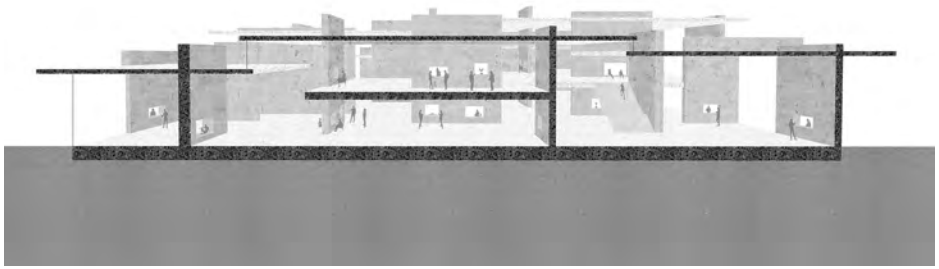
富張颯斗
TOMIHARI Shoto

変わり続けるものがあるように変わらないものもある。それは、好奇心や向上心、探求心である。奥へ奥へ向かう。そんな心をくすぐるような空間を目指して建築のかたちを考えた。

壁を介す

現代はデジタルメディアの普及によりさまざまな情報が飛び交っている。しかし、その情報は時間をかけずに得ているため、知りたい情報以外は遮断してしまっている。そこで、壁自体をメディアとして扱う図書館を提案する。

吉松佳亮
YOSHIMATSU Keisuke



おおらかな道



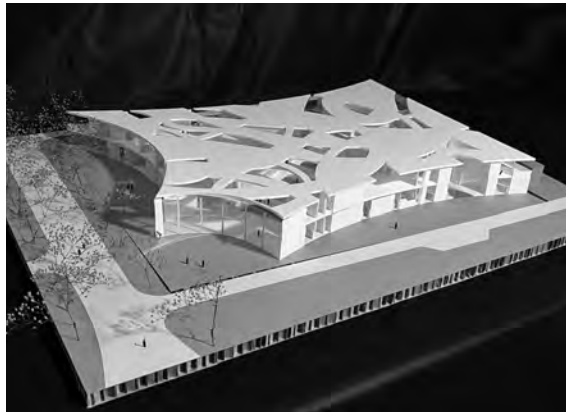
渡部裕介
WATABE Yusuke

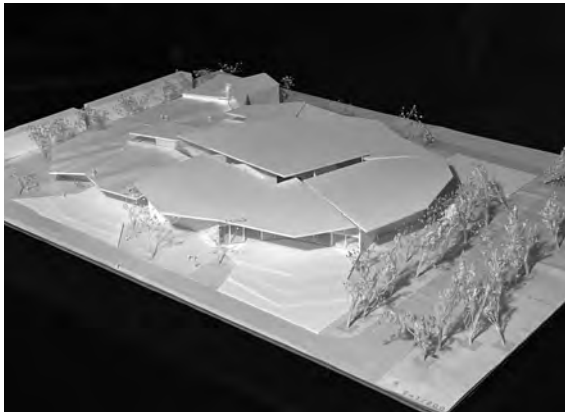
人の自然な動線をもとに回遊性のある空間を設計した。幅の広い動線自体を居場所とすることでさまざまな活動が混ざり合う。緩やかなスロープを上っていくと、大空間の中に書架との新たな距離感をもった空間が点在する。

偶発のセル

津村 翔
TSUMURA Kakeru

ネット検索すれば情報を得られる。それでも人が図書館へ行くのは偶発的な知識収集を求めるからであり、この提案は偶発的な知識収集を曲線と捉え、曲線でできた空間で知識との偶発的な出会いを生む空間を設計した。





本の為の壁

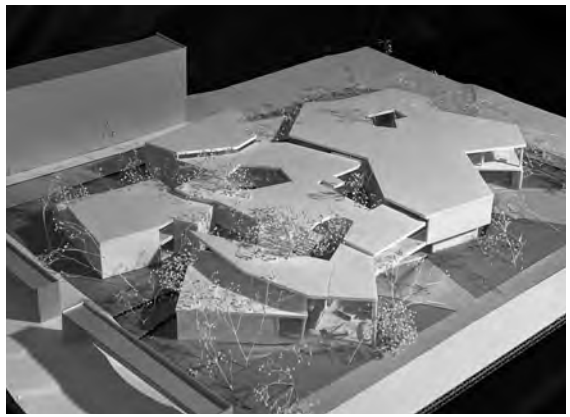
木村友香
KIMURA Yuka

本棚のあり方を壁に置き換えることで、壁が本のある場、さまざまな人の場にもなっていく。さまざまな目的をもった人のそれぞれの活動が、本壁によって緩やかに感じ、交わりが生まれる。

森の中の図書館

大林 愛
OBAYASHI Ai

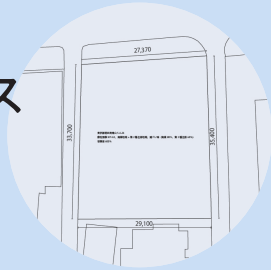
敷地周辺の既存の木々をそのまま利用し、森の中を抜けるような図書館を計画した。図書館に引き込むとなるように樹木を植え、図書館は柱とガラスで仕切ることで、木の下のように内と外が曖昧な空間を設計した。



建築デザイン演習5　第2課題

青山・コマーシャルコンプレックス

新しい公共的な場所を考える　多層建築×都市にひらく



担当教員：岩崎克也、渡邉研司、河内一泰
長谷川祥久

敷地は青山246通りに面し、隣には青山スパイラルビル（設計槇文彦）の建つ場所です。青山は、おしゃれ・洗練されたまちとしてブランディングにも成功しています。そのイメージ戦略とともに多くの企業がコマーシャルスペースとして注目をしています。今回はこの都市のブランディングに寄与するコマーシャルスペースコンプレックスです。

コマーシャルスペースとは本来、商業建築を示しますが、単なる企業の売り場としての商業建築の床ではなく、建築や空間そのものが企業ブランディングとして都市に発信できる空間を目指します。また、今回の課題は、高さの違うそれぞれのヴォリュームをどのようにしてつなぎ、切りながら建築化するか？ その断面的な思考が求められます。さらに、隣接するスパイラルビルが青山通りとの関係を注意深く空間として組み立てているように、都市空間をどのように建築の中に引き込むかも考察して、かたちとしてデザインをしてゆく必要があります。

まずは、青山通りを観察して、どのような企業のコマーシャルスペースとするのかを具体の企業を各自で決めてください。その企業と青山という都市との関係性を問いかけて、双方のブランディング向上のためのかたちとしてください。

出題教員コメント
建築を計画するクライアントまでを提案するという課題である。通常のリサーチに加え、クライアントの企業理念を調べ、形・デザインとの整合を図りながら案を練りあげるというこれまでにないプロセスの課題である。企業理念とカタチは卵とにわとりの関係にも近しいが、最終的には、両者が上手にマッチングした作品で、企業にとってのベネフィットとして「青山という敷地で企業理念が効果的に発信される提案かどうか」が評価のポイントとなっている。（岩崎克也）

【敷地】
・東京都港区南青山（地下鉄表参道駅B3出口すぐ。敷地見学の際に私有地に絶対に入らないように）
・敷地面積：971m^2
・用途地域：商業地域＋第2種住居地域
・建ぺい率：商業80%、第2種住居60%
・容積率：600%（246道路境界より30mの範囲）

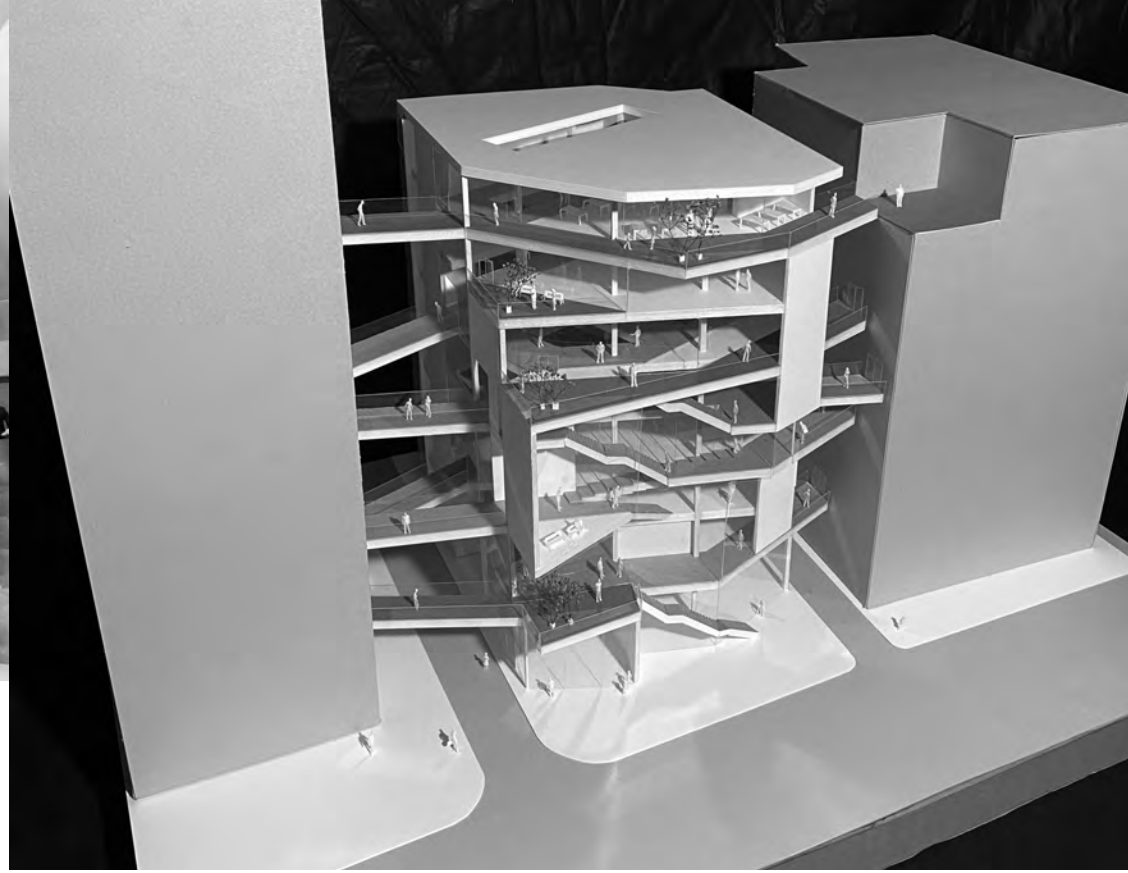
【設計条件】
・構造自由（鉄骨造、RC造、SRC造、PC造）
・階数：地上9階程度、地下1階程度
・建築規模：延床面積6,000m^{2}程度

【施設内容】
1. 本課題の特徴を引き出す諸室
a：イベントホール1（平床、400m^2）
b：イベントホール2（240名収容、285m^2）
c：展示ギャラリー（520m^2）
d：インタラクティブスタジオ（520m^2）
e：レストラン（500m^2）
f：カフェ（200m^2）
g：ショップ（230m^2）

2.1をサポートするエリア
・エントランススペース（適宜）
・管理事務スペース（520m^2）
・便所（350m^2、各階に適宜）
・機械室（600m^2、各階分散）
・防災関連備蓄倉庫（150m^2）
・階段室（2カ所以上）

【その他】
下記の3つのキーワードの回答を提案の中に盛り込むこと。
キーワード
1. 回遊性
2. インターフェイス（内と外との関係性）
3. 床レベル差による領域設定（各階の主たる床にはEVでアクセスできること）





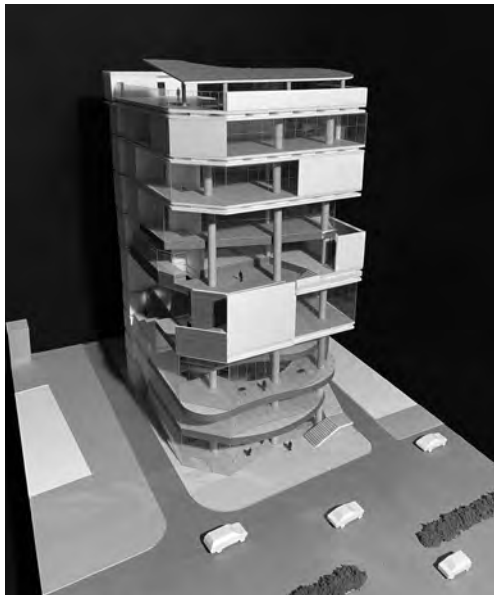
Street Live Building

敷居の低い音楽空間

都丸優也

TOMARU Yuya

敷居の高い南青山のまちに対し、あえて対極な敷居の低い音楽体験空間を提案する。まちの堅苦しさを払拭し、まちと企業の双方の親しみやすさを生み出すことを目的とした、YAMAHAのコマーシャルコンプレックスビルである。



情報が混在したネットワーク網

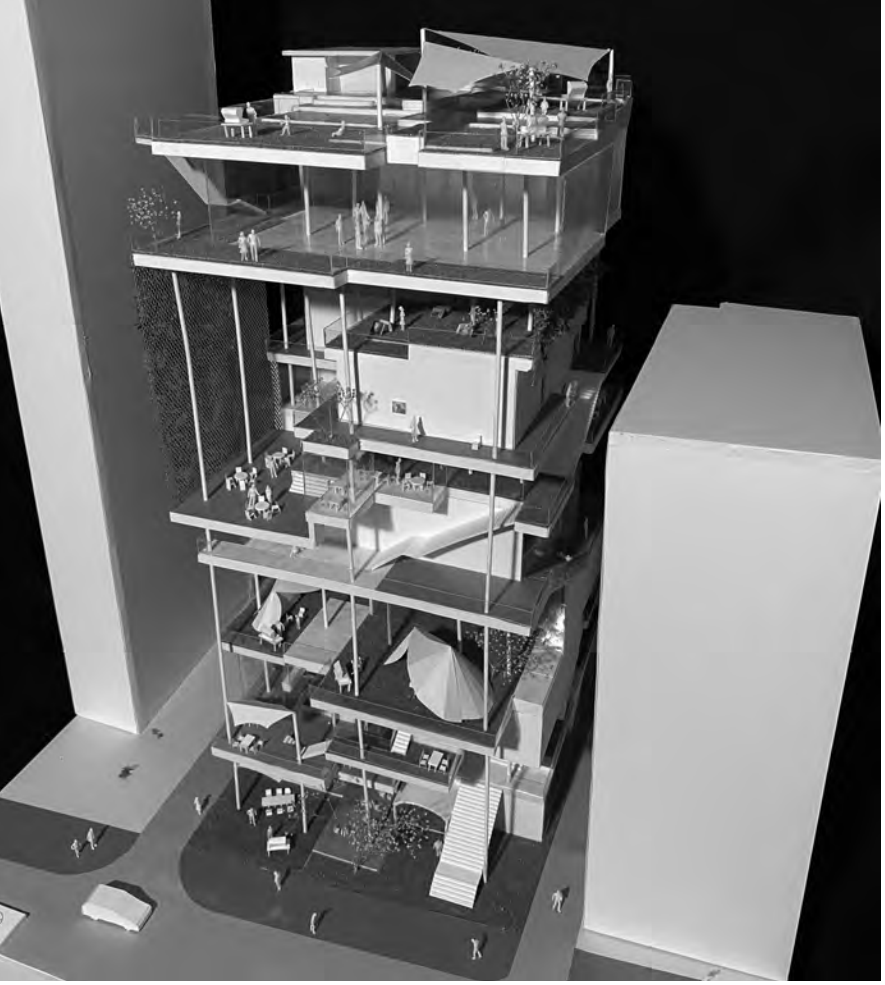
ネットワークを視覚化したコマーシャルコンプレックス

大石真輝

OISHI Masaki

Intelの企業理念からネットワークをイメージした網目状の通路で空間を構成した。網目状の通路は建築内部を通り越して隣の建物まで広がっていく。多方向から人や情報が流れ込み、新たな出会いや発見をつくる。





重なりが繋ぐ都市的自然空間

大野維親
ONO Ichika

衣食住働遊を都会では感じることの少ない自然に絡めることで、新しい生活スタイルの提案とブランディングを狙った。キャンプサイトの寸法を用いて、自然の不規則で快適な空間としての魅力を建築と融合させた。





路地を積み上げる

池谷琳花
IKEYA Rinka

空間を分棟配置し、まちの特徴である空中路地を入れ込み、さらに内部を客観視できる半屋外エリアを配置することで、まるで「青山の店」と「人の巡る」の関係性が立体的に組み合わさるように表出させた提案である。



空間の拡張

渡部裕介
WATABE Yusuke

自転車の洗練されたフレームの要素を建築に取り入れ、単純な操作の連続によって多様で豊かな空間を設計した。折り曲げたスラブの隙間の平行四辺形は上下階をつなぎ、動線、視線、光、音の漏れ方を制御する。



ロゴじゃない空間

木村友香
KIMURA Yuka

青山の面白い充実した「路地空間」と、Bottega Venetaが生み出した「イントレチャート」の空間。動線や各所室、線と箱、を編み込むことで、充実した空間体験が生まれる。

研究室紹介10　laboratory 10

やってみないとわからない



ゼミでの発表風景（視線の先に、諸岡先生がいます）

諸岡繁洋

MOROOKA Shigehiro

［教授／構造力学・構造設計・シェル構造］

1967年京都府生まれ。滋賀県立膳所高等学校卒業、京都大学工学部建築学科卒業、修士修了・博士後期課程中途退学。1995年京都大学防災研究所助手、2003年同大学建築学専攻専任講師、2005年東海大学工学部建築学科准教授を経て、2013年より現職。小学生のころからモニターやキーボードもつながらないワンボードマイコンが自宅にあり、マイコン専門雑誌に載っていたプログラムソースを入力したり、改変したりして遊んでいた。

外力を受ける構造物の挙動を数値解析的に調べて簡便な設計式を提案することや、これまでに実現していない構造形式の構造計算方法を含めた提案を目的とした研究を行っています。

在籍中の学生と行っている具体的なテーマは、「什器の地震時の挙動」「孔の空いたスラブの力学的性質と設計方法」「直交異方性スラブの設計法」「シェル形状の最適化」「ワイヤーの大変形による可変構造物」です。これらの内容をグループに分かれて実験や数値解析により検討し、全体のゼミでプレゼンテーションして自身の理解を深め、より高度な内容へと研究を進めていきます。

「什器が飛び跳ねる」「最適化」といった、学部の授業では扱わない内容も多々出てくるため、新たに勉強しなおすことも多く大変なようです。上記以外では、小さな建築模型の変形を画像解析して断面力を出したり、平らな板を曲げながらつなげて曲面をつくる手法の提案も行っています。

研究室紹介11　laboratory 11

形と力の関係は意外と単純!?



研究室の院生たちと（左が山本先生）

山本憲司

YAMAMOTO Kenji

［教授／構造力学・計算力学］

1971年愛知県生まれ。1994年名古屋大学工学部建築学科卒業。1996年同大学大学院工学研究科博士前期課程修了。同年東洋建設株式会社入社、総合技術研究所美浦研究所勤務。1998年鹿児島大学工学部建築学科助手。2005年名古屋大学博士（工学）。2012年本学准教授。2018年より現職。

私の研究室では主にシェル・空間構造の形態や座屈挙動に関する研究を行っています。コンピュータを使ってシェル構造の形態の最適化や座屈による崩壊挙動の分析、簡単な模型実験による検証なども行っています。

私の学生時代の修士論文のテーマは「曲面構造の形状最適化」でした。このころから剛性の高いシェル構造の形態をコンピュータで生成するといった研究を20年以上も継続的に行っており、これまでずっと最適化手法を使ってこの種の問題を解いていました。

最近になって、曲げモーメントを膜力で割って偏心距離を算出し、この偏心距離分だけ形をずらせば剛性の高いシェルが生成できるのではという、誰でも気が付きそうな方法に気が付き、実際に計算してみるととても上手くいきます。いままでのあの面倒な計算は何だったのだろうかと驚いています。難しく考え過ぎているけど、実は簡単にできることって他にもまだまだあるのではと考えるようになりました。

研究室紹介12　laboratory 12

新たな「適用外」を探す



卒業式の集合写真（前列中央が野村先生）

野村圭介

NOMURA Keisuke

［講師／構造設計・構造力学］

1986年長野県生まれ。2009年東海大学工学部建築学科卒業、2011年同大学大学院工学研究科建築学専攻・修士修了、2013年同大学院総合理工学研究科総合理工学専攻・博士（工学）修了。2013年より株式会社中田捷夫研究室勤務、2016年より東海大学工学部建築学科勤務、2021年より現職。

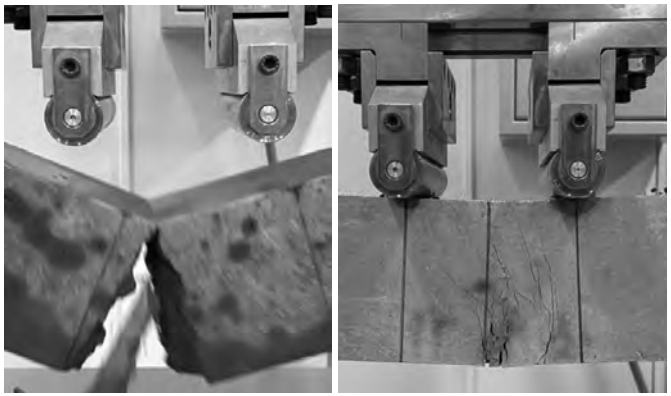
建築物には柱や梁などの構造があります。法律に安全な建築物の設計方法が示されており、それに従って「構造」の大きさや配置を考えています。ただし、その方法の対象は頻繁に使われる形状なので、はずれた条件の建築物には設計者の判断が加えられます。適切に判断すれば適用外でも安全に設計できますが、非常に多くの知識と経験が必要になります。

私の研究は、適用外の建築物に適切な判断を下せる術を提案することが目的です。さまざまな形状の建築物あるいは設計条件から適用外となる範囲を調査し、適切な設計方法を理論や実験により検証します。さらに、より広い範囲に適用できるように一般化する・誰でも使えるように簡略化することで、さまざまな建築物にも適用可能な方法の確立を目指しています。

最近は、建築物を支える地盤の研究に力を入れています。これまで軽視されていた宅地地盤に着目し、地盤を正しく評価する調査方法を企業と共同で研究しています。

研究室紹介13　laboratory 13

地球環境配慮型高流動・高靭性コンクリート



一般的なコンクリートの曲げ試験（左）と、R-HFDFRCの曲げ試験（右）

渡部 憲

WATANABE Ken

［学科長・教授／コンクリート工学］

1992年愛知工業大学卒業。1994年愛知工業大学院建設システム工学修了。同年4月、東急建設（株）入社。東関東支店作業所勤務を経て、技術研究所勤務。2000年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻入学。2003年同大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程修了。2004年3月東急建設（株）退社。同年4月より東海大学工学部建築学科勤務、現在に至る。

私の研究室では、地球環境配慮型高流動・高靭性コンクリート「R-HFDFRC：夢のコンクリート」の研究を行っています。一般的なコンクリートは圧縮（押す力）には強いのですが、引張（引く力）には非常に弱い材料です。鉄筋コンクリート建築物の壁などにひび割れが生じているのを見かけることがありますが、これは、コンクリートの引張強度が非常に低いためです。ところが、R-HFDFRCは、押しても引いても壊れ難いという、不思議なコンクリートなのです。

このような材料を、「夢のコンクリート」ではなく、「現実のコンクリート」として世の中に提供できれば、当然、これまで以上に環境に優しい、耐久性の高い、地震に強い鉄筋コンクリート建築物が実現するはずです。そのため、日々、学生さんたちとR-HFDFRCの研究を進めています（写真は、一般的なコンクリートとR-HFDFRCの曲げ試験の様子です）。

研究室紹介 14　**laboratory 14**

大学を遊び倒そう



建築実験サークルMACのワークショップ（手前のコテを持っているのが横井先生）

横井 健

YOKOI Takeshi

［准教授／建築材料・建築施工］

1993年福島県立会津高校入学。1996年東京工業大学入学。2000年同大学工学部建築学科卒業。2002年同大学大学院修士課程修了。2005年同大学院博士課程修了。博士（工学）。2007年より現職。

横井研究室の研究対象は、仕上げ材料と、施工品質確保に必要な労力の、大きく2つです。仕上げ材料は、建物の使い心地や日常的な安全性に大きく影響します。評価するのは人なので、人の心を数値化して検討する必要があります。高校までの科学とは異なる、工学の特色が最も強く表れる分野です。

また、現場では、工期・工費を重視するあまり必用な労力を削り、不具合が多発しています。コストだけを見るのではなく、目的や品質への影響を正しく分析して、コスパの悪い部分を改善する必要があります。

学生のころは、他学科の先生が主催の「たたら製鉄部」に参加するなど、毎日朝から晩までキャンパス内にいました。大学は単なる授業を受ける場所ではなく、真の学びは放課後にあるとさえ考えています。今では、学科学生有志の建築実験サークル「MAC」の顧問や、大学公認サーフィンサークル「CORE」の部長教員を引き受けています。ぜひとも大学を遊び倒してください。

研究室紹介 15　**laboratory 15**

自然の恵みがもたらす快適で持続可能な住まいの環境



エネルギー地産地消を測る中山間地の調査の様子（木質バイオマス集積所「木の駅 道志村」にて）

高橋 達

TAKAHASHI Itaru

［教授／建築環境設備・パッシブデザイン・再生エネルギー利用・住みこなし・エコハウス］

1968年神奈川県生まれ。1991年武蔵工業大学工学部建築学科卒業。1993年東京工業大学大学院社会開発工学専攻修了。1994–1995年（株）大林組（設備職）。1998年武蔵工業大学大学院博士課程修了。2001年福岡工業大学専任講師。2005年東海大学工学部建築学科准教授。2013年より現職。2017年4–9月オーストリア国立術研究所客員科学者。

自然の恵みを活かすエコハウスとそのために必要となるライフスタイルについて研究活動を行っています。

住宅の断熱と遮熱の性能を十分に備えた設計にすれば、初夏と晩夏では自然換気で涼しく過ごせますし、冬は少ない化石燃料の使用量で快適な暖房が行えます。投入資源を化石燃料ではなく、薪や木質ペレットといったバイオマスにすれば、再生エネルギーなので、貴重な地下資源を費やすことなく持続的な住まい方になります。

みなさん意識していないのが普通ですが、空から降ってくる雨水でトイレの洗浄水量をまかなえることや、南関東地域は5〜10月に晴天日であれば太陽熱温水器を使うことで給湯用にガス・電気を使わないで済みます。

一般には、住まい方は無意識的な習慣になっています。エコハウスはそれに見合った住まい方を要求しますので、住まい手が意識して自然の恵みを活かす住まい方を選び・実践する過程についても研究しています。

研究室紹介16　laboratory 16

見えないものをデザインする



研究室の集合写真（中央が山川先生）

山川 智

YAMAKAWA Satoshi

［特任教授／建築都市環境設備計画］

1969年東京都生まれ。1991年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1995年同大学大学院建設工学専攻修士課程修了後、東京電力（株）入社。2020年芝浦工業大学大学院地域環境システム専攻博士課程修了。2021年に東京電力（株）を退職し、現在に至る。博士（工学）。空気調和・衛生工学会賞、省エネ大賞、環境デザイン賞等を受賞。共著書に『ZEBのデザインメソッド』（技報堂出版）、『Carbon Neutral 2050 Outlook』（日本電気協会）など。

建物の形態や色をデザインする。これは建築デザインの醍醐味の一つだと思います。ただ私の研究室では、形態や色のデザインとは異なる「目に見えないものをデザインする」ことについて研究しています。

快適で気持ちのいい室内環境を創造することは、建築設備の大切な役割の一つですが、目に見えるものではありません。快適な環境のためにエネルギーを消費し、それに伴い温室効果ガスが排出され、そして気候変動が深刻化していきます。これらはすべて目に見えません。これらの課題を解決してゆくために「目に見えないものをデザインする」研究を進めています。

今年、オフィス空間の香りのデザインに関する研究を始めました。建築用の香りセンサーを開発された神奈川県町田市の企業と一緒に、香りを数値化することによってデザインする手法を提案したいと考えています。

見えないものをデザインする。そして、そのいいデザインとは？ 研究は続きます。

研究室紹介17　laboratory 17

健康で快適な光環境を



実験条件の検討風景（右が篠原先生）

篠原奈緒子

SHINOHARA Naoko

［特任准教授／建築環境工学（光・視環境）］

1979年神奈川県生まれ。東海大学工学部建築学科卒業。同大学大学院博士前期課程修了。裕幸計装株式会社を経て、株式会社日建設計に転職。光環境計画の専門家として従事。在職中に東海大学博士後期課程修了。博士（工学）。日建設計退職後、現在に至る。国際照明デザイン賞 Distinction（東京スカイツリー）、日本照明賞（皇居外苑照明設備等低炭素化整備）など受賞。共著書に『見る・使う・学ぶ 新世代の環境建築システム』（技法堂出版）など。

ヒトの生体リズムが24時間で形成されているのは太陽光による影響が大きい、というのはよくご存じのことと思います。このことから光とヒトの健康は強く密接していることがわかります。

近年、ヒトの健康や快適性に注目が高まり、建築空間のあり方が見直されてきています。特に、コロナ禍における社会情勢の変化により求められる建築空間は変化しています。光環境については積極的な自然光利用や照明のLED化による付加価値の高い照明空間の創出など、さまざまな対応が求められています。また、カーボンニュートラルの実現も大事なテーマで、「電力をなるべく使わないこと＝我慢すること」が正義と思われがちですが、緊急避難的ではなく我慢を持続させるのは難しいです。

ヒトの心理・生理や視覚特性を理解し、カーボンニュートラルを実現しつつも満足度の高い、豊かな光環境を建築空間を提供するための研究を行っています。

研究室紹介18　laboratory 18

光環境を最適化し安全安心な空間の実現



太陽放射計測システム

竹下 秀

TAKESHITA Shu

［准教授／光環境評価・光計測］

1967年兵庫県生まれ。1995年東海大学大学院工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。1998年第40次日本南極地域観測隊越冬隊員。2000年国立極地研究所COE研究員。2003年東海大学総合科学技術研究所講師。2018年東海大学工学部光・画像工学科准教授。2022年より現職。ISO/TC274「光と照明」国内審議委員会委員長。日本光医学・光生物学会評議員。

屋内外光環境評価および光環境評価に使用する計測器の開発・評価に関する研究に取り組んでいます。

私の主の研究テーマは、1980年代からの全地球規模の環境問題である成層圏オゾン破壊に伴う太陽UV-B紫外線の増加に関するものです。成層圏オゾンは2000年代に回復期に入り、2050年代後半には破壊前の状態に戻るとされています。しかし、太陽UV-B紫外線はいまだに世界各地で増加し続けています。太陽UV-B紫外線の増加は、私たち人間の健康問題の増加だけではありません。地球上で生活するすべての動植物に対して悪い作用を及ぼし、これが私たちの生活に跳ね返ってきます。

私は1990年から東海大学湘南校舎において独自に開発したUV-B計測器を使って太陽UV-B紫外線を連続観測しており、太陽UV-B紫外線の長期的な変動や成層圏オゾン減少以外の要因を探求しています。さらに屋内の光環境についても評価・解析しています。

研究室紹介19　laboratory 19

環境に対する人の感覚や無意識的／意識的行動を解明する



2021年度中野研究室集合写真（前列中央が中野先生）

中野淳太

NAKANO Junta

［准教授／建築環境学・建築設備工学・熱的快適性］

1974年英国生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業。同大学大学院博士後期課程学位取得。早稲田大学理工学部専任助手、東海大学工学部建築学科専任講師を経て現職。2016年日本建築学会奨励賞受賞。著書に『健康に暮らす住まい9つのキーワード 設計ガイドマップ』（共著、建築技術）、『しくみがわかる建築環境工学 基礎から計画・制御まで』（共著、彰国社）、『快適な温熱環境のしくみと実践』（共著、空気調和・衛生工学会）など。

人の視点から建築や環境のあり方を考える研究をしています。

これからは建築分野でも、脱炭素社会に大きく貢献していかなくてはなりません。人は暑さや寒さから逃れるために空調のエネルギーを使っています。ですが、みんなが無理に我慢することが、良い社会につながるわけではありません。人間の生理、心理、行動を知ることで、ZEB（ゼロ・エネルギー・ビル）のように、賢くエネルギーを使える建築ができます。

たとえば、私たちはその日の気候に合わせて毎日の衣服を選びます。暑ければ日陰に入り、服の袖をまくり、うちわで扇ぐなどして、何も疑問に思うことなく自分自身を環境に適応させています。人の環境適応ポテンシャルを建物内でも活かせれば、快適性を犠牲にすることなく、空調エネルギーの削減が可能になります。

利用者が自分自身を心理的にも行動的にも適応しやすい建築と設備のあり方を解明するために、実際の空間での人の行動や感じ方を研究しています。

近年の卒業設計・卒業論文・修士論文の学外受賞者

【卒業設計】

2021年　第53回 毎日・DAS学生デザイン賞 佐野正一賞
「真鶴を継ぐ―― 修繕によって蘇る採石場の新たな風景」松本乙希(野口直人研究室)

2021年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 銀賞
「弔いの聚落―空間化された墓の群れで成す新たな都市のランドスケープ」太田 匠(野口直人研究室)

2020年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 総合資格学院賞
「都市の〈非場所化〉―モルフェームを用いたこれからの渋谷商業空間の再構築」三尾圭祐(岩崎克也研究室)

2019年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 審査員特別賞
「西戸部の笠―基壇のまちの拠点となる少量多品種的空間」前川 凌(野口直人研究室)

【学外設計競技入賞・入選作品】

2021年　第1回つなぎコンペ 入選／課題「も・ちを創る」(主催:つなぎコンペ実行委員会)
大星史人(岩崎克也研究室)、大形一誠(岩崎克也研究室)、岩田明広(山川智研究室)、菅谷有裕(河内一泰研究室)

第8回 宇宙建築賞 優秀賞／課題「スペースポート」(主催:宇宙建築コンテスト実行委員会)
大渕光佑(岩崎克也研究室)、酒井賢一(河内一泰研究室)、山田康太(野口直人研究室)

建築学生ワークショップ明治神宮2021 協働設計課題 第3位(主催:AFF／アート&アーキテクトフェスタ)
大形一誠(岩崎克也研究室)他、他大学学部学生5名との協働設計チーム

2020年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 総合資格学院賞
「都市の〈悲場所化〉―モルフェームを用いたこれからの渋谷商業空間の再構築」三尾圭祐(岩崎克也研究室)

2020年　第8回 都市・まちづくりコンクール 審査員特別賞
「高円寺再反転―街の雑然性と規則性から創り出す高密度街区の再編計画」山田康太(野口直人研究室)

2019年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 審査員特別賞
「空間を食べ比べるように―小さな変化の連続が街をやわらかく繋げる」佐々木大樹(野口直人研究室)

2018年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 審査員特別賞
「街にシワを寄せる―虚構のある代々木上原」王 欣(吉松秀樹研究室)

2016年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 銀賞
「個性に寄り添う建築―LGBTを個性と認めるクリエイティブセンタ」村上真緒(杉本洋文研究室)

2015年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 金賞
「日常は壁一重―街と家族が寄り添う少年院」中津川毬江(杉本洋文研究室)

2013年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 審査員特別賞
「じいちゃんが障碍を教えてくれた―光のグラデーションが作り出す生活の秩序」大越菜央(吉松秀樹研究室)

2013年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 審査員特別賞
「時かける建築―風化への意識改革の場」鈴木和真(渡邉研司研究室)

2012年　JIA神奈川・卒業設計コンクール 銅賞
「隙間が生み出す街の虚景―クレショフ効果を用いたYokohama landscape movie museum」
桜井 寛(杉本洋文研究室)

【卒業論文・修士論文】

2021年　日本建築学会 優秀卒業論文賞
「1900年パリ万博におけるコンコルド門のデザイン過程について
―建築家ルネ・ビネの生物学的形態研究を中心に―」小山裕史(渡邉研司研究室)

2020年　日本建築学会 優秀卒業論文賞
「〈あばら家〉の美学―絵画史料の荒廃表現にみる建築観の変容」打越凛太朗(小沢朝江研究室)
「東京国立博物館表慶館の設計・建設過程と細部意匠の意味」吉川春奈(小沢朝江研究室)

2019年　日本建築学会 優秀卒業論文賞
「部屋用途と着座からみた畳敷きの使い分けと成立背景」近藤美鈴(小沢朝江研究室)
「マムルーク朝期カイロのムカルナスに対する計算幾何学的検討
―3次元パラメトリックモデルに基づいたセミドーム形態の変遷についての検討」山田弦太朗(伊藤喜彦研究室)

2017年　日本建築学会 優秀卒業論文賞
「伊勢神宮の式年造替における古殿・古材の撤下とその背景」増澤水緒(小沢朝江研究室)

2016年　日本建築学会 優秀修士論文賞
「戦前期の農村経済更生事業における住宅改善の施策と実態
―東北地方の開墾事業・農村指導者教育にみる先進性」猪狩 渉(小沢朝江研究室)

2016年　日本建築学会 優秀卒業論文賞
「隠居の住宅史―民家における2世帯居住の地域差と平面の関係」今泉奈々絵(小沢朝江研究室)

2015年　日本建築学会 優秀卒業論文賞
「民家における樹種の使い分けとその地域・年代傾向―「適材適所」の成立背景」濱崎源記(小沢朝江研究室)

2012年　日本建築学会 優秀卒業論文賞
「昼光利用大空間オフィスの在席検知システムを用いたブラインドのゾーン制御に関する研究」
谷口智子(岩田利枝研究室)

建築学科教員・非常勤講師一覧（2021～2022年度）

常勤教員（計画系9名、工学系10名、計18名）

計画系

岩崎克也（学部長・教授／建築設計）
河内一泰（特任准教授／建築設計）
野口直人（助教／建築設計）
山﨑俊裕（教授／建築計画）
十亀昭人（准教授／宇宙建築）
後藤 純（特任准教授／都市計画）
小沢朝江（教授／日本建築史）
渡邉研司（教授／近代建築史）
稲益祐太（特任准教授／西洋建築史）

工学系

高橋 達（教授／環境設備）
山川 智（特任教授／環境設備）
中野淳太（准教授／環境設備）
諸岡繁洋（教授／構造）
山本憲司（教授／構造）
野村圭介（専任講師／構造）
渡部 憲（学科長・教授／材料施工）
横井 健（准教授／材料施工）
篠原奈緒子（特任准教授／環境設備）
竹下 秀（准教授／光環境）

非常勤講師（計画系22名、工学系9名、計31名）

建築界の最前線で活躍されている先生方を、非常勤講師として数多く招いています。

計画系

明野岳司（明野設計室）
伊藤州平（81A-）
井上 玄（GEN INOUE）
金子哲也（K-PLANNING）
楠 英恵（ミント・建築スタジオ／2019年度）
佐屋香織（ピークスタジオ一級建築士事務所）
篠崎弘之（篠崎弘之建築設計事務所）
白子秀隆（白子秀隆建築設計事務所）
手塚由比（手塚建築研究所）
冨永哲史（冨永一級建築士事務所）
納谷 新（納谷建築設計事務所）
長谷川栄子（設計室青）
長谷川 祥（香山壽夫建築研究所）
番場俊宏（エイバンバ）
彦根 明（彦根建築設計事務所）
平本 玲（瑛月草雨）
藤田大海（藤田大海建築設計事務所）
森 昌樹（MORIIS ATELIER）
森屋隆洋（MORIYA一級建築士事務所）
山口紗由（メグロ建築研究所）
山下貴成（山下貴成建築設計事務所）
梶浦 暁（梶浦暁建築設計事務所）

工学系

池嶋千里（K-PLANNING）
横山綾子（蒼設備設計事務所）
小山 珠（アルテス）
武智耕太郎（ジャパンホームシールド）
中江 隆（戸田建設）
中里彰人（システム計測）
白都 滋（東急建設）
太田 賢（慧構造設計一級建築士事務所）

卒業後の進路

卒業生の就職先は、建設業をはじめ製造業、不動産業と多岐にわたります。
また、教職課程や学芸員課程を設け、資格を取得できる環境も整えています。

卒業生の主な就職先［2021年度］

■建設業（ゼネコン、サブコン、住宅メーカー）

大林組、鹿島建設、熊谷組、五洋建設、清水建設、大和ハウス工業、大成建設、
高松建設、竹中工務店、東急建設、戸田建設、長谷工コーポレーション、前田建設工業、
一条工務店、住友林業、セキスイハイム、タマホーム、ポラス、三井ホーム、旭日電機工業、
ジャパンホームシールド、高砂熱学工業、日本コンクリート工業、日比谷総合設備

■不動産業

オープンハウス、小田急ハウジング、大東建託、東急コミュニティー、野村不動産

■設計・サービス業

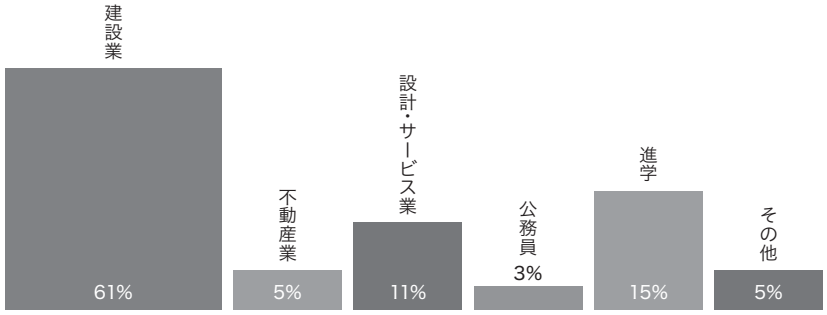
アルテス、匠設計コンサルタント、ハシゴタカ建築設計事務所、彦根建築設計事務所、
MORIYA AND PARTNERS、RIA設計事務所、ライズ構造設計

■公務員

厚木市役所、川崎市役所、千葉県庁

■その他

共栄商会、東海ホールディングス、ネクスコ東日本エンジニアリング、東日本旅客鉄道





TOKAI UNIVERSITY ARCHITECTURE YEARBOOK 2022
東海大建築ブック
建築都市学部 建築学科作品集 vol.42

2022年11月1日　初版発行
ⓒ東海大学 建築都市学部 建築学科

編集委員：河内一泰
企画・編集：河内一泰

編集協力：フリックスタジオ（高木伸哉、石田貴子）
アートディレクション・デザイン：黒田益朗、川口久美子
発行：東海大学 建築都市学部 建築学科
〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1　TEL 0463-58-1211
印刷・製本：藤原印刷株式会社